

汝、新橋の皇帝の神威
を見よ

アあゝ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気付いたら新橋でシンバシルドルフになった新橋さんが会長にシンパシーを与える話…になるかも知れない。

日暮里の皇帝とキンバリーの皇帝は不在です。

目次

気付いたらシンバシ	1
初めて全力で走れた日	11
出会い	24
因子継承、東京競馬場にて	39
『シンバシドルフ』	57
オーブンキャンパス	70
邂逅	86
蹄鉄	104
憧れとの走り	119
クールダウン	133
『ようこそ』	148
シリウスとシンバシとボク	164

波乱の二学期	185
ストレッチと与太話	200
はちみーと帰り道	214
週末の再会	230

気付いたらシンバシ

神はいる。そう思うと同時に悪魔もいると、そう思った。

気が付けば、生まれ変わりだとかそういうのを信じていたことを、若いころの恥ずかしい笑える思い出だと考えるような年齢になっていた。

今思えばなんてことのないような物事で『人生終わった』とか『来世に期待』だとか考えて頭の中がぐちゃぐちゃになって親に迷惑をかけてしまった。

けれどそんなことがあるとうと世界が終わったりすることもなく、人生が終わることもなくそれなりの人生を過ごしてきた。その時々の後悔があらうと今の自分は確実に不幸ではないし、不出来な自分を育ててくれた両親には言葉では言い表せないほど感謝している。

……なぜそんなことを回顧しているのか、それはそんな人生がいきなり大きく形を変えてしまったからだ。

「良い勝負にしよう」

「……そうですね、お互い後悔の無いようにしましょう」

目の前には栗毛の髪、前髪に白い三日月のあるウマ娘がいる。

無敗の三冠ウマ娘であり、トレセン学園の生徒会長を務めるウマ娘、シンボリルドルフだ。

何の因果か私は彼女と勝負をすることになった。この状況は全国のウマ娘が憧れるものなのかもしれないが私にとっては少し違うものになる。

私と会長とのタイマン勝負は他人の視点からみると奇妙なものに写るだろう。

私の姿は彼女とほぼ同じ、同じ赤いジャージを着ているのもあって、一瞬でも目を離せばどちらがどっちなのかわからなくなるから。

今の私の名前はシンバシルドルフ。

どこかの神か悪魔のいたずらでウマ娘という不思議生き物になってしまった元一般人であり、何を思ったかとち狂って走ることにドはまりした結果、彼女と同じ領域へと到達してしまったウマ娘。

今回は模擬レースではあるが、酒に溺れでもしない限り彼女にさえも負けるつもりは

ない。

「あの、あのー、大丈夫ですか？」

……声がする、その声に合わせて意識がだんだんと覚醒していく。
どうやら寝てしまっていたようだ。

「いっは……っ。」

寝ぼけた意識と眼で声をかけてくれた人に返事をする。

「あ、起きましたか、良かったです！」

「いやあ申し訳ないです、どうやら寝てたみたいで……」

「……不躰なことをお伺いしたいんですけど、シンボリルドルフさんですよ？ 握手しててください!!」

「え？ ええ」

シンボリルドルフ……？ 芸名だろうか？ 新堀留怒琉夫かもしれない。

どこかで聞いた覚えのある名前に疑問符を浮かべながらも一応握手をする。

この人にとっては私がそのシンボリルドルフという人に見えているのだから、起こしてくれた手前落胆させてしまうのも忍びない。

「よかったらサインも って、あれ!!」

感傷に浸っているっぽいのでその隙について感謝して颯爽とその場から立ち去る。

これ以上は不毛だ。

シンボリルドルフ氏とはいったい何者だろう？

たぶんそっくりなのであろう私に対して握手どころかサインまでねだるような、そんな熱心なファンがいるなんて有名な俳優か何かなんだろうか？

何かまだ言っていたかもしれないけど、申し訳ないがお暇させてもらう。

記憶を頼りにするならばここは新橋、仕事終わりに気分転換に慣れない酒を飲んだのがいけないのだろうか、夜遅くまで飲んだような記憶はないのに、もう日が高く昇ってしまっている。

先ほどの場所から少し距離をとるために新橋駅沿線を秋葉原駅方面へと歩き始める。……どこかおかしい。まだ頭が働かないからかよく分からないのだが、歩くとび違和感を感じる。

何かに覆われて耳が遠くなったような感覚や腰のあたりで何か引掛かっような感覚、そして自分の自意識過剰でなければ周りの人から視線を感じる。違和感を感じながらも人が少ない場所を見つけ、そこで荷物の確認を始めた。

財布、スマホ、家の鍵、免許証……。

「………ん？」

おかしい、免許証がない。いやそれだけじゃない、待ってほしい。

「誰??」

身分証の写真欄、そこには見慣れぬ顔写真が写っている。

まず目を引くのは白、前髪あたりを斜めに例えるならば下弦の三日月のように白髪が流れてあり、前髪の他の部分は濃い茶色に、そして後ろ髪は茶髪へと色が変化している。

現実味を感じない髪の色をした少女の写真だ。

結構なポリウム感があつて耳が見えなかつたり、滅茶苦茶寝相が悪かつた日の朝みたいな寝癖のような突起が二か所あるが随分と、いやとても美少女だ。

写真の横には生まれてから長い間お世話になつている苗字がなぜかカタカナ表記されており、その横には初めて見るがこの短時間で滅茶苦茶聞き覚えのある名前が書いてある。

『シンバシルドルフ』

「……う？でしよ」

無意識に声が漏れ出る。それと同時に変な汗がにじみ出てくる。働かなかつた頭が

急速に覚醒して現実を直視し始める。今この時までには見知らぬ誰かの持ち物を拾って持ち込んでしまったのではないかと考えることができた、声も気づかなかった。しかしいざ自覚してしまおうと途端に異常だと理解してしまう。

私は今どうしようもなく恐ろしい状況に見舞われているのではないか？

そう考えると急に異常に胃腸が痛くなってきた。

自然と視線は両手へ向く。華奢だ。自分の手じゃない。

私のものではないはずの手は、思った通りに自分の顔へと手を伸ばす。

そして触れた瞬間解ってしまった。この体は写真の少女のものだと、自分の乾燥した不健康な肌の代わりにあるのはなんだかしつとりもっちりした肌だ。なんだかすべすべしている。

「……………そうはならんやろ」

酒の魔力におぼれたら美少女になるなら今頃全世界美少女に埋め尽くされてるわ、という現実逃避めいた考えに厳しい現実が「なつとるやろがい!!!」と大声で右ストレートを放ってくる。

思わず髪を掻きまわしたいと思ひ手を頭部にスライドさせるとなにかある……

なんだか耳を触っているような感覚が走り鳥肌が立つ、ふと写真の寝癖らしき場所と同じだと気付いき、そしてまた気づいてしまった。

なんかなくなってる……

側頭部にあるはずの耳がない。耳なし芳一のごとく取られたのか思ったものの、さつきから音は聞こえている。

なんだか視点よりも高いようになって……！

「そうはならんやろ……」

気になってた突起物のあたりから音を感知している気がする、これ耳だわ。そんな気がするると途端にピクツと感覚が延長して動くようになった。どこかの建物から「なるやろがい！」と聞こえてきた気がした。

この感触はアレだ、犬や猫とかの獣の耳を触ったときのような触感だ。

すわケモ耳娘にでもなったのかと思いつつも、そういえば腰にも違和感があったことを思い出して錆びたナツトのような速度で患部を見る。

尻尾があつた。

まあ、そうなるだろうなと何度か深い衝撃を受けたからか冷めた目で尻尾を観察す

る。

今の自分の気持ちを表すかのように重力に従っている尻尾の特徴は馬のようだった。多分馬だと思う。

なるほど、どうやら自分の特徴から見えてうまつぽいし、ウマ娘とでもいうべき未確認生物になってしまったことが理解できた。ははーんこりや夢だな。

「こうはならんや……ろ……」

夢だと認識した瞬間、意識が急速にシャットアウトされていく。環境の変化か、体はストレスでスタボロになっていたようだ。

———だけど目が覚めたら元通りだ。

そう信じて私の意識は沈んでいった。

「担当医です」

「は、はは、はあ」

自然と口から乾いた笑いが出てくる。

どうやら現実だったらしい。

心のどこかでヤケクソのようになってるやろがい!!
という叫びが上がった。

初めて全力で走れた日

ウマ娘という人間と馬の特徴を併せ持った生命体になってから暫くが経った。

気絶して目を覚ましたら病院にいたことには大いに困惑したけれども、それはあの時声をかけてきた人がついてきていたようで、倒れたところに救急車を呼んでくれたかららしい。

彼女自身、病院勤務でしかもウマ娘だったらしく病院で再び会った時にはとても驚いた。

シンボリルドルフ氏じゃなかったことは本当に申し訳ない……。

病院から特に異常はないということで退院してから数日経ったもの……。

いや、人間数十年慣れ親しんだものをなくすとどうすればいいかわからなくなるもので……。

新しい電子機器に慣れることができない人の如く、人の耳とアレとは今生の別れとなってしまうことは現実だと受け入れ、新しく世話になることになったウマ耳としてぼには当惑しながらも慣れていくしかない生活を送っている。

しかし逆に二度と会えないと思っていたものに出会うこともできた。

入院時、病院から家族へと連絡をしていたようで、この体の両親が来ていた。

本来のこの体の持ち主に対する申し訳なさと、ご両親に對しどういった態度をとればいいかといった悩みからぶつちやけあまり会いたくはなかったが、顔を合わせた瞬間そんな考えは紙吹雪のように吹き飛んでしまった。

亡くなったはずの父と母が記憶の中より若い姿で私の目の前に現れたのだ。

今の今まで夢であることを願っていたはずなのに、この時から夢でなければいいのにと思い始めてしまった。

二人は心配していたのだろう、母の目には泣きはらしたような跡が見えるし、父も素振りから平常心ではなかったように見えたが、それはこちらもだった。

聞き覚えのある声色が聞こえるたびに目が潤み前が見えなくなり気が気ではなくなってしまう年甲斐もなく泣きわめいてしまった。

この体の本来の持ち主、つまりシンバシルドルフさんの両親であつて自分の両親ではないとわかっているものの、しかし同じように接したいと思ってしまう。

便宜上これからは今までの人生を前世と呼ぶが、前世にお世話になった分、両親には親孝行がしたいと心から思ったのだ。

なんとか持ち直し、担当医の人に診断内容を聞いた後家に帰ることになった。

その道中で何度もウマ娘を見かけたため、自分はこの世界はそういう世界なんだな、と割り切ることもできた。両親に連れられて帰った先も、想像通り幼少期を過ごした懐かしの我が家であった。

言いようがないノスタルジーを感じながらも、そこで私は自分の姿を観察することにした。

鏡を見て姿を改めて確認してみると、なるほど勘違いして声をかけてくる人もいるな、と納得する姿をしていた。

冷静になってみればウマ娘というものには聞き覚えがあった。近頃流行りに流行っていたような記憶がある。

キャラクターをインターネットで時折目にしていて、中にはシンボリドルフという名前のウマ娘もいた。もし遊ぶような余裕があったのならドはまりしてもっとこの状況に素直に歓喜ができたのかもしれないと少し後悔の念を覚えてしまう。

自分の姿は記憶の中のシンボリドルフとほぼ同じだ。少し違う点と言えば覇気を感しない所だろうか。

……濁ったように見える目は自分のせいだと思いたい。

そんなわけで現在、シンバシルドルフとして日常生活を送っているわけなのだけど、型にはまった生活を送っていた影響か、新しく何かをするということに中々踏み切れずにいる生活を送っている。

この体はどう高く見積もっても大学生程度の幼さを感じるので、学生生活は大丈夫なのかという懸念があつたけれど、私のことを気遣つてか父さんも母さんもあまり踏み込んでこない。

自分の娘が新橋で倒れてたと聞いて、何かしらの事件に巻き込まれていないかとか悩みとかがあるんじゃないかと考えているのかもしれない。

少なくとも自分ならそう思う。

「母さん、河川敷までちょっと走つてくるよ」

記憶の中の母さんはよく悩んでいるなら散歩でもして来いと言っていた。

自分のことで悩ませているというのは申し訳が立たないし、これからのことを考えるための第一歩として自分について知ろうと思った私は、夕飯の支度をはじめていた母に

そう告げる。

「！　いつてらつしやい、遅くならないようにね」

「すぐ帰るよ、母さんの料理楽しみだし……じゃ、行ってきます」

心なしか明るい表情を見せた母を尻目に、私は近所にある河川敷へと向かった。

ウマ娘って軽車両扱いなのだろうかという不毛な疑問を浮かべながら数分歩いた先の河川敷に到着した。

「ここは何があっても変わらないな……ん？」

幼少期に私もお世話になった河川敷には記憶とは違い模擬レース場が作られていた。

人だった頃の記憶では、週末に草野球だったりサッカーだったりをする為に人が集まっていた辺りの一面に半ばダートのような芝のコース。

……平日だから人は居ないものの、記憶の中みたいに週末にはウマ娘の子やその家族が来たりするのだろうか？ ターフ内には走っていたのだろうかウマ娘の足跡が幾つか残されている。

「……凄まじいな、モグラの穴と見分けがつかない」

芝を抉って走り抜けたのだろうかその痕跡は人以上の力を行使していることを表していた。

それにしても今回に限って言えば近くに誰も居ないのは好都合だった。

私の見た目は無敗の三冠ウマ娘のシンボリドルフ氏とほぼ同じと言っていい。自惚れならどれほど良かったか。

キャラクターとして知っているだけの私が一目見ただけでそう思うほどなのだから、現地の人にとってはそれ以上の物だろう。

新橋で目覚めた時には結構な衆目を浴びて少し騒動になってしまったようなのだ。

どこかでシンボリドルフ氏に出会った際には迷惑をかけてしまったことを謝りた

いと思つている。

私にとつても、シンボリドルドル氏にとつても得にはならない。

ターフ内に入った私は慣れない仕草で構えを取る。

ここに来た目的は一つ、自身の身体能力の把握だ。

ウマ娘が馬と同じく走ることを得意としていることは知っているし、心のどこかで走つてみたいという本能が沸き立っている。着ている服は家にあつた動きやすそうなジャージである。

この身体になつてからずっと脱力した状態を維持してはいるが、内心どこかで全力でこの鬱憤を発散したいと思つていたのだ。

足に力を込めて踏み出そうとして、瞬間脱力した。

やば……ストレッチ忘れてた。

「いつちにーさんしー」

社会人になってスポーツから離れて何年だろうか、あまりに重要なことを忘れていた。怪我だ。

スタートダッシュで力を込めすぎてブチツとなる事や腰を痛める可能性がある。

ウマだし、確実に一馬力はあるし、この身体では尚更だろう。

……これでよし、と。

ヒヤリと変な汗をかきながらも、ストレッチを済ませてまずは軽くジョグでターフを走る。

——体が軽い。

以前の身体が運動不足すぎるとすこし不摂生気味だったのもあるだろうが、確実に今の方が速く走れている。

そして、芝であるにも関わらず足下があまり気にならなかった。

ちゃんとした靴を履いて走ったらどれだけ良いタイムが出るのか若干楽しみでもある。

さあ、いよいよ全力疾走してみようじゃないか。

「ふっ……！」

走り出した瞬間に理解する。

これがアスリートの見る世界なのかと、ヒトだった頃嫌いだった運動会の徒競走、なぜ熱くのめりこめるのか疑問だったけれど今ならわかる。これは楽しい！

速さの程度には違いがあれど今になってようやく知った。

前傾姿勢になりつつも速度を上げていく。芝の感触を味わいながら、脚を回転させる度に加速していく感覚。

風を切る音が心地よい。

「っ!!」

直線を走りながら回転のギアを上げる。景色が流れて行く様を見る余裕まであった。

まるでルーフの吹き飛んだ自動車かバイクに乗ったかのような感覚に陥る。これがウマ娘の視点なのか……。

いや、それだけじゃない。

自分の中の何かが叫んでいる。

『まだ足りない』と。

まるで全力を出せない自身の代わりに、託すようにもつと先へ、さらに上へと叫び続けている。

今の私では満足出来ないらしい。ならば私にも見せてくれよ、私の本気と言う奴を!!

「うおおおおお!!!」

タメを作って一気に爆発させるように地面を踏み砕くつもりで蹴り込む。

その勢いのままコーナーに突入し、減速しないように回転をかける。

コーナーで速度が落ちたとしても、そこからもう一度加速すれば問題はないはずだ。

そんな考えで駆け抜けてみるものの、思ったよりもコーナーでのスピードが落ちない。
い。

むしろ、加速している気がする。

どうやらこの体は想像以上に化け物のようだ。

コーナーを抜けて走り出した地点への、最後の直線を走り抜ける頃には流石に息が上がり始めていたが、しかしまだまだ余力はある。

このまま更に速度を上げて行こうじゃないか。

「はあああ!!!」

肺の中の空気を全て吐き出しながら叫ぶ。

飛び出した声はその場に置き去りになって自分の耳には届かない。

もつと早く、もつともつと速く！ 私の体はまだこんなものではないはずだろう!?

限界を超えても構わない、出し尽くせ！ 出せるものは全て出してしまえ!! 終わりが見えてきた所で今まで溜め込んでいた力を解放した。

「これが、っ限界だああ!!!」

最後の最後まで絞り尽くすようにして振り抜いた右足からは、確かな手応えがあった。

「はあ……はあ……」

走り抜けた後、その場に座り込んで呼吸を整える。

「なんなんだコレは……」

思わず声が出てしまう程に充実した時間だった。

全力を出した後の疲労感はクセになるな。……流石に疲れたけど。

もしサラリーマンのままだったら一生味わうことのなかったスピード感が私を狂わせる。

楽しかった……。

思わず走ることを生業にでもしようかと思うほど楽しかった。

明日も走りに来よう、と決めて今日は家に帰ることにした。

。。。

「うわああ……!」

一人の幼いウマ娘が河原の堤防の上からシンバシルドルフの走りを見ていた。

「どうしたんだ？ 嬉しそうな顔して」

「パパ！ あのね！ なんかすごい人がいたんだ！」

「すごい人かあ……、またここに来れば会えるかもしれないな」

「うん！」

栗毛の髪の毛のウマ娘の瞳はキラキラと、私の去った方向をじっと見ていた。

「今日のご飯何が良い？」

「おすし!!」

出合い

「おはよう！」

「おはよう、飯は？」

「大丈夫！ ありがとう！ じゃいつてきます！」

「……俺もランニング始めようかな……」

週末の早朝。朝五時、休日ということもありすべての物事の動きが緩慢になった朝。そんな時間帯に一人活発に家を飛び出していくウマ娘の姿があった。

それなりに物音を立ててしまったからか父も目を覚まして、大きなあくびをしながらも見送ってくれた。

規則的に呼吸をしながら今日も今日とて河原への道をひた走る。

ターフを全力で駆け回った日から数日、走るたびに満足どころか「また走りたい」という思いが募り続け、今では毎日のように走るようになっていた。

社会人だったころの癖で朝早く起きてもすることが無かったため退屈を持て余して

いたところを、ランニングが劇薬としてぶち込まれたことにより私の中に芽生えたウマ娘の本能ともいえるものが走ることにへの欲を駆り立てるようになっていた。

以前はどちらかといえばインドア派だったので、この変化は確実にそういったものだろうと信じている。

しかしまあ、それでも河川敷を走っている人々の気持ちはよく理解できた。

今日は休日なのでコースのほうへは走りに行かない。

前世とは形は違えど、想像通りというかコース上には走りに来た子供たちだったり、練習をするために来たウマ娘などが集まったりして混雑気味なのだ。

そのため今日は河原のサイクリングコースをジョギング気味に走ったり、時には自転車を追い抜かしたりしながら延々と走ってみることにした。

「はっ、はっ」

この河原、走ろうと思えば東京湾から奥多摩まで行くことができる絶好のジョギングスポットなので、上流へ向けて進路をとり、人がまだ多くない歩道を事故が起きない程度の速さで疾走する。

速く走ることも楽しいが、持久力の必要なエンデュランスもいざやってみると楽しい

ものだとわかる。

……というか苦手意識を持っていたのは体力がなくて最低限も走ることができなかつたからだだと痛感する。

そんなこんなで一時間近く走っていると前方に紅白のジャージを着たウマ娘を目に入れる。

「おはようございます！」

元気な声で挨拶してくるウマ娘の子に自分のできる限りの笑顔で受けごたえするとなんだかうれしそうな様子で走り去っていく。……多分絶対確実にシンボリルドルフ氏と勘違いしたな。

走っていると時々出くわすのがウマ娘だ。

自分も言えたことじゃないけどよく走ってるなと感心する。

中身がアレな私とは違って多分素で走りに来ているのだからウマ娘たち、彼女らとは走り始めてから十数キロ地点当たりの地点でよく出くわすのだ。

しかも全員同じジャージを着ているので多分学校があるんだと思う。

あ、また来た。

「あつ!! カイチヨー!!!」

今度のウマ娘の子は尋常じゃないテンションの上がりようで押しかけてきた。

鹿毛で前髪には白い流星があるポニーテールのその子は様子から見てシンボリルドルフ氏と顔見知りのように見える。

「——つ、よく、聞いてほしいんだが」

「なーに? カイチヨー?」

「この世にはそっくりさんが三人いるらしいんだが、お互いがお互いを認識したら……
そう不吉な事が起こるらしい」

「……それが、どうしたっていうのさ……?」

「私が会長に視えているかもしれないが、すまないけれど、私は会長じゃないんだ……
「……うっそだあ! じゃあなんだっていうのさ?」

「……………平社員」

「えっ?」

緊張感が無くなる感覚がした。ドッペルゲンガーで若干怯えさせて緊張感が漂い始めていたけれど平社員の一言でそんな空気は消散した。

「会長が言いそうにない事を言うからそれで信じてくれるかな？」

「ええー、じゃあ、言ってみてよ」

「考える……、考える……とりあえずこの場から抜け出すためには何をすればいい……？」

少し気ままずくなり、シンボリドルドル氏はウマ娘界のカリスマ的存在なんだろうと踏んだ私は咄嗟にそんなイメーজから逸脱した一手を繰り出す。

「……先日きゆうりの漬物をたくさん食べたんだが、そしたら倒れてしまつて誰かが救急車を呼んでくれたんだ。急患だー！　つてね」

親父ギャグだ。渾身の一撃を繰り出した私はこれで信じてもらえるだろうと確信し、若干どや顔になりつつもこの子を見つめる。どうだ……？

先ほどの快活な表情から一転、信じられないものを見たからなのか表情は固まり、耳

がべつたりと潰れているが一瞬のうちに再起動を果たす。

「いつものカイチョーじゃん!!」

違った、いつものようにギャグを聞いて凍っただけだった。

え……? シンボリドルフさんってそんなウマ娘なんですか……?

勘弁してほしい、私の中でのシンボリドルフ像が崩れ始めてきた……。

「すまないけど、用事があるから……じゃ!」

待つてよカイチョー!! という声を耳をへなつとさせて聞き流し、一目散にもと来た道を逆行する。

……もしかしたらついてきているんじゃないかと悪寒を感じながらも全力疾走する。

「待つてつてば〜!」

やべつ憑いてきてる。気づけば自分と横並びになって走っている。さすがに専門的

にやっている人とは地力が違うか……

「ーっ、そういえば」

「なーに？ カイチョー？」

「今日は約束があつたんじやないか？ 準備をしといたほうがいいと思うぞ」

「あつ！ そういえばマックイーンと遊びに行くんだつた……」

じゃあねカイチョー！ と言ひ引き返していくウマ娘の子。ありがとうマックイーン。いや本当に切実にありがとう……。

九死に一生を得た私はとぼとぼと河川敷を歩いて帰ることにした。

「あーっ！ いた！」

とりあえず自宅のほうへ戻ろうかと思慣れた道を歩いていると、前方のコースの方向

から小さなウマ娘の子がこちらへ向かって走ってくる。

振り返っても誰もいない。向き直して再びその子を見ると確実にこちらへと一直線に突っ込んできている。

……あ、これ絶対私が標的だ……。

またか、今度はもしかして走っているのが噂になってシンボリドルフさんのファンが来たとか……？ 私は内心冷や汗が止まらなくなっていた。

耳をピンと高く上げて、如何にもウキウキとした様子の栗毛の幼いその子は呆然と立ち尽くす私の目の前に立ち止まると

「あの!! 握手してください!」

と声を掛けてきた。

ああ、やっぱりそうか……。また私はシンボリドルフさんと間違えられているのか……。

屈んで目線を同じにし、握手に応じてから答える。

「ごめんねお嬢ちゃん、多分なんだけど人違いだと思う」

「え？ でもこのまえそのコースを走ってましたよね？」

「……………え？」

この子の指は模擬レース場へと向いている。

確かにいつもあそこで走っていた。

「とても自由に、たのしそうに走っててかつこいいなっておもったんです！ それでお名前を聞きたいなと思って」

純粹なその瞳に心を揺さぶられた。

この子は『私』を見ている。

「……………シンボリルドルフじゃないけど、自分でいいのかな？」

「……………シンボリルドルフさん？」

「ああ違う違う、私の名前はシンバシルドルフだよ」

そうだ。今の私はシンバシルドルフ。本物だとか偽物とかは少なくともこの子には関係ない、この子は『私』を見てくれた、その事実がどうしようもなく嬉しい。まるで

自分がこの世界に存在してもいいといわれたような感覚は心の奥底にある鬱屈としていた内心を浄化していった。

「おーい」

「あつ！ パパ、居たよ!! シンバシルドルフさん！」

「ーっ、うちの子がすみません、もしかして貴女が？」

幼かろうと足は速かったからか、やや粗い呼吸をしながらこの子の父が遅れてやってくる。

「松岡です、ほら自己紹介したか？」

「クリスです！ よろしくお願います！」

「シンバシルドルフです、よろしく」

「えっ、シンボルドルフさんではなく……？」

「シンバシルドルフです」

河原の模擬レース場へと向かう道。

せつかくだから模擬レース場まで行こうということ、クリスちゃんを手をつないで歩きながら自分は松岡さんと会話を話して話していた。

……なんとというか保護者になった気持ちになる。

「いやあ……よかったです。この子がここが気に入ったみたいで」

「……? どこか遠くからいらしたんですか?」

「ええ、実は僕の仕事の都合で北海道から出てきたんです。広い土地で育ったのでこの子に満足に走らせてやれる場所がないかと探して見つけたのがここなんです」

「いいですよ、ここ。すぐ近くに繁華街もありますし、東京とは思えないほどのどかですし」

「はい、でもそれだけじゃないですよ? この子、ここに初めて連れてきたときにルドルフさんの走りを見てから、それからここに来ると『今日はあるかな?』ってそこから走り回ってたんです」

「えー」

「どうやら走ってる姿に惚れたみたいで、家でもいつも話してましたよ」

「……それは光栄です」

自分の顔が心なしか少し熱くなった気がした。

自分なんかには憧れを抱いてくれる子がいるなんて前世含め覚えのないことの為、年甲斐もなく照れてしまう。

微笑まし気に見つめてくる様子から見ると耳としつぽが乱舞しているんだろうな。

「あの！… いっしょに走りませんか？」

気付けばレース場にたどり着いており、クリスちゃんが話しかけてきた。

早朝から河原にいたから忘れていたが、太陽もとつくに頭上に上って頭頂部を照らしている。

「併走ってことか、いいね。……いいですか？」

「もう昼なので一周だけお願いします」

松岡さんの了承を得て、昼時になり昼食を食べに人がまばらになったターフへと足を踏み入れた。

今ならば走っても特に問題はないだろう。

「じゃあいいこうか」

構えを取り、「はいー」という声を聞いて走り出す。

ここしばらく走ってみて実感したのは、自分の脚質には一步一步での踏み込むパワーを強めることよりも短い間隔でより多く足を回転させること、つまりストライド走法よりもピッチ走法が向いていることだった。

人として生きてきたころの名残なのか、どこかでパワーをセーブしてしまっており、速く走るためには回転数を上げるしかないという考えに至ったのだが、所詮素人の考えなので、プロだったらもつといい走法を編み出すのだろうけど今の私にとつての最速はこれだ。

多分傍目から見ると相当変な走りだと思う。

今日も午前中にたくさんの人々が走ったためダート同然のターフを駆ける。

心拍への負荷は当然高い。午前中の出来事でスタミナが尽きかけているため最高速を出すのは無理だが、しかしそれでも盛り上がった土を踏み鳴らしながら前に進む、風の抵抗を減らすために体は自然に前傾姿勢になっていく。

しかしそれでも力を無駄にしないようにと確実に足は大地を踏みしめる。

手への注意は薄れていた。ただバランスを保つことを意識している。

……コースの内側を走るクリスちゃんからの熱視線を感じる。

思わず視線をそちらに向けてみると……感心した。クリスちゃんは体の扱いがうまい、体幹が強いのか私の走りを見ながら走っているのにもかかわらず走りにブレがない、それに歩幅が違うにも拘らず食いついてくる。

どうやらピッチ走法が得意なのはこの子も同じようだ。末恐ろしいほどに足が回転している。

これは将来凄いウマ娘になるんじゃないかと素人ながら感じさせる走りだった。

一周走り終え、コース外へ戻り一息ついて考える。

短い時間ながらもとても有意義だった、この子の走りは今後の自分の成長のヒントになるかもしれない。

「シンバシさんと走るの、とっても楽しかったです！ また走りたいです！」
「私も楽しかったし、得るものも多かったよ。多分いつもここら辺で走ってるからまた
今度ね」

寿司を食べに行くという二人と別れを告げ、一人自宅へ歩き出す。

朝食べてなかつたので母の手料理に思いをはせながら、また今日の出会いがこれから
の自分に大きな影響を与える予感を感じながら……

因子継承、東京競馬場にて

そのレースは何というか凄かった。

生まれてから今までの固定観念がこの短い期間でただでさえ崩壊しているのに、新たに形成された常識をいともたやすく破壊する存在の暴力。

ギンシヤリボーイ、そして彼女に続く世界各地の色物たち、夢か現かわからない彼女達の存在が私のこれからの人生に多大な影響をもたらすことになるとは当時の私には知るすべもなかった。

ここは東京競馬場。

視線の先には『日本ダービー東京優勝』と映し出された巨大な電光掲示板がある。

そう、今日は日本ダービーがあるのだ。観客席の最前列に立ち背後に観衆たちの熱気を受ける。

始まりは何度か顔を合わせすつかりなじんだ松岡親子とのやり取りだった。

「どの寿司が好きなのかな？ 取るよ」

「カンパチを！」

「渋いね……」

土日にランニングを終え、寿司が食べたいということで、近所にある回る寿司屋へと赴いた。

クリスちゃんが寿司を美味しそうに食べているのを微笑ましく見つめながら私も寿司を食べながら松岡さんと話をしていた。

「えっ、じゃあ改名するんですか？」

「そうなんだ。この子の競走バとしての名前を決めてあげたいんだけど、なかなか決まらなくて悩んでるんだ。今の名前も一応生まれた当時の真剣に悩んだ名前の名残が残っているけど、その名前とはだいぶイメージが違う感じに成長したから……」

ゲイシャとかクリスタルとかに代わる新しい名前を考えているんだという松岡さん。他愛のない話をしていると彼はそう切り出してきた。

「それでどう決めたかとか参考にしたんだけど」

名前、名前といつても自覚のないままに『シンバシルドルフ』になってしまった自分は参考にならないと思う。

……なんでシンバシルドルフなんだ？　もしかしたらモチーフになった競走馬がいるのかもしれない。

「私の場合には多分苗字から来てるの……かな、或いはシンボリドルフ氏のもじりか」
「苗字か……なるほど、結構よくある話かもしれない」

メジロ家とか有名だもんね、という松岡さん。

納得してくれてよかった。こっちに来て初めてネットを見たとき、シンバシでの騒動がネットニュースに載っているのを見てからネット断ちしているからこちらで有名なものとかそういうのを全く調べていない。

メジロ家はもしかしたら『ウマ娘』の中にも登場していたのかもしれない、シンボリドルフさんの時みたいにビジュアルと名前がかみ合わないからわからないが。

「もう何か構想つてあるんですか？」

「一応、活発な男児みたいだからつてことで名前のどこかにボーイなんて付けたいなと思うんだけどね……」

クリスちゃんと走る機会を作るようになってから、この子が尋常じゃない体力お化けでそこから中走り回るのが好きなことを知ったが、父親で当然私より付き合いの長い松岡さんは、北海道の身近にウマ娘がない環境でずっと振り回されてきたのだろう。

どこか話している顔が歴戦の勇士のように見えた。

「でもやっぱり、最後に決めるのは本人がいいんじゃないでしょうか」

気付けば十皿ほど食べているクリスちゃんに視線を向けてそう呟く。

案外突然アイデアが降ってくるかもしれないし、好きなものを名前にするなんてこともあるかもしれない。

……カンパチボーイ？

「まだまだ時間はありますし、ゆっくり考えてあげたほうがいいと思いますよ」

後々困らない名前にしてあげてほしいと切実にそう思った。

「話は変わりますけど今日の走りはどうでした？」

「見てて思ったのはフォームが歪な点かな。言っちゃなんだけど、じたばたしているよ
うな……ああ、例えるならプールで前に進もうともがいているようなそんな風に感じ
た」

「なるほど……」

松岡さんは走りのうまいクリスちゃんを育てているだけあって、少なくとも自分より
はウマ娘の走りを分析するのがうまい。

最近私の影響を受けてまたフォームが崩れてきたと嘆いているが、以前はもつと混沌
とした走りをしていてクリスちゃんを何とか今の走りへと矯正したこともあるらしい。

今の私は、私の走りを松岡さんに時折見てもらおうことで、より早い走りをする方法が
無いかと模索している。

水泳で泳法があるのはそれが水中での推進力を得やすいことがわかっているからだ。
私の今の走りはその泳法を知らない人が見よう見まねで不完全な動きをしているだけ

に過ぎない。

彼の着眼点は間違っていないと思う。空気抵抗のために前傾姿勢をとるのも、脚の回転数を上げるのも間違いなのか正解なのか自分は知らない。

ただこう走ってみたいという心に従っただけの動作だ。

「……全部独学なんだよね？ 本格的に学んだら大きく化けると思うよ。トレセン生だったらスカウトしたかったんだけど……」

「どうかしました？」

「ああいや、……そういえばレースを観戦したことがないんだっけ？」

「……そうなんですよね」

そうだ。私はこの体になってから今までレースを見たことがない、それは受け入れがたい現実を直視してしまうような感覚を得てしまうからか、もしかしたら今の自分では満足できなくなってしまうからだ。

この短い期間でも一人で走ることから二人で並んで走ることへ、速さを求めて走り教授してもらうまでに私の欲は膨らんできている。

「だったら、近々頂点の走りを知るのにはちょうどいいレースがあるんだ」

「……それは、一体？」

『『日本ダービー』だよ』

そんなわけで一緒に行かないかというお誘いを受け、東京競馬場へと赴いた。

集合時刻は昼過ぎ、並んで待っていた人たちは当の昔に会場へと走り去っており、緩やかな人の流れがあるのみだ。

……本当にこの時間で合っていたのか？ という不安感を抱えながらも入り口あたりを見回すと……あ、いた。

「こんにちはー」

「あ、シンバシさん！ つてえ!？」

声でこちらに気付いたクリスちゃんなんか驚いている。まあ今私は周りから注目

を避けるためにサングラスとマスクをしているから仕方のない事だとは思う。

「シンバシさんですよね……？」

「不審者でごめんね」

一瞬だけずらして証明する。この規模だったら勘違いされたときの被害がとんでもなさそうだし、多分本人もいそうなので今日はこれでいさせてほしい。

「さつき声かけたのになんか笑い出して消えちゃったんでしんぱいしたんですよ！」

さつき……？ 今到着したばかりで見覚えがないが……？

「あー、それたぶん別人だ……ちなみになんて？」

「シンバシさんって言ったら『シンボリが新橋で……フフツ』とか言って知らない人たちに連れていかれたんです」

アツそれ会長だ。シンバシとシンボリを脳内で何かしらの親父ギャグにして笑った

シンボリドルフ会長だ……。

多分この前の子とかが連れてったのだろう……。

というか我々も中に入ったほうがいいのではないだろうか。人が多い。

「こんな混雑しているのに大丈夫なんですか？」

「それに関しては安心してほしい。コネがあるんだ」

私に気付いた松岡さんはそう言って笑みを浮かべた。

松岡さんが先導しながら、人ごみの中をかき分け一直線に進む。コース前最前列へと繰り出していた。

「よう、マツちゃん遅かったな、今度一杯奢ってくれよ？」

「ありがとうございました先輩、メンバーのみんなは？」

「今日は別行動がいいんだとさ……」

人ごみの先にいたのは黄色いシャツに袖なしチョッキを羽織った男性。

何だか変わった髪形をしているがいい男だと思う。

「こんにちは！」

「よつ、クリスちゃん。そして君が噂の秘蔵っ子か……何処かで会ったことないか？」

「……さあ？ 他人の空似だと思えますよ……お二人はどういった間柄で？」

「なんだ？ 教えてなかったのか「はい……」なるほど分かった。俺は中央トレセン学園でトレーナーをやってる沖野だ。よろしくな！」

そう言い、手を差し出しってくる沖野さん。握手には応じるが……トレーナー？

訳が分からなくなってきた。ウマ娘を育成する施設で指導している人と松岡さんに一体どんな関係があるのだろうか？

「シンバシです、よろしくお願いします。それで松岡さんとは……？」

「それとか、マツちゃんは俺がトレーナーをやってるチームのサブトレーナーをやってるんだ。将来レースに出るクリスちゃんのトレーナーになる為に資格を取ってな」

「へ、へえ〜」

まあまだまだ未熟だけどなという沖野さん。……松岡親子はそういった理由で北海道から来たのか……すごい行動力だ。

「いいトモをしている……なあ、触ってみてもいいか？」

とも……？ 視線の先を追うと私の太ももがある。

なるほど、触ることで足の状態がわかるのか！

別に問題はないけれどももうレースが始まるまで時間がないので断る。残念そうにしているが私も残念なのでまた時間があるときにお願したい。

親交を深めるために他愛ない会話をしていると不意に実況の声が聞こえてくる。

『……の頂点が決まります。 東京競馬場、第11レース ジャパンワールドカップ』

ファンファーレが鳴り響く。

……おかしい。聞いた話だと東京優駿、日本ダービーは第11レースだが2400mを走るレースだ。東京競馬場は一周約2100メートル。

そのためスタートするのはこちら側のはずだ。それなのにゲートが設置されている

のはコースの対岸。

「えつと……スタートするのってあそこじゃないですよね……？」

自分より詳しい松岡さんの方向へ疑問を口に出しても返答がない。気づけば周りの歓声も聞こえなくなっている。

目線を向けるとそこには誰もいない。松岡さんも柵に手をかけてターフを見ていたクリスちゃんも、いや、それだけじゃない。

誰もいない。実際に何万もいたはずの観衆がすべていなくなっている。

いるのは私だけだ。

ガタン。

静寂の中、ゲートが開く音だけが耳に入ってくる。

巨大電光掲示板に映る対岸での映像に目が離せなくなっていた。18人ではなく8人のウマ娘たち。

栗毛の何処か見慣れたような見た目をしたウマ娘が、リーゼントをした黒毛のウマ娘が、純白のウマ娘が、胴長のウマ娘が、シマウマっぽいウマ娘が、随分とずんぐりむつくりしたウマ娘？ が、キリンみたいなウマ娘が、ウマ娘なのかわからないナニカが、1

着を獲得するという同じ目標のもとターフの上で競い合っている。

大きな櫂を超えた一団がコーナーへ入る。

「あつ」

最後尾でついてきていたナニカが転倒した。何かウマ娘のアイデンティティを維持するのに重大なものが吹き飛んだ気がする。

……あれはウマ娘なのか？

他のウマ娘たちは無事にコーナーを曲がり切り、最終直線へと突入する。

ウマ娘たちがゴールへ向けてスパートをかけていくなか、後方にいた栗毛のウマ娘が大外から伸びてくる。

栗毛のウマ娘が笑った。

そう思った瞬間ものすごい勢いで他のウマ娘を追い抜いていく。

速い、速すぎる。

足の速さもそうだがそうじゃない。回転だ。ピッチ走法を重視してきたから分かる。

あれはヒトの常識を、ウマ娘の常識を超えた走りだ。

自分の限界を知るために脚を回したとき、その力強さに驚いたが、それでも限界があ

ることに落胆した。

それがなんだ!? あの走りは?まるで時間の流れの違う別の領域で全速力で走ったものを領域の外側から見ているかのようだ。

……悔しい。こちらに来てから困惑も歓喜もしたが、悔しいと思ったのは初めてだ。私もああんりたい、そう思うと無意識のうちに拳に力が入る。

「っ?!?!」

瞬間再び景色に異変が起こった。レースの音のみが響き渡っていた静寂が砕け散る。

馬と違ってウマ娘には無縁の笞の鞭の音が鳴り響き、マフィア映画の有名なテーマがラップで吹かれ鳴り響いている。それだけじゃない。胴長のウマ娘の胴体が伸びたり、他のウマ娘たちも現実離れな動きをしている。

何だ……あれは、荒唐無稽な状況なはずなのに、まるでレースの主導権の取り合いをしているように見えてくる。

そんな中、大外から伸びてきた栗毛のウマ娘は……こちらを見ていた。

……こちらを向きながら手を左右に振りながら足をクロスさせる走り、どうやら主導権を勝ち取り、勝利へ向かっているのは彼女のようだ。存在感が違う。

……それにしてもどこか昔の番組で見たこともあるような気もするが……変だ。
しかしそのこちらを見てくるウマ娘の瞳はとても輝いていた。

キラキラとした、見覚えのあるような気がするその瞳と顔で、笑顔をを見せてゴールに入着する。

栗毛のそのウマ娘に続いて黒毛のウマ娘、そして白毛のウマ娘がほぼ同時に入ってくる。……リーゼント差で黒毛のウマ娘が二着だ。

変幻自在の足で驚異的な末脚で一着をとったウマ娘、その名前が実況から聞こえてくる。

「ギンシャリ……ボーイ？」

今、目の前を駆け抜けていったウマ娘の名前。

自然と口角が吊り上がる、あの走りは私が追い求めている走りの到達点だ。

『常識』なんて言葉から頭1つ2つ抜き出た世界に迷い込んだ私が求めるのはそんな『常識』を超える走り、あの『領域』へと辿り着きたい。

“走りたい、今すぐあの走りを実践してみたい”という思いが初めて走った時のようなワクワク感と共に胸で煮えたぎっている。

それにギンシヤリボーイというウマ娘はとても楽しそうだった。ゴールに入った時に私に見せた笑顔の意味は想像がつかないが、それでも……

『ギンシヤリボーイ、その名前とってもしつくりきました!!』

「……ハッ！」

気が付くとさつきまでの光景は嘘だったかのように観衆たちの喧騒が聞こえる観客席へと戻ってきていた。

レース後に呟いた先ほどのウマ娘の名前が聞こえたのか、クリスちゃんがこちらに顔を向けて目を輝かせていた。

「もしかして……ずっと考えてくれてたんですか!? うれしいです! 大事にしますね!!!」

「えっちよつと待つてほしいもうちよつと冷静になつて……」

「嬢ちゃん、ギンシヤリボーイって名前には覚えがないから大丈夫だ」

まさか聞かれているとは思わず焦り散らしている私に沖野さんがニカつと笑いなが

らサムズアップしてくる。松岡さんは……ボーイが入っているからいいのか、嬉しそうにしているクリスちゃんを微笑まし気に見ている。

救いは、ないんですか……？

電光掲示板に映像が流れ始め、一度聞いたはずのファンファーレが鳴り響きだす。それに合わせて観客のボルテージも上がって歓声しか聞こえなくなってしまうた。

救いはないんですね……。

……ここ数分の間でとても疲れた気がする。

今度こそ本来の目的だった日本ダービーだが、先ほどのインパクトが強すぎてそこまですり込んで入ることができなかった。1着をとった子の走りにはさつきみたいな存在感を感じた気がするが、なんだかそれもまともだった。

……今回の競馬場での経験は私に一つの決心をさせるものだった。

一人で走る自己満足の世界から、他人と鏑を削る勝負の世界へ移るための魅力を十分すぎるほど受け取った。

『私』は頂点に立つ。

あの夢のような1レースに出ていたあのウマ娘たち。特にギンシャリボーイに並んで見せる。

久しく夢が無かった精神に新しく火が灯った気がした。

「よっしやー！ 次はウイニングライブだ！」

え？ 何ですかそれ……？

その後ウイニングライブを見て火が燃え尽きかけた。

『シンバシルドルフ』

『ギンシャリボーイ』

そう呼ばれた彼女の走りは、この夢のような世界でシンバシルドルフというウマ娘になった『私』にとつての新たな光になった。

追いつきたいと思った、並び立ちたいとも思った。だけどそれ以上に

——追いつきたい、と思った。

逃げ水のようにどこまでもどこまでも追ったところで意味のない幻のようなあの光景。あの走りをしてみたい。どうせ今だって夢のようなものだからもつと振り切ってみたい。

自宅の居間で両親と共に晩御飯を食べる、そんなありふれながらも尊く感じる日常の一幕の後、無意識に耳を遠ざけながらくつろいでいる二人へ向き直る。

「……」

「……どうしたんだ？ そんな改まって」

「あのさ、も《夢の舞台、トウインクルシリーズへ挑戦をするために全国から多くのウマ娘がやって来る日本ウマ娘トレーニングセンター学園！ オープンキャンパスでは構内の豊富な設備やレッスンが見学できます!! お申し込みはこちら!》……仮に、もし仮にんだけど、私がステージの上で歌って踊ったりしたらどう思う……?」

トレセン学園のここが凄い! という聞きなれてきた他人の声をテレビの音量を下げることで聞き流しながら、訪ねる。

シンバシの内心は複雑だった。

走る事を自分を熱くさせより極め、高みに上る事を夢に抱くようにさせたあのギンシャリボーイの走り、アレは自分の自己満足で一人寂しく走っているだけでは一生かかっても習得できそうにない領域。習得するには専門的に学んで努力をする必要がある、そして誰かと競い合って限界を超える必要があるのではないかという考えに至ったのだった。

しかしそこにさつそうと立ちはだかったのはウイニングライブの存在。

幻を見た後に発走した日本ダービーのウマ娘たちが歌って踊っていたことが専門的な世界への意欲を踏みとどまらせてしまっていた。彼女たちは喜びの表情を浮かべて

いて、センターに立つことも目的だったのだろうが、そうはいかないのがシンバシルド
ルフだ。

何せキラキラと輝く世界とは無縁なところで生きてきた『私』には恥ずかしすぎたの
だ。

姿が違うと言えど言いようのない羞恥心に襲われるのは精神が未だ前世に引つ張ら
れているのが原因だった。

だから聞きたくなかったのだ。自分以外の意見が。

「それはつまり……レースとかの後についてことか?」

最近の動向や話を遮ったテレビで流れる学園の広告から感づいたようで、お前がそう
言うってことは多分本格的にレースを走ってみたくなくなったってことなんだろうな、と確
認混じりに訊いてくる。

「そうだよ、ちょっと見てて痛々しくないかな……?」

私の本心は走りたい一心だったけれど、アイドルみたいなことをするなんて覚悟して

いない。

それでも親孝行としてなら、そうではなくても父さんと母さんの言葉が、激励の言葉がもらえたのならば、怖気づいてしまっている私の心を動かしてくれるような気がしたのだ。

2人はお互いに見合って頷きあう。そこには僅かな間も無く、同じことを考えていることが目に見えた。

「恥ずかしがることもないでしょう？ 貴女は私たちの自慢の子よ？」

まあ、ライブ中ずっと固まっていたら見てられないかもしれないけど、どちらにしろ家族のお宝映像として末代まで語り継ぐわよ!! と何だか寒気の走る事を言っている。

「パパなんて多分泣くわよ」

「そんなこと……いや、想像しただけで感動してきた……」

父さんの目にはもう大きな涙が溢れ出しており、まだ存在しない出来事で感動してしまっている。

なんだかその姿が面白くて笑ってしまふ。

「はは、それじゃあライブが見れないじゃないか……」

涙が乾くまで繰り返し見るから問題ない……と震え声ながら返してきて、なんだかシンバシルドルフは愛されていたんだなと強く感じた。

「少し前までふさぎ込んでとても悩んでる様子だったけれど、吹っ切れたようで安心してたわ」

「……」

一瞬言葉に詰まる。

誰しも悩むものだが『シンバシルドルフ』も悩みを抱えていた。

前提として、私も驚いたがシンバシルドルフは中学生だ。

シンボリドルフとそっくりだからってつきり同じ年程度だと考えていたのが、事実は大きく異なっていた。

『シンバシルドルフ』は中学校を休学している。

当初は新橋での出来事を重く見ているからだと考えていたが、それとは違った理由だった。

本格化、そう呼ばれる現象がウマ娘にはあると知った。未熟なウマ娘がある日を境に競走バとしての最盛期の力を入れる現象であり、その効果の謎はまだ解明されていない。

『シンバシルドルフ』はそれを『私』になる前に体験した。身体が急速に成長するという形で。

『シンボリルドルフ』さんみたい！

彼女はそのことに最初は喜んだ。

『シンボリルドルフ』さんですか？

町で人にそう聞かれた。そう思われてうれしくなった。

『シンボリルドルフ』じゃないのか……

落胆されるようになった。申し訳なくて悲しくなった。

『シンボリドルフ』なら良かったのに

自分を否定された気分になった。辛くなった。

シンボリドルフなら……

まだ幼い彼女はシンボリドルフに実際に似ていたし、名前から連想されることは多かったが、それも普通の緩やかな成長と共になら受け入れられたかもしれない。

しかし実際には突然の成長がもたらしたシンボリドルフに似たその姿によって、未成熟な精神を周りから受ける好奇心な視線と言葉によって病ませてしまった。

自室で見つけた彼女の書いた日記にはかみ砕くとそういったことが書かれていた。

私自身、この前晴れてギンシャリボーイになったクリスちゃんとの熱い思いを受け取るまではナーバスになったりもした。

第三者からシンボリドルフというフィルターを掛けられてみられるのはそれほどキツイ。

きつかった。

……この子は多感な時期で両親にはうまく伝えることができなかつたんだな。

初めて全力で走った時の解放感、慕ってくれるクリスちゃん改めギンシャリボーイというウマ娘の子の存在、そして目を奪われた日本ダービーでのレース。

憧れが出来た。夢ができた。

夢に賭ければ、シンボリドルフじゃなく、シンバシルドルフとして周りから見られるようになるかもしれない。

「追いつきたいんだ」

シンボリドルフに。そして『ギンシャリボーイ』に。

自信が無くても、走ればなんとかなる。

これはそのための一歩だ。

「そうかあ……、大きくなったな……だったら俺は応援するぞ!!」

フアン一号は自分だと二人で言い合っている。

「あー、一番はもういるんだ。……ギンシャリボーイちゃんって言うんだけど、あの子のおかげでレースで走りたいと思えたんだ」

「そうなのか、一番になってやれないのは悔しいが、その子には感謝だな……」

フアン一号になれなかった事には滅茶苦茶悔しそうにしているが、他にフアンがいることに対しては嬉しそうだ。

「そういえば私の名前の由来ってなんだろう？」

「忘れたのか？ シンバシルドルフが良いって言ったのはおまえ自身じゃないか」

幼稚園ぐらいのところにいきなりシンバシルドルフが良いって言いだしたんだ。当時はまだシンボリドルフなんて名前も出てきてない頃だったから、後からデビューして来たときはびつくりしたのよ。

と懐かしみながら言う二人に私は混乱する。

なんでシンバシルドルフなんだ……？ 当時の私はいったい何を見て何を感じたの

か……。

ただ一つわかるのはこの前のギンシャリみたいに滅茶苦茶しつくり来たんだろいうな
ということだった。

。 。 。

「お先に失礼します会長、テイオーも」

夕日が窓から差し込んでくる。

窓の外からは練習をしているウマ娘たちの掛け声が時折聞こえてくる。

ここはトレセン学園。その生徒会室。

エアグルーヴがトレーニングのために去り、二人だけになった部屋に声が響く

「ねえねえカイチョー!」

「どうしたんだ? テイオー」

「この前はありがとう! あの時教えてくれなかったらマツクイーンとの約束すつぽか

してたし、限定抹茶はちみーも飲めなかったよ」

あれは挑戦的なはちみーだったよ、今度カイチヨーも一緒に飲みに行こうよと誘うトウカイテイオー。

「ああ、それは勿論だ。……ところでテイオー、一体それはいつのことだ？」

すまないが身に覚えがないんだ。

微妙な空気が発生して若干の静寂が訪れる。

「え？　確かこの前の日本ダービーのちよつと前だったから……日の日曜日だよ」

シンボリルドルフはその日、エアグルーヴと共に朝早くから単純な書類作業をしていた。春先は夢多い新入生が入学してくるので書類が溜まりやすいのだ。

そうなる疑問がわくのはトウカイテイオーが出会ったシンボリルドルフ？　の事だ。

「その日は朝早くから仕事をしていたからありえないはずだぞ」

「え……？　じゃああの時会ったサツマイモみたいなジャージを着たカイチヨーは一体なんなのさ……？」

わけわかんないよと叫んでしまいたくなるほどにトウカイテイオーの脳内は混乱していた。その時のカイチヨーが言っていた言葉がリフレインしている。

『すまないが、私は会長じゃないんだ』

え……？　あれ本当だったの……？　よくよく考えればトレセン支給のジャージを着ていない時点でおかしいことに気付いたテイオーは途端に怖くなってきた。『平社員』の意味をエアグルーヴと一緒に考えて終ぞ分からなかったのは高度なギャグなのだと思いますが関係がなかったのかもしれない。

何だか不吉な事も言っていたのもあってすっかりオカルトな存在だと思いはじめました。

「そういえば……最近身に覚えのないことをよく聞かれるな」

新橋で倒れたって聞いたんですけど大丈夫ですか、とかテイオーみたいに朝に会ったことを伝えてくる生徒たち。

そして東京競バ場で話しかけてきた幼いウマ娘の姿も思い浮かんでいた。

『シンバシルドルフさん！　こんにちは!!』

自身に対するテイオーのような眼差しをしたあの子が言っていた『シンバシルドルフ』という名前、当時は駄洒落だと思つて嬉しくなつてしまつていたが、もしかするともしかするかもしれない。

「ふふつ、楽しみだ」

いったいシンバシルドルフとはどんなウマ娘なのだろうか、鎬を削つて競い合うライバルたり得るだろうか？　洒落のセンスは同じだろうか……？　と近々起こるような出会いの予感に高揚感を覚えながら手元にあるオープンキャンパスの書類を片付けた。

オープンキャンパス

春も終わりを迎えて、初夏の陽気を感じるようになってきた今日この頃。皆様はいかががお過ごしでしょうか？

トレセン学園はいつも以上の活気を見せています!!

あたしの名前はアグネスデジタル。どこにでもいる一般ウマ娘。

あたしは今……

「むふふ……っ！ 初々しいウマ娘ちゃんたちサイコー!!!」

楽園……、いやッ！ 天国にいます!!!

少し前の入学シーズンに推しがたくさん生まれたのにもかかわらず……まだ見ぬ新たなウマ娘ちゃんたちがまたやってきたんです!!

そうっ!!! 今日はオープンキャンパス!!!

憧れや夢や希望を詰め込んでやってきた小さなウマ娘ちゃんたちからしか摂取できないエモみがあります……!!

特に憧れのヒトに出会ったウマ娘ちゃんたちが屈託のない笑顔とキラキラとしたまなざしで話しかけている光景は……最高の高!!!!

そんな風景を少しでも多く見るためにあたしは今日、案内係に立候補したんです……とはいつても眩しすぎて話しかけるのは恐れ多いので片隅から観察しているんですが……

……? あれは、会長さん?

「……日本ウマ娘トレーニングセンター学園、かあ……!」

通称トレセン学園、目の前の校門から広がる景色に私は何だか感慨深い感情を覚える。

東京競馬場から走って割とすぐにあるこの学園は本日オーブンキャンパスで一般公開されている、……さすがに今日は河川敷を走ってきたわけじゃない。

私が立ち尽くしている間にも横から後ろから見学しに来たウマ娘たちが追い越していつて先に学園内へと入って行っている。

この先に私が求めてやまない施設があるのか、と高揚感を覚えながらも、後に続いて中へと入っていった。

「……………」

パンフレットを配っている子から受け取り、とぼとぼと道なりに進んでいると、どこかから視線を感じる。

ははくん、また会長と勘違いされてるな。

『え？ シンボリルドルフに勘違いされるかもしれないって？』

一応間違われないうようにと事前に父さんに相談してみたのだが『だったらこれを持っていけ』と言われ渡された父のサングラスは付け方がわからなくて鞆の中で肥やしになってしまっている。

つまりいつもと特に変わりはないので勘違いされるのも仕方ないのだが、だが！

やっぱり生徒の人くらはは気付いてほしいなと思ってしまう。私は私服で来ているから当然制服を着ていないし、まず耳飾りをしていない。なぜか知らないけどウマ娘の子たちはみんな耳に飾りを付けているが、自分はおしゃれに気を使うことなんて必要

最低限しかなかったので付けてないのである。

……どうしようか……、案内している子に交じってついでいこうとも考えたものの、せつかくの機会なのだから無駄にするのはいけない。

数舜の間の逡巡のうち、松岡さんと連絡を取るために携帯を取り出す。

先日河原のレース場で毎週の日課になったクリスマスちゃんとの走り終わりにオープンキャンパスに参加することを伝えたところ

『え!? オープンキャンパス来るの!? 先に言ってくれば俺が案内したのに!』

と、ありがたい一言を言っていたことを思い出したのだ。

ついでに言えば、彼は『それって6月の奴だよね! だったら楽しみにしてよ、準備しとくから』と言っていたので多分今日松岡さんは何かしようとしている。

「……」

懐から取り出した携帯の家族と松岡さんしか記載のない電話帳欄から松岡さんの電話番号へとコールを掛ける。

癖で耳のあったところにかざして何も聞こえなくなったり、今度は聞こえるようにウマの耳に当てて声は聞こえるものの、逆にこちらの声が聞こえなくなったりと何だか最近になって携帯に苦手意識が芽生えたような気がしなくもない。

そんな携帯のビデオ通話でかけたコールは少しの間をおいて繋がった。

「もしも《シンバシさん!!》し……クリスマスちゃん!?!」

てつきり松岡さんが出てくると思った画面にはでかくクリスマスちゃんが映っている。

《私シンバシさんからギンシヤリボーイって名前を貰ったんですけど〜!》

「はは、そうそう急に呼び方は変えられないよクリスマスちゃん」

《おっ? 誰と電話してんだ?》

見知らぬ声が聞こえると同時に見知らぬ顔がぬぼっと出てくる。銀髪のウマ娘だ。耳あてと帽子のようなものを付けているがそれが似合っている。

《会長か? いやちげーな、じゃあおめーが噂の日暮里か》

「えっ、シンバシです……」

《なあなあキンバリ〜養殖派？ 天然派？》

「シンバシです……天然派かな」

《だよな！》

……切れた。

切れた瞬間「あつ、ちよ！」って声が聞こえた気がする。

何だったんだあの子？ というかまだ話を聞いてないので再び電話を掛けてみるものの、出てこない。まるでバッテリーが切れたかのように無反応だ。どこからドドドと走っているような音が聞こえるような気がしなくもない。

唯一の合流するための手段が絶たれた今、できることは一つしかない。

人に聞く。

松岡さんはサブトレーナーだから知っている人が少ないかもしれないが、チームの主任トレーナーをしているらしい沖野さんならば知っている人もいるかもしれない……！

手が空いてそうな人を探しに未知のトレセン学園構内に旅に出たのだった。

学内を散策しながら歩いているが中々暇そうな人は見つからない。

見学者たちを案内している子に声をかけるのは勘違いが発生しそうで憚られるし、かといって本当に暇そうな人は多くない。

何せここは学校なので、授業はあるため大半は教室内で授業に参加しているし、ジャージ姿でトレーニングをしているウマ娘の邪魔をするのも申し訳ない。

……河川敷で見かけた紅白ジャージ、やっぱりここのだったのか。会長と盛大に勘違いしてくれたあの子には何か詫びを入れたいな、多分今頃事実確認をして恐怖を感じているかもしれない。

途方に暮れて、正門の先にある噴水の前のベンチで座っていると、ふと目立たないところに一人のウマ娘の姿が目についた。

明るいピンク色の髪色をしたその子は……なんだか私を見ているような気がした。見学者……じゃないな、トレセン学園の制服も着ているし……

じつと見続けているとこちらと目線があった。どうやら気付いたようで固まってしまっている。

今が声のかけ時だろうと判断してベンチから立ち上がり一直線に向かう。

「少し聞きたいことがあるんですけど、いいですか?」

勘違いしてしまつて緊張してしまつているのか頭につけてある大きなリボンの裏に隠れてしまうほど耳を後ろにずらして、おぼつかない様子で受けごたえしてくる。

「ひゃいっ!! かつかか会長さん!? あたくしめに一体何の御用でしょうか……」

「ああ、勘違いさせてしまつてごめんなさい、私は見学しにきたシンバシというものです」

ひよっ? と素つ頓狂な声が目の前の小柄な子から漏れ出てくる。彼女はシンバシさん、と数秒ほどフリーズした後「ちよ、ちよつとまつてください!」と私に言っているのか自分自身に言っているのか定かではないつぶやきをした後、ぐるつと一周私の周りをまわると口を開けた。

「………そういえば制服じゃないし耳飾りもしていない………不覚ツ!!! ごめんなさい!!!」

不肖ながらこのわたし、すべてのウマ娘ちゃんたちのファンであろうといながら勘違いして気付くことができませんでした……」

「ファン……?」

全てのウマ娘ちゃんたちのファンとしてシンボルドルフ氏のことにも応援していたのだろうか、似ている自分を別人だと気づけなかった事をこの子はとても後悔しているみたいで、「遺灰は海に流してください……」なんて滅相でもないことをのたまっている。

「あの……、良かったら案内をお願いしてもいいですか?」

「あんない……? ああ、案内! ハイ! 是非ともこのアグネスデジタルにお任せくださいツ!!」

じゃあ行きましょう!!! と若干テンションがおかしくなっているような気がするアグネスデジタルちゃんに先導されて私はトレセン学園内部へと本格的に見学することとなった。

○○○

「ここがカフェテリアです！　今はお昼じゃないのでやってませんがランチはとっても美味しいんですよ！　みんなで談笑しながら美味しそうにご飯を食べている光景はとっても眼福なんです！！」

「そうなんだ」

「オグリキャップ先輩の食べっぷりは見ているだけでも幸せになりそうなんですけど、タマモ先輩やクリーク先輩と一緒に食べているときは食べる速さがゆっくりになっているところなんて嗚呼……思い出すだけで尊い……」

「そうなのか……」

○○○

「ここはトレーニングジムです！！　トレーニングで悩むことがあつたらメジロライアンさんに聞いてみてください！　優しく的確なトレーニングを教えてくださいませんかよ」

「なるほど……」

。。。

「ステージですね！ ……あ、アレはファルコちゃん……、少し行ってきてもい『ファルコが逃げたら？』追うしかない！」

「あつ、行っちゃった」

。。。

アグネスデジタルちゃん为学校案内は順調に続き、次は練習用トラックを見に行こうかという話になった。

そこで流されて忘れていた目的である沖野さんのチームのことを思い出したので聞いてみる。

「沖野トレーナーさんのチーム……ですか？」

「知ってたら何処にあるか教えてほしいんですが……」

チーム名ではなくトレーナーの名前から考えてもらうのは少し申し訳なく思っていると、合点がいったのか手をポンとして

「ああ〜！ スカーレットちゃんとウオツカちゃんがいる」チームスピカ「ですね!!」

と頷いた。

「スピカ？」

どんな子を担当しているのか聞いておけばよかったと後悔先に立たずを実感して聞き返すと、ご存じないのですか?! ととんでもなく驚愕している。

「チームスピカはスズカ先輩とスペシャルウィークさん、ウオツカちゃんとスカーレットちゃん、ゴルシ先輩にマックイーンさんとテイオーさんと存在が尊みの塊で出来るチームなんですよ!？」特にマックイーンさんとテイオーさんの二人の活躍は近代エモのエモの最有力候補として私の中で注目されているんです!!!」

「そうなんだ……」

この子をしばらく見ていてウマ娘たちに対する熱い思いを感じ取った。先ほど言っていた通り、すべてのウマ娘たちにその思いがあるのならば、間違えたことに対する自戒の気持ちが強くなるのも仕方ない事なのかもしれない。

ふと、気になった。

「あの……」「ハイ？」

「なんでアグネスデジタルさんは沢山のウマ娘たちのことを推してるんですか？」

一瞬の間。

「尊さが、推しを、作るんです!!!」

「尊さ……ですか」

すごい熱量でもってその思いをアグネスデジタルちゃんは吐露した。

「ウマ娘ちゃんたちの御姿はただ見ているだけでも尊いものですがより強い感動すなわ

ちエモを感じるにはウマ娘ちゃんたちの日常を見ることが必要なんです……!! 競い合うウマ娘ちゃんとの友情が、思いが、夢がレースという場で喜怒哀楽を飾るんです!!!」

「……ここじゃあなんだしカフェテリアにいきませんか？」

「アっそうですね」

彼女の熱意はすさまじい。

一日中語ることもできそうな気がしてくるので、いったん区切って場所を変えることを提案した。彼女の思いは自分に新たな価値観を与えてくれるような気がして、どこか落ち着けるとところで詳しく聞いてみたいと思ったからだ。

カフェテリアにはいつの間にもやら授業が終わったからなのか、たくさんの生徒が思い思いに昼食を楽しんでいた。

その中の一角にまだ誰も座っていない四人テーブルを見つけ、アグネスデジタルちゃんとは対岸の方向に座った。

「お水どうぞ！」「お水どうも」それで推しの事ですげど〜

彼女の話聞きながら、その考えを自分の身近なものに当てはめてみる。

言っていることには納得できるものがあった。

自分と縁が深いクリスちゃん、いやギンシャリボーイがいつか大きくなってレースに勝つたとしたら自分は思うだろうか……

年甲斐もなく大泣きするような気がしてならない、親心みたいなのこの気持ちが尊いということなのか…。

なんてことを考えているといつの間にかアグネスデジタルちゃんはまた最初にあつた時のように固まっている。

その視線は自分と自分の後ろの何かを交互に見ているように見えた。

「……………」

そう言えば何か重圧のようなものを背後から感じる気がする。そんな違和感を感じて振り返るとそこには

「やあ、相席してもいいだろうか」

『シンボリルドルフ』その人がそこにいた。

邂逅

和気あいあいとした雰囲気は漂っていたカフェテリア内が騒めき始めている。

それはスペースの一角に発生した緊迫した空気が原因だった。

比較的近くの席に座っていた生徒たちは現場で起こっている光景に目を輝かせて観察に徹している。

「……………」

事前からシンボリドルフと出会う可能性は十分に考えていた。もし出会ったのなら騒ぎを起こしてしまったことの詫びを入れようとも思っていた。

しかし……、何だこのすさまじい威圧感は……。

何か獣に狙われているような威圧感を彼女から感じる。

河川敷で会ったあの子が言っていたように駄洒落を言いそうな雰囲気は感じないのだが……。

「すまない、他の席は埋まっていたんだ」

無言を貫くのは好ましくないと思い、声を絞り出す。

するとシンボリドルドルフは机の対面に周り、アグネスデジタルちゃんの隣に座った。フランスの取れている和食が載せられている。

「知っているかもしれないがシンボリドルドルフだ。生徒会の会長をしている」

「ぬ、ぬふふ……!! あたしの灰色の脳細胞が沸騰しちゃいそう……!!」

そうやってシンボリドルドルフは右手をこちらに差し出す。

「シンバシ、シンバシドルドルフです。よろしくお願いします」

それに私も応じる。名前を告げる際、少し躊躇してしまったものの両親との会話を思い出してはつきりと答えた。

自分は自分だ、気を強く持つていこう。 「??」 絵面が良い……!! 良すぎるう……

「ンンッ」

シンボリドルフは私の名前を聞いてもあまり驚くといった反応はせず、納得をしたかのように頷いている。

何か話を切り出さないと思索に耽っている私の傍らにもう一人の来訪者が訪れた。

「すみません会長、お待たせしました」

「エアグルーヴはそこに座ってください」

私の隣の席を手で指し示すシンボリドルフ。プレートを持っていることを確認すると咄嗟に椅子を引く。

すると

「ああ、ありがと……う……う？」

背後からやってきたこともあって私の顔を見ていなかったからか、啞然とした顔を晒してしまっている。

会長と同じく昼食をプレートに乗せたエアグルーヴと呼ばれた彼女はとりあえず座ると、私と対面にいるシンボリドルフを交互に見て、訳が分からないものを見ているかのような表情になった。まるで宇宙を視たかのように固まるとしばらくしてから「ハッ」と再起動してこの状況を飲み込んだからなのか、自分の持論が正しいのか知るよ

うな表情で

「会長は双子だったんですか!？」

と言う。「普段キリつとしてるエアグルーヴさんの慌てる姿……まさにギャップ萌え！——良き……」

そう思うのも無理はない。私が違う旨を説明しようとするよりも先に眼前のシンボリドルフさんが

「どちらが姉に見えるかな？」

と揶揄う様子で問いかけたことによつて場は混沌な様相を見せる。「——スツ……」

……いつの間にか感じていた威圧感は消散した気がした。

エアグルーヴさんのみならず周りから見えていたほかの生徒たちからもどちらが姉か妹か論争が聞こえてくる。

『あっちの制服じゃないほうの会長さんがお姉さんじゃないかな? ……だつてくたびれてるし』

『いや、案外しつかりした姉を持ったからあなつたのかもしれないよ?』

くたびれてる印象なのか……。

論争の中、エアグルーヴさんも真面目に考えてくれたのか、恐る恐ると自分の考えを告げる。

「……雰囲気落ち着いているこちらの方がお姉さんですか?」

そう言つて自分のほうに顔を向けるエアグルーヴさん。

少し見ていただけでも真面目そうな雰囲気を感じただけに、耳を絞つたり不安そうな顔をして訊いてくるその姿を見ているとなんだか可愛らしくて笑つてしまう。

シンボリドルフさんから感じた威圧感と似て異なるものが自分自身も流れ出ているのか、比較方法がフィーリングのひとばかりだ。

「……一体どつちなんですか?」

ジトつとした眼差しで見つめられた私は、そろそろ種明かしをしたほうがいいのは、とシンボリドルフに目線を送る。

シンボリドルフは分かったというように頷いて見せると

「すまないエアグルーヴ、これは冗談で私とこちらのシンバシルドルフは初対面だ」

カフェテリアにいる話を聞いていた生徒たちがアグネスデジタルちゃん一人を除いてフリーズ状態になる。

双子のほうはまだ信ぴょう性がある情報だったのだろう。わかる。

『……………?』

「初めまして、シンバシルドルフです」

「……………?」

だめだ、完全に思考が止まっている……。

復活まで時間がかかりそうなエアグルーヴさんを尻目に、そう言えばさつきからアグネスデジタルちゃんが固まっているような気がして声をかけてみる。

「デジタルさんはどう思いますか？」

「エ、ッ アツハイ!? あたしですか!？」

……あたしは普段は気を詰めている会長さ

んが姉妹だけになった時にだけ気を緩ませて『姉さん、偶には甘えさせてほしい……』となるシチュエーションがいいと思います!!」

……?

「……いやいやししながら双子だから出来るシチュは尊いものが多くて……、じゅるり……」

ウソでしょ……、無からシチュエーションを想像してやがる……!

「って口に出ちやってみましたか!？」 あ、あはは……ゴメンナサイ……」

。。。

「全く……、戯けたことを……」

暫く経ち、再起動したエアグルーヴが呆れる。

一時大混乱に陥ったカフェテリアだが、暫く時間がたったことにより落ち着いた光景を見せていた。

授業や活動をするために人が減ったことも要因だろう。

「……そういえば私の事をどうやらご存じのようですね」

「ああ、噂の件もあるんだが、先日の日本ダービーだね」

日本ダービーでのことは心当たりがあった。私と合流する前にクリスちゃんや松岡さんが出会ったという誰か、もしかしたらとは思っていたがやはりシンボリルドルフ本人だったのか……。

「へえ、会長さんも会場にいたんですね……」

ピクリと一瞬、シンボリルドルフの耳が反応する。

意図せず偶然韻を踏んでしまっただけだったが、なるほど、察しがついた。

「会長、噂というのは一体？」

「エアグルーヴは知らなかったか、ここ最近行った覚えのない場所で私に会ったという報告が多くてね。私のドツペルゲンガーがいるんじゃないかってテイオーが広めたんだ」

「あたしはてつきり会長さんのファンサ力が天元突破して分身できるようになったのかと思っていました」

「どういうことだ……?」

「その正体がこのかいちよ、ではなくシンバシだったということですか……」

「そういうことです。———そういえば、新橋での事は結構大きな噂になったでしょう? それをお詫びしたいなって思ってたんです」

「ああ、その件だったら問題はないよ、君こそ噂の通りなら倒れたと聞く。異状はなかっただろうか」

「ええ、あの時は異常な状況にあつたので情緒不安定な状態だったんですけど介助してくれた人がいたので何とかなりました」

今のコンディションは上々です。と続ける。

顔を伺うとこいつ分かってやがると得心のいった顔をしているのが初対面であるのにも関わらず分かった。

売り言葉に買い言葉、会長も新しく話を切り出してくる。

「——スキーは、好きかな」

「！」

「？」

唐突に投げかけられたシンプルな吹っ飛ぶレベルのわかりやすいダジャレだ。アグネスデジタルちゃんとはほぼ同時に会長の言葉に反応する。

この会長、試している。

咄嗟に私も頭を回転させて応える。

「同じウィンタースポーツのスケートに傾倒しているんですけど、スキージャンプ・ペアは面白そうですね」

「！ ああ、ペアで飛んでみたいな！ 甥っ子はいるか？」

スキージャンプ・ペアは二人で飛ぶスキージャンプだ。特例で三歳以下の甥っ子ならば三人目も認められている。

生憎甥はいないのだが……。これはダジャレのキャッチボールだ。そうと分かれば言うことは一つ。

「甥ですか……。まあそれは追い追いですかね……」

「!!」

シンボリドルフは手をこちらに再び差し出してくる。「今のやりとりは一体どういう意図が……。?」「まさかこんな間近で会長さんのダジャレの応酬が見られるなんて……。徳を積んでよかった……。!」「……。そういうことなのか!?!」

それは先ほどの空気ではなく、自分の同志を見つけた感無量な気持ちを押し出したかのような様子である。

ありがとう河川敷の子!!

「オープンキャンパスに来てくれたということは、このトレセン学園に入ってくれるのかな」

「忘れていたが……。そうかオープンキャンパスか。入るとしたら高等部に編入になるの

か？」

知りたいことがあれば気軽に聞いてくれという二人に

「はい、多分編入する形になります。でも三人共先輩つてことになるんですかね」

「!? あ、あのくちよつとお聞きしてもいいでしょうか……?」

先ほどまで固まってしまっていたアグネスデジタルちゃんが再起動して年齢を問いかけてくる。

それに答えると、三人は驚いた顔を見せる。私の姿はシンボリルドルフに似ている。自分自身顔を合わせて運命的、というか作為的にさえ思える奇妙な感覚を感じるほどだ。そしてシンボリルドルフは高等部であり、常識的に考えても中等部に入るようには見えないだろう。

「も、モシカシテ、あたしよりも年下なんですか?!?!」

「本来なら今年中等部に入學する年です」

「……なんだそれは……たまげたなあ」

とてつもなく驚いた姿を見せているアグネスデジタルちゃんとたまげているエアグルーヴさんとは対照的に、ルドルフさんは納得している。

「つい最近まで噂を聞かないと思ったが、そうか、本格化か……。私自身、本格化を迎えたウマ娘たちは多く見てきたが、こんなにも外見に作用したものは初めて見るな。急な体の変化には戸惑うこともあったんじゃないか？」

「一挙手一投足すべてリハビリしましたよ……。あと、たくさんのヒトからあなたに勘違いされることが一番堪えました。自己の確立に多大な影響を受けましたし」

体の動かし方に関しては前世の関係上本格化以前の問題のような気もするが、『シンバシルドルフ』にとつては死活問題だった。私が私としてここにいるのはギンシャリボーイに並び立つという自分の目標だけじゃなく、本来の『シンバシルドルフ』がここに確かにいるということを証明するための手段でもある。

「……………そうか……………、……………すまない」

そう告げて顔を伏せるルドルフさん。彼女にとっての矜持を傷つけてしまったのか、ひどく動揺してしまっているように見えた。隣にいるアグネスデジタルちゃんも何やらシリアスな顔になっている。

「そう重く捉えなくて大丈夫ですよ……今は全力全開で走れるこの体が大好きですし、まだレースにも出たこともないですけど自分を慕ってくれる子もいるんです」「それは良きみがあふれ出してないですか!？」

「そうかな……、そうかも。」

挫折を応援してくれる存在のお陰で乗り越えるウマ娘というのは確かにアグネスデジタルちゃん……デジタルちゃんが説いたエモい関係の一つであるかもしれない。

充実している今の日々はとても恵まれていると前世含めて長い間を生きてきたから断言できる。いろいろあつたけれど今の生活は幸せだ。

「……そうか、それはよかった。……いい機会だ。私の夢を話しておこう」「会長、いいんですか？」

エアグルーヴの問いかけに長い付き合いになりそうだからな、と答えると雰囲気が変わった。冗談を言い合っていた時から打って変わり、真剣さが増した表情で語り始める会長。

「私の夢は、デビューした時から終始一貫。——すべてのウマ娘の幸福になれる世界を実現することだ。その為に私はトレセン学園の会長をしている」

トレセン学園に入学してきたウマ娘達が日進月歩、各々が持つ夢に向かって一生懸命に努力ができる環境。どんなに恵まれた環境にない場所で育ったウマ娘でも、どんなに才能が無くても——ただひたすら一念通天、努力することさえできれば夢に辿り着くことができる。そんな環境を作することを念願に置き活動を続けている。ということだった。

私が走ることに楽しみを見出しているように、他のウマ娘達もそう感じるのだとしたら会長の行動はそれを手助けする大きな役割を持っていることになる。実際そうなのだろう、前に見た日本ダービーやほかのレースでも参加しているのはこのトレセン学園の生徒たちだ。

彼女たちがライバルたちと切磋琢磨して実力を伸ばしあうためにはこの学園は不可

欠だ。レースの先で見えるかもしれない感動もここでの努力の積み重ねがあつてのものだろうか。

そのためにこの人はどれ程の苦労を共にするのだろうか……。私の走ることの喜びを追求したいという夢に比べると、一人ではあまりにも途方もなく難しい夢を持っているのだと脱帽する。

「ああ……。わかります……。!!」

全てのウマ娘の幸福を願っているにも拘らず『私』のような影響を受ける人が出るのには確かに堪えるものがあるなど思っていると、会長の話に思わぬ相手からの同意があった。デジタルちゃんだ。

「ウマ娘ちゃんたちを見ているとだれにも負けてほしくないって思うことが殆どです……。それはデビュー前から晴れ舞台まで見送ってきたファンとしての気持ちで……。誰かが勝った時に自分、それ以上に嬉しくなるんですけど……。ほかのウマ娘ちゃんが勝ったとしたらのIFを考えずにいられなくなるんです……。『一着と二着が逆だったかもしれないねえ……。』とかなんとか……。!!」

レースは厳しい舞台だ。勝つのは一着になったただ一人。すべてのウマ娘を推しているデジタルちゃんにとって、トレセン学園の恵まれた環境は勝ったウマ娘にも、負けたウマ娘にも友達と仲間たちと努力してきた幸せな日々を与えてくれてそれを間近で見る事ができる尊い場所だ、という意見を聞き何だか会長は嬉しそうに尻尾を揺らしている。

シンボリルドルフとアグネスデジタルは形は違えど同じことを願っているのだ。

「……まさか同じ思いを胸に秘めた同志がいるとは……アグネスデジタル」

「会長さん……！」

パシツと高い音を鳴らし握手をする二人。意気投合できたようで何よりだ。

夢を語る事ができる相手を得た二人に温かいまなざしを送っていると隣に座っていたエアグルーヴさんが声をかけてきた。

「そういえばシンバシ、学園の見学は終わったのか？」

「いや、まだチーム棟の方とトラックは見に行っていないです」

「そうか、ならば私たちも同行しよう。実はこの後のトラック練習は私と会長の所属しているチームリギルが貸し切っているんだ……」

ありがたいことに案内を申し出てくるエアグルーヴさん。断る理由もなく、お願いをして席を立つ。気が付けば太陽は傾き始めている。できるだけ早くチームスピカに行つて挨拶をしなければ……。

「シンバシルドルフ」

私と同じく席を立つた会長は私と向き直り、私の名前を一言呟いた。夢を語った時のような意志が宿つた瞳に気圧されながらも

「どうしましたか？」

「——良かったら私と勝負してみてくれないか？」

蹄鉄

会長に走りを誘われてからは物事があれよあれよと進み。

走るためのジャージーや靴類のサイズを測ったところやはりというか全てが会長と一致したため、スベアの練習着一式を貸してもらえらることになった。

シンボリルドルフから紺色のトレーニングシューズを受け取った瞬間、想像していたよりも重いその靴によって体が少し前かがみに屈してしまふ。

いかにもスポーツ用のシューズだという外面をしているのにも関わらず、その実、体感で感じられる重さはずっしりとした革製の靴のようだ。

「このシューズ、重くないですか…?」

「…? これは長距離用シューズでトレーニング用の物の中でも軽いほうだぞ、特別製の蹄鉄を付けているわけでもないはずだが…」

「蹄鉄…ですか?」

あまり耳にしたことのない言葉について聞き返してみると会長はそうだが、と怪訝そうな様子で答えてきた。視線の先の今自分が履いているシューズの裏へと足をひっくり返すと、そこにはしつかりとした金属製の蹄鉄が取り付けられている。

不思議なことにそれは馬の蹄につけられているそれと同じ見た目をしていた。

「うわっ本当だ」

「…普段走るときはどんな靴で走っているんだ？」

馬の蹄には蹄鉄を付ける。馬にそこまで詳しくなかった自分でも知っていることだが、それがまさかウマ娘にもこういういった形で使われていることなど知る由もなく、私は近所のスポーツショップに行つてヒト用の靴を買っていたのだった。

今思えば店員の人不思議そうな顔をしてしきりに間違いないかどうかと尋ねてきたが、その理由をようやく理解した。

「ランニング用の靴です、ヒト用の…」

言葉にしてみると、なんだか申し訳なさが立ち上ってくる。クリスちゃんが目を輝かせてくれた走りも、松岡さんが見てくれた走りも何もかもが嘘だったような気がしてくる。

そしてあのウマ娘。

ギンシャリボーイに追いつくまでの道が前までは臆気ながら見えていたはずが、今はとても遠くに感じるのだ。

「…だったらまずは一度足を慣らそう。軽く一周走れるか？」

無意識で耳が絞られたのか、はたまた別の要因か、気が沈んだのを察知した会長は私にウオームアップを提案してくる。会長のチームが貸切っているのかコースの中にはほぼ人はいない。しかもチームメンバーのウマ娘たちもコースの外に出ているようだった。

貴重な機会を足が重いからなんてくだらない理由で無駄にするのは嫌だ。走りたいたいというこの思いは変わらないはずだと心の中に強く言い聞かせ、返答を待っている様子の会長へと向き直る。

「行けますー！」

会長と並んでスタートダッシュを切る。

といつてもウォームアップと足慣らしを兼ねたものであるためにそこまで速度は出ていない走り。

ちらと隣を走る会長を見ると事もなげに走る会長がいる。それも自分の履いているシューズとは別のものをだ。

重い。

その言葉一つがしきりに脳内をよぎる。人だったころの全身からやってくる無力感とはまた別の重みが足を振り上げるたびにやってくる。…でも決して走れないわけじゃない。

考えてみればこの状況はおかしいのだ。本来ウマ娘にとってこの程度の重さは、走りにはさした影響を出さないはずだ。現に隣を走る会長は今自分よりも重い蹄鉄がついたシューズで私よりも軽やかに走っている。

…会長は三冠ウマ娘だから、というのもまああるだろうけど、ほかのウマ娘だろうと

大なり小なり自分より走ることができるとははずだ。

そう、これは自分だけの問題なのだ。人間として生きてきた記憶があるだけにどの程度手を抜いても走ることできるのかがわかってしまう私が、如何に力をセーブしながら回転数を上げることによるスピードアップを狙うか、そんなあのウマ娘の猿真似をした走りを用意のうちに採用していたせいも、ペースが乱れる。

時折ちらりと会長が見せるこちらを見る目が期待を孕んだものから別の感情へと変わる。そのことに自信が気が付いた頃、会長は私に向けて声をかけてきた。

「シンバシ、あんまり気負わないで走ってほしい」

「ッ？ それは…」

「最初は誰だつて走るのが得意なわけじゃない。アスリートとしてウマ娘を育成する施設がここだ。君の今の走りに期待していなかったと言ったら嘘になるが、九年面壁、本気で競い合うのは君が学園に入学して成長した後にとつておこう」

そう並走しながら息も切らさずに告げてくる会長。

確かに今の自分じゃあかなわないだろうなどと納得しかけるも、しかし胸のどこか奥深くから強い憤りを覚えて強くこぶしが握られる。

自分自身敵わないと納得しているはずなのに、強い対照的な想いが込み上げてくる。取るに足らない存在に思われたと感じたからなのか、シンボリドルフにぎやふんといわせたい、シンボリドルフの中に強く印象を根付かせたいといった気持ちが溢れてくる。

まるで私のものではないような想い。

それがここまで流されてきた私自身の勝負心へと変換されていく。

「そうですねっ、でも会長、油断大敵ですからね!!」

「！　　そうか！」

負けたくない、勝ちたい。新たな芽生えた思いを胸に秘め、最初よりも強く踏み出すようになる。

気が付けばコースを走りだして半周ほど、観覧席だろうか、椅子の並んでいるあたりまで来ていた。

少しでも足の感覚の違和感をなくしようと、そちらには目をくれずに走っていると私にとつて聞き覚えのある声が右耳の方向から聞こえてくる。

「シンバシさん!!!」

聞きなれた声について足を止めてしまう。右を見ると観覧席のあたりにできた人だかりの中に見知った顔が幾つもある。

「クリスちゃん!? それに松岡さんに沖野さんも……」

……そういえば待ち合わせしていたことを忘れていた。会長に目配せするとクリスちゃんの顔を見て納得した様子で。

「私がついていったら混沌とするだろう? 行つてくるといい」

「ありがとうございますっ!」

私は会長に軽く手を合わせて会釈してから足早にクリスちゃんたちのところへと向かった。

「今日は合流できなくて本当にごめんなさい……!」

顔を合わせて早々に私は予定を開けてくれていたのにもかかわらず合流できなかつたことを詫げる。そんな姿を見て、沖野さんは苦笑しながら

「シンボリドルフに声かけられちゃあ仕方ないさ」

「えっ……」

確かに今会長と走ることになっているが……いったいどうしてそれを知っているのだろうか……?

「もしかして……学校中に噂になってます?」

「え? いやあ違う違う……違わねえけど、そのアグネスデジタルが教えてくれたんだよ、それに連絡できなくなったのはうちのゴルシのせいだから気にすんなって」

「えっ」

沖野さんの目線の先、生徒たちの山の中に桃色の髪と大きなリボンがひよつこりと顔

を出している。

そういえばいつの間にかやらデジちゃんはどこかに消えていたのだった。自分自身のことでも精いっぱいだったとはいえこんなどころにいたとは。

気を利かせてくれたデジちゃんに感謝の意を込めて拝む。

「そ、そっそそそそそんな恐縮です!!!」と言っているが今日一番頼りになったのは紛れもなく彼女だ。

「ねえねえカイチョー、今日っていったい誰とレースするの? …もしかしてボクだったり??」

「あっ」

見覚えのある顔が沖野さんの後ろからひよろつと出てくる。青い瞳のウマ娘、どこかシンボリルドルフに近い印象を感じる明るい茶髪と白い三日月が、少し前に遭遇して誤魔化したあのウマ娘だと気づかせてくれる。

「……………ドツペルゲンガー」

「……………エ」

大粒の汗をだらだら流しながらありえないものを見る目で見つめてくる。しばらく固まると、マックイーン！ と叫びながらササつと横にいた薄く紫色を帯びた白いウマ娘の後ろに隠れた。その子の耳が後ろに向いていることからどうやら何か伝えられている様子だ。うろたえながらじつと見ていると納得した様子で近寄ってくる。

「随分と親切なお化けでしたのね、先日はありがとうございます。危うく約束をすっぽかされるところでしたわ」

？
当時の記憶もおぼろげになってきたため少し思い出すまでに時間を要する。約束：

「…あつ、マックイーンさんですか？」

「ええ、初めまして、わたくしメジロマックイーンと申します。後ろのはトウカイテイオー」

半ば強引に後ろに隠れていたトウカイテイオーを引っぺがして横に並び立たせる。

「ボク、トウカイテイオーだよ」

「シンバシルドルフです、悪ふざけしちやつたせいで余計な心配をさせちやつてごめんなさい…」

「こ、怖くなんてなかったもん」

小さく縮こまっている様子のトウカイテイオーを見ると、どこか会長に似ているような気がする。そんな風に見ているからかナニ!? 何なの…!? つとといったような狼狽え方を見せるのでなんだか可笑しくて笑ってしまう。

「緊張はとれた?」

そう尋ねてくるのは松岡さんだ。

「この半周の走りを見てて、俺はいつもと違うように感じた。何か気がかりなことがあつたら教えてほしい」

「もちろんトレーナーだけじゃないぜ! オレたちもいるからな!」

チームスピカの後輩候補だから何でも聞いてくれていいぜ、と鹿毛のショートカット……いやポニーテールの一種のような髪型をしたウマ娘が快活そうな笑顔を浮かべてくる。

かと思えば後ろからとても長いツインテールのウマ娘に組み付かれて何か揉め出している。

「…そういうことだから、なにかあれば教えてほしい」

「後ろの二人は大丈夫ですか、それに他の人も……」

まだ一言も言葉は酌み交わしてはいないものの、途轍もなく目を輝かせてこちらを見つめてくる子もいる。ショートカットに白い前髪と編み込みの純朴そうな子だ。

「この後走るんだろう？ だったら時間が押してるからね、後はまた今度で」

松岡さんの言葉にしゅんとしたまだ名前を聞いてない三人のウマ娘に苦笑を浮かべながら了承の意を見せた。

「シューズが重い!？」

「はい……」

走って感じたことを聞くとチームスピカのメンバーは顔を合わせて困惑した様相を見せていた。

「適正距離に合わないからってわけじゃないの？」

「そういうわけではなく……生まれてこの方履いたことがなかったの……」

「こういつた場合ってどうなんですの？ トレーナー」

話を聞いたメジロマックイーンが沖野トレーナーに意見を求める。

「いいか？ 蹄鉄付きのシューズを履く理由ってのは、速く走るためのものだ。高速で走るレース時にかかる足の負担を抑えるため、コーナーでのグリップ力を上げるため、主にそういった手段のものなんだが……。だからこれから本格的に走るとなると

その重さに慣れることが今後の課題な訳だな」

「じゃあ、今はただ走りきることを目指せばいいと?」

まあ、そうなる、と歯切れの悪そうに伝えてくる沖野トレーナー。自分自身また不安になつてきた。自分を信じる事ができない不安感が心に重くのしかかつてゆく、私はこの模擬レースを走りきることができるのだろうか…。

「でも、シンバシさんとても速いよ?」

「…えっ?」

思いがけない言葉が飛び込んでくる。その言葉の飛び出た方向を向くとそこにはクリスちゃんがいる。

「クリスちゃん…、だが、シューズの有無で生まれる差は大きいんだ…」

「でも、いつもわたしより速く走ってるもん」

「クリスちゃん…」

訴えかけてくれるクリスちゃんを見てウルつと来ていると、何かに気づいた様子の沖野さんが松岡さんに向けて問いかける。

何か突っかった様子の沖野さんは何か思い出しながら口にする。

「…そういえば松岡、クリスちゃんがこの前ジュニアカップで優勝してたのを話してたよな？」

「はい、先月に」

「…いつも練習しているところってどんなところだ？」

「天候によって環境が良く変動しますが、ダートコースです！」

その言葉を聞いて松岡さんはニヤリと笑う。まるで勝機を見つけたかのようなその顔をこちらに向けて

「この勝負、いけるかもしれん」

と、そう呟いた。

憧れとの走り

「何かいい改善案は教えてもらえたか？」

一周のウォーミングアップを終えてスタート地点にいるエアグルーヴさんがそう問いかけてくる。

あの後沖野さんは改善案を私に提示してくれた。

といつても物理的に足が軽くなるような改善ではなく、精神的な物を。

『クリスちゃんといつも走ってるのって多摩川の練習場だろ？ トレセンから十数キロ下ったところの』

『ええ、そうですけど…』

『毎日のように走ってたって事はこの前の大雨の時の次の日も行つたんじゃないか？』

多摩川の河川敷は大雨が降ると濁流に吞まれて地面がほとんど冠水する。数年前には河川敷の堤防を越えて住宅街まで水が流れ込んで大惨事になっていた。この前の大雨が降った日も例に漏れず一面が水浸しになり、水が引いた翌日まで走るのを我慢する

羽目になっていた。流石に松岡さんとクリスちゃんは初めての東京での大雨に来ることとはなかったので私一人でグラウンドに出たのを覚えている。

走りたい気持ちを押しとどめていたからか翌日は年甲斐もなく、一面がぬかるみになっていて、足を滑らせるとどきどきと気がせいで走り続けて、家に帰った時に母さんに悲鳴を上げられたこと覚えている。

『その時の走り心地を思い出してみる』

そう言われて思い出す。

目を閉じてあの時の環境を辺りに再現する。確かあの時はテンションが上がっていたとはいえ、足場が悪く走りにくかった。

何せあの河川敷はモグラが穴を掘れるほど柔らかいため、水をよく吸って粘りっこい土になる。

走りの一歩一歩が足を取り、シューズの底には泥の塊がへばり付く。

まるで重りを足につけたみたい……！

その場で足を回転させると、あの時とどこか似た感覚を覚える。

あの時もこんな感じで重かった、でも私は何をした？

…朝からグラウンドを走り始めて満足するまでの間ずっと走り続けた。あんな環境

だからこそどれくらいの速さが出せるのか気になって力を振り絞って足を動かした。

『!』

『わかったみたいだな、じゃあその時みたいに走ってみるんだ』

『はいっ!』

後はお前自身のポテンシャル次第だ、そう伝えてきた沖野さんの眼差しに希望を感じた。

實力差の大きいこのレースでの勝ち筋があるかもしれないという希望を。

「その顔は…いい助言が聞けたみたいじゃないか」

がんばれ、と肩をたたいて激励し再び定位置に戻るエアグルーヴさん。

まだあの時みたいにはいけないけど、徐々に熱を入れる。額を伝う一滴の汗が蒸発するまでの興奮を求めて。

思えば疾うの昔から私はウマ娘なんだ。ヒトよりもはるかに力強い肉体を持っていてそれを扱うことが出来るのに、ヒトの頃の感覚を引きずって折角の持ち味を活かせな

くては意味がない。ヒトだったころの感覚も時には必要だけど今に關しては違う。

「そろそろ始めようか」

「はっ」

ボトルの水を口に含んだ会長がターフに戻ってくる。

日没が差し迫っているのもあり、涼しげな風が辺りに吹き始めた。

思わず身震いしてしまう。それが風によるものなのか、他のものかわからないまま。

ゲートも何も無いウッドチップのコースに、横一線に二人のシンボリドルフが並ぶ。

一人は上手くスタートダッシュを切るために慣れた姿勢を取り、もう一人は数秒ほど立ち尽くした後、両手を地面に置き前かがみの姿勢をとった。

俗に言うクラウチングスタートの姿勢の真似事をしたことに目を丸くするも、すぐさま走る方向へと目を向けた。

右手にフラッグを握ったエアグルーヴさんがフラッグを……振り下ろす。

瞬間足に力を込めて走り出す。

後方からウッドチップが周囲に散らばる音が聞こえる。

ウマ娘の力を逃がしまくってほとんど活用できていない付け焼刃どころではないクラウチングスタートもどきは意表を突いたらしく、横にも前方にも会長の姿は見えない。

どうやら最初は先頭に飛び出ることが出来たようだ。

勢いを保ったまま、あの日に考えていたことを思い出す。

如何すれば速く走れるか、私はそれだけを考えていた。いつもと同じ速さで走るクリスちゃんがここにいたらどうすれば勝てるか、いつもの自分ならどの位速いか、そしてギンシャリボーイならどう走るか。

私はいつも仮想ライバルとの勝負に燃えて走っていたんだ。

どうすれば負けないかを考えて、足りない技術を補って燃える情熱がより強くなる。会長、全てのウマ娘に頂点に立つ七冠ウマ娘。あの日見たギンシャリボーイとはどつちが凄いのかは想像がつかないけれど、私が私になる前にとても強いコンプレックスを持っていった相手。

そんな相手を前に靴がどうか言って手を抜くなんて私らしくないだろ？　そう自分に問いかけながら足の回転を速める。

それでも後ろに感じる違和感は着々と強くなつてゆく。気が付けば走り出して200メートルもしないうちに私を追い越してしまっていた。

「ッ!!」

のこり1800メートルほども残しているなか抜かされてしまったことに作戦の甘さを痛感させられる。

シューズなど気にもしなくなった走りでもなお軽々と抜いてゆくのだから、私と彼女にはとてつもない実力差があるのではないかと。

「…っえ?」

しかし違和感に気付く。走っていてもなお冴えわたる思考がシンボリルドルフの走りに何処か意図があるのではないかと働きかけてきた。

私を軽々と追い抜いたにも拘らず、微妙に力を振り絞れば肉薄できる距離を保った會長は、とてつもなくきれいなフォームで走っている。まるで手本を見せるかのように。

本意かわからない意図をくみ取り、走りの中に取り入れると目に見えて動きが良くな

る。

まるで後方から追いかけていた時に私の走り方の改善点を見抜いていたかとさえ思える走りで、近づくたびにまた距離を離していった。

1600メートル。ギンシャリボーイが出走していた位置を通過する。

…熱くなったからか、その瞬間から血が上った視界に何か幻覚らしきものが見え始めた。

その幻覚の姿は鹿毛のウマ娘、ギンシャリボーイにとても似ており、あの時と同じ走りで私を追い越し、遂には会長までも追い越していった。

「!？」

その走りは世界各国の魑魅魍魎、いや精鋭たちを出し抜いた私の目に焼き付いた走りと同じと一寸も違わない。

会長は見えていないのか、私に合わせた走り続けている。……もし本気で会長が走ったならギンシャリボーイとどっちが速いんだろうか……。そう思うと居ても立つても居られなくなった。

視線の先をギンシャリボーイに捉える。…ギンシャリボーイの走りを私自身で再現

するのだ。

いつも心の中にはギンシャリボーイ、酔いどれの手にはいつもお土産のお寿司。今日のネタはなんじやろな。

。。。

雰囲気が変わったことにシンボリドルフは気付く。

視線やプレッシャーといったものがすべて別の方向に向いていることに勘付いたのだ。

背後の様子が気になり右目だけが見える程度振り向く。そこには得体のしれない走りをするシンバシルドルフがいた。

「!？」

一体この瞬間までに何が起こった!? とシンボリドルフの脳内で疑問が舞い上がる。

最初に後方で観察していた走りに程近いその走りは、最初よりも遥かに完成度が高い

フォームに仕上がっている。

自身が心が折れない程度に走りを見せていたからというよりも、まるで別の誰かがその場において走りを見せているかのようだった。

走りを見よう見まねで再現できることはわかっていたが、この場で新しく走りを編み出すとは思ってはいなかったため、ついつい力を入れて行ってしまった。

全力で戦いたい。それはシンバルドルフというウマ娘を知ってから今までの時で一秒たりとも忘れたことはなかった。

期待の心を膨らませすぎて、長時間話してしまったり、練習時間のコースをわざわざ借りてしまったりと、自分らしからぬ行動を取ってしまうほどだった。

実際に彼女の走りを見て少しの失望を覚えてしまったが、それでも自身に向けてくる熱意、戦意を前にすると、今すぐではなくともいずれ全力で競い合うことができればいいと思うようになった。

その結果が先ほどの走りだった。私に追いついてこいと、あわよくば急成長して全力で走らせてほしいという思惑は、変な方向に飛んで行ってしまった。

——あの走りは完成した走りだ。

そう頭のどこかで強く自分の声が鳴り響く。

1100メートル。もうすぐで半分を切ろうとする其処で再び振り向いてしまった。

何処か手を抜いてあげようと慈悲めいた考えがあつた脳内をその光景が、その目が吹き飛ばす。

—— 全力で走れ

見開かれたその目が強くそう語っていた。

振り返つた顔をすぐに前に向け、足が全力で動き出す。背後から迫る重圧が保つていたペースを乱し、まるで皐月賞、日本ダービー、菊花賞の時のように緊迫感を抱かせてくる。

ずっと思ひ込んでいた。あの走り、全力のように見えていたあれが彼女の今の本気なのだ。

…違う、彼女の本当の走りは追い込みだ。

このままゆっくり走っていたら隙をついて追い抜くつもりだった。そう直感する。

…瞳から感じたそれが果たしてシンバシからのモノなのか、私の勘なのかはわからなかつた。

。

。

。

様子を見るかのようにこちらをちらりと振り向いた会長に目が合った途端、先ほどもとは比べ物にならない速度で走り出した。

どうやら思念が伝わったらしい。先ほどまで強くのしかかっていた威圧感が心なしか和らいだ気がした。

2100メートル。

コースを一周するレースのはずなのに、幻覚は依然私の前を走り続けてくれている。

とても都合がよかった。私と会長の勝負以前に、私が憧れを持つ相手であるギンシャリボーイとわたしが並々ならぬ思いを抱くシンボルドルフはどちらが速いのか、とても気になっていた。

走り始めた距離も心持も全てが本番とは違い、会長は全力を出していないかもしれない。ギンシャリボーイの幻影ももしかしたら私が願った願望でしかないのかもしれない。それでも二人は憧憬を抱いた走りを見せてくれている。

ギンシャリボーイの幻覚は私のすぐ近くに位置取り、かなりスピードを緩めている。

心当たりがあつた。ギンシャリボーイを初めて見たあの日、レースの後半に見せた常識離れした走り、そして見えた幻覚。クリスちゃんとどうしてそんな走りだったのか考えた時に名前がないと不便だと決まった名前、スシウオーク。

それを出すために溜めているのだ。脚を。

一朝一夕で真似できるとは思っていないが、こんなに近くで観察できるのならば賭けに出てみるのも悪くないと思った。

会長が観客席を越え、コーナーに入ろうとしたところギンシャリボーイと私は観客席の前を通過する。

——クリスちゃんと目が合った。

応援してくれているチームスピカの一団の中、中央にひよつこりと顔を出すクリスちゃんは、何かを悟った顔で頷いている。

私の勝利を願ってくれているから、ギンシャリボーイの走りを相談したことがあるからピンときたからか、理由は分からない。だけど強い想いを感じて頷き返す。

殆ど同時に幻影が足を解放する、スシウオークの前段階の走りでコーナーを攻める。幻影がどんどん上がって行って会長に肉薄していく。

…軽い。

目の前を走る幻影の動きを模倣して走ると、その走りはまるで地面と数ミリほど浮いているかのような感覚に陥る。ウマ娘に備わった力を過信しすぎた走りでもない、かといってヒトとして力を出せる程度に抑えた走りでもない。

…変なたとえば、模倣した動きをしていると、まるで地面を滑っているかのように前に進んでいた。

歩幅と進む距離に違和感を感じ始めたその頃、残り400メートル。ギンシャリボーイが立った。そう直感が教えてくれる。

コーナーを抜け、ゴールが見え始めたその頃、急速に離れてゆく幻影。後ろから見ているからか、あの日見たスシウオークは見えない。

だがそれが動きを模倣する助けにつながった。着々とペースを乱した会長の姿が近づいてくる。

それは会長がスタミナ切れを起こしたからではなく、うまくギンシャリボーイの走りを真似できていたからだろう。

残り200メートル、そして100メートル。その辺りでギンシャリボーイの幻影が会長を抜かす。私はというと抜くことは敵わないが、大きく離れた中盤と比べるととても近づき、6バ身差ほどの距離にまで来ていた。

全力を出し尽くすつもりで足を回転させる、くれぐれも手本になったギンシャリボーイの幻影の走りを崩さないように、けれども会長、シンボリドルフへと届くようにと。

「うおおお——っ！」

ゴールが近づく。楽しい時間はあっという間に終わりを迎え、走る勢いに任せて私た

ちはゴールへと飛び込んでいった。

クールダウン

コース上に敷かれたウツドチップを散らしながら、先着したシンボリルドルフに二バ身ほどの差をつけられてリギルのヒシアマゾンの立つゴール位置を走り抜ける。

「おいおい……。これがさつきまで迷走してたやつの走りか？」

目の前で繰り広げられた模擬レースに沖野トレーナーはつい口走ってしまふ。

シンボリルドルフに勝つかどうかに関して9割9分勝機を掴むのは難しいが、それでも三冠ウマ娘との戦いでプレッシャーに負けないようにと、ただただ自信を持って走り抜けることさえできればと思いいアドバイスを口にした。

このレースがシンバシの成長の糧になることを願って。

そんな思惑をはるかに上回って、シンバシはレースの途中から三冠ウマ娘の実力に届きうるまでの急速な成長を見せていた。

残り半周の時点でシンバシとシンボリルドルフには十バ身以上の大差が生まれてい

た。だがそこから追い上げて二バ身まで持つてくる末脚。

シンバルドルフというウマ娘が持つ末恐ろしい程の素質、トレーナーとして万全に育てることが出来たらどんな夢を見せてくれるのか、無意識のうちに口に啜っていたキャンディに力が入る。

「……上がり3ハロン20秒台……!?!」

右手に握っていたストップウォッチに刻まれたタイムを見て驚愕を浮かべる沖野トレーナー。

後半になって驚異的な末脚を見せたことから少なくともいいタイムが出ることは確信していた。

だがこの記録には間違いだと思わざるを得なかった。

それはトレーナーとしての長年の経験から30秒台を切ることは難しいと、仮にできたとしてもそれは短距離レースに限るはずだと。

しかしそうではなかった。

「なあ、松ちゃん。上がり3ハロンって測ってたか？」

「えっ、いや……見入ってしまったって何にも……」

「そうか……」

申し訳なさげにそう呟く松岡トレーナー。

無理もないと思った、沖野トレーナー自身もシンボルドルフとシンバシルドルフの走りに魅入られた者の一人だったのだから。

シンバシの走りを初めて見た自分でさえそうなのだから、普段から彼女を見ていた松岡トレーナーの目にはそれ以上に感じるものがあつたのではなからうか。

……恐らく自分たちだけではない。

今この場にいるウマ娘たちも、トレーナーたちも大なり小なり思うモノがあつたのだらう、辺りにいるチームスピカの各々も闘志を燃やしているように見える。

「スズカが見ていたら何て言うだらうな……」

今この場にいないサイレンススズカに意見を尋ねてみたくなる、かつて彼女を見出した時に感じた感覚。

音さえも置き去りにした景色を幻視させた彼女の走り、在り方は違えども、それに似

たものを感じた。

二人だけのレースのはずなのに複数人が走り抜けたような気がする。

……キンちゃん走りをしていたかのような気も。

『私の方が速いですよ?』

「はっ!?!」

後方から聞き慣れた声が聞こえた気がしてビクつきながらも反射的に振り向く。

「……………どうかしましたか」

「いや、後ろにスズカがいた気がしてな……」

「そんなわけ……ないですよね?」

「多分。……あつ!」

どうかしたかと思つめてくる周りの視線から逃れるように手に持ったストップウォッチを覗き込んで気付く。

再び見つめたストップウォッチの盤面に記録されていたタイムが消し飛んでいた。

「……やっちゃまったあ〜！」

。。。

「はあっ……はあっ……」

小刻みに息を吐き続けながら体を走らせる。

陽の光が徐々に変わっていき、青空が薄くオレンジ色に染まってゆく中、私は強い達成感のようなものを感じながら足を緩めてゆく。

ゴールの看板を持ったウマ娘の人から二十メートルは離れただろうか、走りの勢いも、心拍も落ち着きを見せたと感じて今度はゴール前まで歩く。

「……負けちゃったなあ」

負けた。

そう口に出すと実感できていなかったものが徐々に受け入れられるような気がする。

公式のレースではないとはいえ、自分の全力を出し尽くしたレースで負けた。極度の集中の中に見えた彼女にも、そして会長にも。

負け戦みたいなものだから別に、心に傷を負ったわけじゃない。もともと勝ちを獲るにはまだ実力差がありすぎた。

だというのに形容しがたい想いが湧き出る。顔には浮かばない小さな感傷が。

…河川敷方面から運ばれた風が体を吹き抜けて、熱く火照った身と心を冷ます。

最初に走った時もこんな時間帯だったな……。

あの時は走る喜びを知った、なら今はどうだろうか。

極小の疲労と共に爽快感が身を包んだあの日。それに対して今、有り余る体力を出し尽くすように走り、強い倦怠感が体を重くする中、ただ一つ胸の奥から感じる苦しさ。

息苦しいわけじゃない、心臓は走りを緩めた時から緩やかに平常時の状態へと戻ろうとしている。

物足りない、苦しい。もう一度走ったら今度は勝つのに、そんな何の根拠もない自信を浮かべ無意識に唇を噛む。

「…そうか、負けて悔しいのか」

怒り、悲しみ、嫌悪、恐怖。

ありふれた悪感情から最も自分の気分に近いものに行きつく。

悔しき。怒りを含んだこの苦しきを永く忘れていた。

私がこの体になってからひたすら追い求めてきた速さの先、それはたった一人の自己満足の世界から、いつしか他の人を巻き込む世界へと移り変わるようになった。

：社会競争から逃れて現状維持を享受してきたウマ娘になる前の自分には想像も出来なかつた事だろう。

ウマ娘の走りを知って、凝り固まつた心は少年の頃のような情熱を取り戻したと思つていたが、まだ一部だけだったんだな……。

幻のようなギンシャリボーイの走りを見てから速さを追い求めた。

だからレースの場という同じ土俵に上がった。

今まではどう考えて取り繕おうと、結局は速くなればどうでもよかつたんだ。最速を再現するためならと飛び込んだウマ娘達が競い合うレースの場でも、勝とうが負けようが結局は魅入られたあの走りが出来ればいいと。

闘争心という牙が抜け落ちた腑抜けを再び燃え上がらせるには自己研鑽だけじゃあ意味がなかつたんだ。

立て続けに舞い降りた幸運によって、それを今実感できた。

「……」

視線を少し離れた場所にいる会長に向ける。

この広いコースの上、いるのは会長と私、そしてゴール看板持ちの子とエアグルーヴさんくらいだからか、視線にすぐ気づいたようで会長は『取り敢えず集まろうか』と言わんばかりに目配せしていた。

息は気付いたら整っていた、意図を汲んで会長に近寄りながらゴール前まで歩く。

「まずはお疲れ様、だな。シンバシ、素晴らしい走りだった。君のあの走りは独学か？」
「ありがとうございます。…基礎の基礎は松岡トレーナーに学びましたけれど、大部分は見様見真似の独学です……それが一体？」

「いや、初心者らしからぬ走りをしていたから気になったんだ。…だがそうか、模倣か……一体誰の？」

会長は小さくそう呟くと、思考の中に入り込んでしまった。たぶん彼女の記憶の中に私に似た走りのウマ娘がないか探しているんだろう。

多少居心地が悪いがしようがない。日本ダービーの日に見た幻に魅入られただなんて言ったところで信じてもらえることでもあるまい。

「…会長」

「……っ、どうした？」

「会長の夢、それを叶えるために沢山のウマ娘の走りを見てきたと思います。…私は貴女から見てどう映りましたか？」

「ふむ…。基本的に私たちの走りは体格や気質に合わせてフォームや戦法が定まっています。さっきのレースの序盤、私は君の前に貼りついていました。その時の動きを覚えていますか？」

「ええ」

レースの再序盤、一度私を追い抜かした後の走りのことを言っているのだろう。

抜かした後にきれいなフォームで前方数メートルを延々と走っていたら、いくら鈍くても私がアップで不甲斐ない姿を見せたから、今回の勝負を捨てて走り方を覚えさせようとしたんじゃないかと思うはずだ。

…その後に全く関係ない走りで追従してきたもんだから怖かっただろう、私だったら

怖い。

「その様子だったら気付いていたようだな、私と君の姿形は極めて似通っている。それに、デビューはおろか走った経験も少ないときた。ならば今回は勝負として成立しなくとも差支えないかと考え、将来の走りの参考になるようにと走ってみただが……うん」

「……そこまでしてもらって、なんか申し訳ないです」

「いいや全く気に病まないでくれ、確かに見知らぬ走法で猛追してきたのには驚いたが、そこからは私も久々に熱くなれた気がするよ」

そう口にした彼女は少し照れた様子で続ける。

「実は本気を出したのは久々なんだ、先輩のあるウマ娘と走った時以来だろうか……」

まだ若いながらも現役から退いた彼女は、今は生徒会長としての職務に追われて学園内外での活動に身を置いている。それは偏にウマ娘全員の幸福を願ったからなのだろうが、それで本人が満足できないのは本末転倒だと思ってしまう。

私がシンバシールドルフとなって走ったその時から、ウマ娘にとって心置きなく走れる

ことがどれだけ幸福なのかは十分理解しているつもりだ。

「……なら、今回のレースは息抜きになりましたか?」

「——ああ、もちろんだとも」

横に並んだ会長は、顔をこちらに向けてそう告げた。

その表情は沈もうとしている陽の光で窺い知ることが出来なかった。

。。。

話がひと段落付いたところで、気が付いたらエアグルーヴさんともう一人の子が待つゴール前に辿り着いていた。

20メートル程度で話すには長話しすぎたかもしれない。

「アンタいい走りっぷりじゃないか! ルドルフの奴が見学しに来た子を引つ掛けたつて聞いたときは不安だったけど、良いタイムン見させてもらったよ!!」

「ははは……耳が痛い」

戻ってから直ぐ、何か口に出そうかと思う間もなく、ゴールと書かれたパネルを首に掛けた日に焼けた肌のウマ娘が劳いの言葉をかけてくる。

その言葉に混じった今回のレースに対する認識、チームメンバーにさえそう思われているなら今日のこととはどんな噂になっているのか不安だ…。

「ありがとうございます…。…えーつと」

「ヒシアママ！」

「ちよっ！ 脇は止めろって!! …ああ！」

返事をしようとして言葉に詰まったところを、面と向かった位置にいるエアグルーヴさんに目配せして助けを求めたら、すぐに察したようで褐色の子の脇腹渡りを肘で小突いてくれた。脇が弱いのか悶絶したようだが、エアグルーヴさんの意図を察したみたいで再び話し始める。

「自己紹介がまだだったね！ アタシはヒシアマゾン！ よろしくな！」

「ヒシアマゾンさん「堅っ苦しいのは苦手だから気軽に呼んでくれて構わないよ！」…了

解です、じゃあヒシアマさんってよばせてもらいます。……私はシンバシルドルフです。紛らわしいと思うのでシンバシで大丈夫です……」

「おうよー！ ……そういえばルドルフとシンバシってよく似てるけど、生き別れの双子……ってわきやないか」

ヒシアマさんが私と横に並んだ会長を交互に見比べてそう呟く。

「テイオーが怯えていたドツペルゲンガーの件から調べていたが、不思議なことにそういった事実は全く無いよ」

疑問でもないような冗談だったが、会長がちらりと此方を一瞥した後答える。ドツペルゲンガーの件と告げられた直後から心なしかヒシアマさんの顔色が悪くなった気がした。

「そ、そつかあ……ど、ドツペルゲンガーって……出会ったら死んじまうってアレか……？」

「ああ、テイオーを筆頭に生徒たちから報告が相次いで、会長と私がプライベートで調べ

ていたんだ」

会長に代わってエアグルーヴさんが説明する。

……お前のことだぞと言わんばかりに説明ながらにこつちをじつと見てくる。若干居心地が悪くなって助け舟を求めようと隣の会長へと目をやると

「……」

「っ！」

こつちも同じようにジツと見つめてきていた。

「——自分がトウカイテイオーさんに問い詰められたときに咄嗟に誤魔化すネタで言うだけの眉唾ですから、別に気にしないでもらって……」

圧を感じる気がする視線に負けて白状した私の言葉にヒシアマさんはとても安堵した様子を浮かべた。そんな怖い話でもないと思うが、どうやら恐怖は和らいだようだ。

「まあ、ドツペルゲンガーではないと解ったことで余計にシンバシの存在が謎になったのだが」

「自分は新橋家のシンバシルドルフであつて魑魅魍魎の類ではない筈です!! 多分!」

会長が揶揄う様に余計なことを言うため、強引に話を終わらせる。

確かに自分の中身は複雑怪奇なよくわかんない存在だし、ギンシャリボーイを筆頭に
変なものを見るが、『シンバシルドルフ』本人はこの世界で生まれたたった一人のウマ娘
に違ひはないのでこの話はここで終わりだ。

会長が何故か肩を震わせたのを見て私たちは首を傾げたのだった。

『ようこそ』

「まずはお疲れ様、良い走りだったな」

「ありがとうございます」

松岡さんの励ましの言葉に礼を告げる。

此処はチームスピカの部室。トラックの観覧席から切り上げて、今はチームスピカのメンバーとクリスちゃんたちと共にスピカの部室に訪れていた。

部屋を見渡してみたら本来は合流する予定だったからか、部屋の奥に置かれたホワイトボードにはでかかかと、

『歓迎!! ようこそチームスピカへ!!!』

と書かれている。隅っこには可愛くデフォルメされたスピカのメンバーが描かれていて華やかだ。

流石に飲み物や悪くなりやすそうなものは冷蔵庫に入れたみたいだが、部屋の真ん中

にあるテーブルにはたくさんのお菓子と空のコップ、そしてお菓子以上にたくさんのお菓子が置かれている。

なんか悪いことしちやっとなあ……。

会長たちとはクールダウンがてら暫く談笑した後。

元々チームリギルが貸し切っていたコースを使わせてくれたリギルのメンバーとトレーナーの人にお礼をした後に解散をした。

最後に会長に、

『——後世可畏。シンバシルドルフ、君の成長に繋がる全ての物をトレセン学園は揃えている。その総てを糧として再び私の前に立つ時を待っているよ』

そう告げられてから別れた。

最初から彼女の眼にはお見通しだったのだろう、速さに憑りつかれた私の考えなど。

……まあ技術を磨くために学校に通うなんて当たり前のことだけだ。

それでも彼女の言葉に私の心が熱くならないわけが無い。自分の走り狂いな本能は今すぐにでも心の中で暴れまわっている。

彼女はこう言ったのだ。「次はもつと強くなってから来い」と。

もう一度言うが熱くならない訳がない。

ウマ娘になってからの短い時間、シンボリルドルフという名を聞かない日はなかった。

……まあそれは自分の見た目のせいでもあるけれど、それでも彼女が凄いことはわかった。

シンバシルドルフが病むのも理解できる位には。

強さか、人柄か、全てのウマ娘の頂点に立っているといつても過言ではない影響力を持つカリスマ。そんな彼女に目を付けられたんだ、私は。

「自分の不足を強く実感しました……」「——あ、耳が、耳が……」

「レース未経験者にあんない走りされちゃあ、オレたちの努力が形無しなんだよなあ」
自意識過剰になっていたと無意識のうちに耳がへたり込む。

その言葉を聞いてローポニーテールのボーイッシュなウマ娘、ウオツカがそうばやいた。同意するようにツインテールの子、ダイワスカーレットが続く。

「そうよ！ 私たちみんなスピカの未来の後輩にかっこいい所見せたがってたのに、今じゃ震えあがってるんだから！」

部屋の中にいるスピカメンバー全員の耳が跳ねる。

「——っ！ 嗚呼、むり……」

「べ、別にカイチョーがあんなイキイキした姿を久しぶりに見たからって……」

「違いますわ！ メジロの者として恥じない在り方を見せよう……」

「そ、そうですよ！ けっして先輩風を吹かせたかったわけじゃ……」

弁解。

後輩から尊敬される先輩になりたかったのだと言葉の節々から露骨に伝わってくる。

一人言葉の用途を間違えている気もするが、その気持ちはよくわかる。

松岡さんの傍に立つ少女を見る。

ズボンを握って立っているクリスちゃん。

一日中トレセン学園に居たから、小さい体には堪えるみたいで明らかに口数が少なくなっている。

私さ今日諦めないでシンボリルドルフに追いつがれたのはこの子の存在があつたらだ。

ギンシヤリボーイ。奇しくもその名前を持つたウマ娘に私は憧れて、憧れられてい

る。
だからわかる、憧れの姿に追いつきたいという気持ちと憧れとして輝き続ける自分になろうと努力する両方の気持ちだ。

「えつと、頑張ってください！ 先輩！」「……これは、夢？ いや現実!? あたし一体いつ天国に!?!」
ヴァルハラ

近々私もチームスピカの一員になるのだ。先輩には礼儀をもつて接することに異議はない、とうか自分と違って、小さい頃から夢に挑戦し続けているこの子たちに敬意を持たないはずもなく。

切磋琢磨しあうチームの仲間になるのだから喜んで先輩風に吹かれよう！
そんな心意気で口から出た言葉は思わぬ相手に直撃した。

「——あたしの生涯に、一片の悔いなし……ガクツ」

『!?!』

場が騒然とする。大なり小なり先輩と呼ばれたことに反応していた中で倒れたウマ娘に、困惑交じりの声が漏れる。

そのウマ娘はデジちゃん。——アグネスデジタルだった。

さつきから心配を消して脇役に徹していた彼女は安らかな寝顔を浮かべている。

「デジちゃん!?!」

「——ひうツ、あたしの事を呼ぶウマ娘ちゃんの声……? ああ、天使のウマ娘ちゃんでしたか……」

ガクリ。起こすために駆け寄って、体を抱えながら声を掛けるとすぐ意識を取り戻したが、状況を確認した途端また魂が抜ける。——だめだ。

この子をこの部屋の中で無事に起こすにはウマ娘の私では無力だ……。

——そうだ、ウマ娘じゃなかったら普通に起きるのでは!?!

「松岡さん……はだめだ、沖野さん!」

「応ー！」

「なにやってんだ？ ゴルシちゃんを差し置いて」

今にも眠ってしまいそうなクリスちゃんが傍にいる松岡さんではなく、手の空いている沖野さんに声を掛ける。

快い返事が返ってきたその時、チームスピカの部屋に第三者が乱入してきた。

「ゴ、ゴルシ……！」

。。。

さつきまで置かれていた菓子やニンジン類が片付いて、代わりに言わんばかりにテーブルの上には料理が置かれている。寿司や刺身といった海鮮料理だ。部屋の中はやや磯臭い。

午前中に松岡さんと電話していた時に乱入してきた葦毛のウマ娘、ゴールドシップが釣ってきたマグロが使われている。

ゴルシちゃんは混沌とした状況の中にもっと深い衝撃を齎した。

彼女はドでかいクーラーボックスを抱えてやってきたのだ。松岡さんのスマホを片手に。

茫然としている中で放った彼女の自己紹介は強く脳裏に刻み込まれている。

『んあ、シンバシじゃん。アタシはゴールドシップ、ゴルシちゃんって呼んでいいですよ。なあなあおめー天然派？ 養殖派？』

皆が固まっている中、唯一メジロマックイーンさんが「どういうことですか?!」と突っ込みを入れ、その言葉で解凍された自分は訳も分からないまま天然派と答えた。

何故かその言葉に気を良くしたゴルシちゃんはクーラーボックスからマグロを取り出し、振舞われることになった。

デジちゃんはゴルシちゃんが捌いたマグロの頭を目の前に置かれたことで無事に再起動を果たした。

沖野さんが恐る恐るみんなが抱えていた疑問を投げかける。

「ゴルシ……、このマグロ一体どうしたんだ……?」

「え? ボギンスカヤとコベレフにゴルシちゃん号貸す代わりに貰ってきた」

「誰ですの……?」

誰?

ボギンスカヤとコベレフとは誰なのか、ゴルシちゃん号とは一体何なのか、高価そうなマグロを一尾丸ごと貰ってくるなんてどんな貸し借りなのか。

……わからない、いやわからないほうがいい気がする。その先は虚無だ。現実逃避気味に皿に盛りつけられたマグロの刺身を箸で取る。

どの部位なのかはわからないが、さつきまで釣ったばかりの状態だった赤身は新鮮そのものだった。

「あ、おいしい!」

「おっ! うれしいこと言ってくれるじゃねえか! アタシも釣った甲斐があるってもんよ!」

適度に醤油を漬けて口に含ませた赤身は、とろけるような口当たりでとても美味しい。自然に漏れた言葉を皮切りにみんなも食べ始める。とても好評だ。

「ゴルシちゃんは嬉しそうに何か言っているが、全力で聞き流す。」

「トレーナー、部屋そのまんまだったけど、なんかあったのか？　それで間に合ったけど」

「そうか、ゴルシは知らないもんな。シンバシがシンボリドルフとレースしてたんだよ」

「ほおくん、同キャラ対戦？」

「違うが。」

「でもそれにしちゃ良い顔してんな。チームスピカも安泰か？」

「是非とも来てほしいが、引く手数多だろうなあ」

確かにチームリギルのトレーナーの人——東条さんをはじめ、あの場にはトレーナーが何人もいた。実際に何人かには声を掛けられている。

選択肢はいくつもある、でも自分としてはチームスピカが一番惹かれていた。

クリスちゃんから始まった松岡さんとの付き合い、そして沖野さんと出会ってスピカ

のウマ娘達に会えた。

魚の匂いで目を覚まし「おいしいね!」とこちらに笑みを浮かべながら椅子に座って海鮮丼を食べているクリスちゃん。

お互いに同じ刺身を狙ってしまい、じゃんけんで所有者を決めようとしているダイワスカーレットさんとウオツカさん。

刺身の美味しそうなところを目利きして優雅に食べているメジロマックイーンさん。全ての海鮮料理を山盛りに積み上げて美味しそうに食べているスペシャルウィークさん。

寿司を食べながら黄色い飲み物片手に時折ちらちらとこちらを見てくるトウカイテイオーさん。

自分よりもみんなの食べる光景を見てお腹一杯になっているデジちゃん……あ、また倒れた。

そしてゴルシちゃん。

部屋の奥に変わらず置いてあるホワイトボードの文字に目を惹かれる。

偶然の出会いから生まれた連鎖で連鎖で私はここにいる。その現象を表す言葉を私は知っていた。

——運命。

皆に手を振って注目を集める。

「沖野さん、スピカの皆さん。私、このチームに入ってもいいですか？」

みんなが目を見合わせる。

デジちゃんはこの後に起こる事を予想して待機状態に入った。

答えはとうに決まっていたようで、全員の目が自分に向く。喜色を込めたクリスマスちゃんと松岡さんも加えたチームスピカの18の瞳が自分を貫く。

満面の笑みを浮かべたクリスマスちゃんが「せーのっ」と言うと同時に全員が息が？む。

『チームスピカへようこそ!!』

「っ！ よろしくおねがいます！」

「ああ……三女神さま、この場所に連れてきてくれてありがとう……」

精一杯の感謝で発した言葉は歓迎の声に掻き乱される。

それでもよかった、自分の想いはチームスピカに伝わり、スピカの総意を一身に受け

る。

無事チームスピカへの所属が決まった私は、飛び込んできたクリスちゃんを抱きとめ、笑顔で浮かべた。

そして……。

トレセン学園生徒会による全校朝会。

各チームで夏季合宿が行われた夏休みが終わり、二学期が始まって初回の朝会。毎週月曜日に行われるその朝会は、前期と同じように執り行われていた。

会長であるシンボリドルフの言葉を除いて。

「今日は全生徒に対する連絡がある、編入生に関してだ」

体育座りで静聴していた生徒たちにざわめきが走る。編入生？　こんな時期に？

なんで朝会で紹介するの？　そんな疑問が大いに含まれた言葉の応酬が館内で響き渡

る。

そしてそれは会長の横に立つ副会長、エアグルーブの一喝によって静まり返った。

「諸君の疑問は大いにわかる。まずは順に追って説明しよう、彼女は前期期間中に私がスカウトした。入学準備をこの夏季休暇期間中に行つた結果、この時期になつたわけだ」

納得する生徒は多かつた。

トレセン学園に編入してくるウマ娘は多い。地方のトレセン学園だったり海外だったり、飛び級だったり。

決して珍しくはない頻度でウマ娘がやってくるのが中央トレセンなのだ。

それでも解せないのは朝会で紹介するという事。

普通ならその子が入学するクラスだけで行うハズの事をなぜするのかと疑問に思う者は多かつた。全校生徒に奇異の視線を向けられるなんていじめのような行為をして、会長にはいつたいどんな思惑があるのか……？

一部のウマ娘達は勘付いていたが黙っている。朝会なので。

「彼女にも了承を取っている、トレセン学園内の生徒会業務に支障が出るからだ。本日以降、私に関する公的な文書などは、生徒会室前に置かれた箱に投函する形でいこう……では、来てくれ」

壇上に立つ会長が手招きをする。

全校生徒の注目が袖幕の先からやってくる編入生に向いた。

「シンバシルドルフです」

威風堂々。

余りに自然に現れたその姿に誰もが一瞬目を疑った。

壇上で依然オーラを放ち続ける会長の真横に立つもう一人の会長。

シンボリドルフとは真逆にオーラは一切発さず、それどころか吸い込んでいる錯覚さえするその姿は、お互いに同じ制服を着ているからかもうどっちがどっちか分からなかった。

これが始まり、新たなライバルの誕生。

驚愕の渦の中で只のイロモノではないと勘付く者もいた。

段ボールで作られた学生帽を被る珍しい髪色をしたウマ娘。

対して見た目は奇抜ではないが、如何にも不良です、という雰囲気をした黒鹿毛のウマ娘。

いずれ競い合う時のことを考えて二人は一樣に笑みを浮かべた。

「ちなみにシンバシルドルフは中等部だ」

その可能性は今この瞬間潰えたかもしれない。

二人は同じように項垂れた。

『中等部?!?!』という全員の総意が混ざったどよめきが館内に再び響き渡る。

今回はエアグルーヴも何も言わない。

こうして混沌の中、シンバシルドルフの学園生活は幕を開けた。

シリウスとシンバシとボク

夏休み明けの最初の登校。

各々が合宿での思い出や夏休み中の出来事を語り合ったりする筈の空き時間、教室の中で集まって駄弁りあっている内容は考え得るそれらとは一変していた。

その内容とは編入してきた生徒会長シンボルドルフにそっくりなウマ娘について。全校生徒の前で編入してきた生徒を紹介するなんて前例は、編入してくるウマ娘が珍しくはないトレセン学園でも前代未聞の出来事。

そのことについて語る生徒もいたが、話題性が強かったのはやはり容姿について。校内の何処かしこでシンバシルドルフの見た目について盛り上がりを見せていた。

編入したクラスに野次ウマシに行った生徒もいる中、ここにも渦中の話題に話を咲かせるウマ娘達があった。

「今日来た子、会長さんにそっくりだけどテイオーは何か知らないの？ 会長さんの事なら何でも知ってそうだし……そういえばドツペルゲンガーの噂ってテイオー発祥

「じゃなかった？」

「——そうだよ」

テイオーの机に椅子を寄せ、肘を預けたツインテールのウマ娘——ナイスネイチャ。テイオーはその問いかけに口早に答えた。

怯えていた影法師の正体に気付いたその時から、テイオーの中では黒歴史になった噂。

夏休みで忘れ去られることを願っていたが、風化するにはもうしばらくの期間がかかりそうだった。

噂の事を誤魔化すように事の経緯を説明すると、少し残念そうにナイスネイチャはぼやく。

「——じゃあもうスピカに内定が決まったわけですか……折を見て声掛けようかなって思ってたのに」

「欲しいって言われたってあげないよ？ この前のオープンキャンパスの時にサブトレーナーがスカウトしたんだ」

「……もしかして有望株？ これから数年はスピカの天下になっちゃうのかあ、あはは

「……」

手を出す隙すら無いスピカの盤石の体制に驚きを見せ、乾いた笑みを浮かべたナイスネイチヤ。

ナイスネイチヤの所属するチームカノープスは、スピカのメンバーとレースで時折かち合うことが有った。

他ならないナイスネイチヤも現在海外遠征中のサイレンススズカと競い合ったこともあり、現状打破のための大物新入部員を募集していたのだ。

彼女の乾いた笑いには、この後スカウトしに行つて玉砕する他のチームへの同情の念も交じっていた。

「ふふん、そうかもねー カイチョーと一対一で競い合えるんだから見込みはあると思う。まだまだ技術は足りないけど、ボクがカイチョーのそっくりさんとして恥ずかしくないくらいに仕上げてみせるつもり！」

「会長さん?!? ずぶといとか何というか……ネイチヤさんには出来そうもないことをやってのける、これは有望ですわ……でも、これからはテイオーも先輩になるわけか」

「実感わかないなあ〜」

テイオーの言葉を聞いたネイチャは、その口ぶりに既視感を覚えた。

後輩に向ける想い、まるで自分の事のように期待して喜んで、悲しんで——感情を共有してくれた先輩が持つていたもの。

興味を抱いた理由が憧れの対象とそっくりだったから……なんてものだとしても、チームスピカではメジロマックイーンと並んで末っ子だったテイオーに新たに芽生えた成長の兆し。

——想いを抱くウマ娘は強くなる。

“カイチョー”への強い想いによって、デビュー前にもかかわらず強いテイオーが、後輩への想いを背負ってより強くなる。

ナイスネイチャはそんな未来を幻視して、ライバルとしては危惧を、クラスメイトとしては喜ばしい気分になった。

「お腹空いた〜、今日のランチは何にしよっかな〜？」

午前中の授業も終わり、昼食時になったことでカフェテリアは賑わいを見せている。午後は各々の自由時間。

主目的は夏季休業を挟んだチーム同士でのミーティングの為の時間ではあるのだが、それでも普段の昼休みよりは時間に余裕があるからか、人の流れも穏やかだ。

テイオーもカフェテリアでゆったり過ごすことを選んだ生徒の一人だった。

チームスピカも他のチームと同様に、この後ミーティングを控えているのだが、夏休み中に合宿をしていたこともあり、大方正式に入部したシンバシルドルフを交えての軽い練習と軽い交流をするだけと、あまり長くはならないのではと推測していた。

そんなわけで授業が終わってから少し間を開けてカフェテリアにやってきたテイオーだが、広い空間の片隅でざわめきが起きている事に気付いた。

「あれ、カイチョーだ！　おいカイチョー！　一緒に食べよ……？」

カフェテリアの片隅にあるカウンター席に見覚えのある姿を捉えたテイオーだったが、少しの違和感を覚えて立ち止まる。

ルドルフはあるウマ娘と会話をしていた。

隣の席に突っ伏している薄ピンク色の髪のウマ娘ではなく、鹿毛のウマ娘。シリウスシンボリ。

尊敬するカイチヨールによく突っかかっている印象を抱いているウマ娘。

以前そのことについて聞いてみたら、はぐらかされた上に子ども扱いされたので少し苦手意識を持つている相手だった。

だから特段珍しい事ではない……のだが、テイオーがいつも感じている雰囲気のカイチヨールから感じないのが違和感の原因だった。

普段であれば向かい合った瞳と瞳の間には電撃が走っている幻を見ることもあったのだが、今日に限ってはそうではなかった。

シリウスシンボリからはビリビリとひた走る雷光を感じるのに、対してシンボリドルフは絶縁シートで覆われているのかというほど平然としていた。

「……もしかしてシンバシ!？」

浅からぬ因縁を感じる二人にはあり得ないその光景を見て、テイオーはある結論に至った。

授業とランチについてで頭から抜け落ちていた可能性、渦中のウマ娘は何処に居るの

か。

質問責めにあつたか何かしらの要因で昼食を食べるのが遅れたシンバシ、今朝の時点で全校生徒に否が応でも存在を認知されているのだから、シリウスが絡みにいかない訳が無かつた。

カフエテリアの視線が其処に集中している理由を突き止めたテイオーは足早に騒動の中心に飛び込んだ。

「シンバシになにやってんのー!」

「あつ、テイオーさん……」

「オマエか……いやなに、皇帝サマのモノマネをするなんてどんな気狂いかって思つてな、直接見物しに来ただけさ」

シリウスはそう言つてシンバシを顎で指す。

こつちに顔を向けたシンバシとカイチョーの相違点は、耳飾りとメガネとオーラ。

それ以外の類似点全てが彼女の意図しないモノだというのだから驚きである。これを意図的にやっているとなれば、シンバシの言う気狂いというのは概ね間違つた評価では無いのかもしれない。

「……それにしてもオマエら、どうやら顔見知りみたいだな？ 思えば普段からアイツにベツタリなオマエがこんなに落ち着いてるわけもない。ハン、そういうことか」

浮かんだ疑問を自身で消化したシリウスは、再びカウンター席のシンバシに突つかか

る。
丸椅子を回転させ、体をテーブルからテイオーとシリウスに向けていたシンバシの顎に伸びる手。座っていたシンバシと立っていたシリウスの身長差の分だけ顎が持ち上げられ、息が届くほどまでに顔が近寄る。

黄色い悲鳴。

辺りの野次ウマ娘達から漏れ出た嬉しい悲鳴に、テイオーも何をしているのか理解するにつれて顔が赤くなる。

顎クイだ。まさか現実で見ることになるとは……。

シンバシの横で沈黙しているアグネスデジタルが見ていたら爆発していたかもしれない。
ない。

「悪いことは言わねえ。真似するなら別のウマ娘にしな、生半可な想いで背負えるもの

じゃあない」

「……。嫌です、私の背中に乗った想いは一人分じゃない」

「言うじゃねえか、面白れえ」

耳を絞つて、尻尾を立たせながらも平常時を装いながらそう返すシンバシ。

自分自身に向かつてシリウスから強い威圧感を向けられているというのに、頑なに自分を貫き通す姿。そんな姿が尊敬して止まないカイチョーの姿と重なって見えた。

見た目とかじゃない、心の在り方みたいな不定形なものが。

結局のところ只のそっくりさんだったシンバシへの認識がいま改められる。

彼女の想いはきつとカイチョーとは違うものだ、だけど目標の為に折れない姿、それは同じ。

「ねえ、シリウス」

「なんだ、言っておくがほっとくつもりはないぞ」

シンバシとシリウスの間と外野の間に隔絶した隙間が生まれる前に、咄嗟に割り込む。

テイオー自身の在り方に影響を与えた会長の走りは、当然のごとく多くのウマ娘に影響を与えている。

シンバシの姿がシリウスの逆鱗に触れたのは、彼女もカイチヨーに少なからぬ影響を受けているから、そうに違いない。同じシンボリの名を冠するシリウスにはひと際深いモノがあるのだろう。

だけど、シンバシにその思いを向けるのはお門違いだ。
なぜか。

シンバシの根底にはきつとシンボリドルフとは違うウマ娘がいるから……。オー
プリンキャンパスの日、カイチヨーに追い縋るシンバシは独自の走法で走り抜けた。

そっくりだからという理由でシンボリドルフに関連した思わぬ出来事に遭遇することはあつたのかもしれないけれど、走りには影響を与えることが無かった。

思うに、シンバシドルフが装いを変えないのは、憧れとか尊敬に由来するものではなく、自然体を維持するためなのだ。

——テイオーも先輩になるわけか……。

さつきネイチヤが言っていたことが脳裏に浮かび上がる。

困っている後輩を助けるのがカッコいい先輩の姿。

シリウスにも事情があるのかもしれない、シリウスが上手くいっていないウマ娘達を

取り仕切っているのは知っている、カイチヨーでも手を出せない分野がありながらトレセン学園がバランスを保っているのはシリウスのお陰でもある。

悪意じゃないのだろう、それどころか善意なのかもしれない。

そっくりだからと上手くいくものではない、自分自身と重ね合わせるな。

身近の三冠ウマ娘に眼を灼かれ、ドロップアウトした生徒たちを見て来たからこそ出せるアドバイス。

捻くれた言い方だったが、考えてみればそう捉えることもできる。

—— だけど、ボクはシンバシのセンパイになるんだ。

シリウスがしている根本的な勘違いを正すことが必要だ。

シンバシが憧れに宙吊りになっている訳じゃないことを証明する。シンバシに代わってチームのセンパイとして。

「シリウス、ボクと勝負だ！」

。
。
。

「一体何を言い出したかと思えば、オセロとは……。私とやり合うには分が悪いことくらい知ってるだろうに」

「くうう〜」

カフェテリアから場所を改めてチームスピカの部室内。

テーブルの上にはオセロ盤が置かれ、白一色に染まっている。シリウスが白、ボクが黒で始まったオセロ対決は圧倒的敗北に終わった。

負けた……。

対面したボクとシリウスを横から固唾を呑んで見守るシンバシと面白そうに見ているゴルシ。

「それで？ こいつがスピカに入ってることは分かったが、私を納得させるにはまだまだ甘いぞ？」

「まだまだ！ ゴルシ！」

「応ー」

オセロをゴルシに渡すと、ゴルシから将棋盤が渡される。

テーブルに置くには少し大きすぎるからと、いつの間にか用意されている座布団に正座し対面に座ることを促すと「いいぜ、乗ってやるよ」とシリウスも反対側の座布団に座る。

第二回戦、将棋対決が始まった。

「王手だな」

「くっ、参った……」

またもや鮮やかな手腕で敗北を喫する。

当然と言えば当然、シリウスが同室のナカヤマフエスタと何かを賭けて勝負している事は耳に入っていた。

ボクだってトレーニングの一環でゴルシと将棋をすることはあったが、シリウスは場数が違った、それが敗因かもしれない。

「まだまだだ……」

「テイオー、お前の心意気は分かった、したいこともな。だが結局は本人の意思だ、だろ？」

「……その通りです」

シリウスの言葉に反論を返す余地もなく、またシンバシからも同意がされる。

「わざわざありがとうございしました、でもここからは私の出番です」

「そう来なくちやな」

くいッと眼鏡を持ち上げて、先ほどまでにボクが座っていた座布団に陣取るシンバシ。

度の入っていない伊達眼鏡ではあるが、将棋盤を挟んでシリウスと向かい合う姿はとても様になっていた。

……もしかしたらかもしれない。

そんな期待をさせてくれるシンバシの堂々とした姿を、ボクはゴルシと確りと見守った。

「ハ、ハハハ、笑わせてくれるな全く。まさかここまで弱いとは……一瞬期待したのがパーじゃねえか」

「おいおいマジか……」

声を失うというのはこういう事なのか、ボクは目の前で起こった出来事を受け止めきれずに茫然としていた。

将棋のセオリーをガン無視した運びで一瞬にして牙城を崩されたシンバシは崩れ落ちている。

ボク以上のストレート負け。

ゴルシも珍しくうろたえている。

……そういえばボクよりも年下なんだよね……。

ボクだってレース展開を読む為の柔軟な発想を得るといふ目的でトレーニングに組み込んでこそのいるが、元々はやったことが無かった。

シンバシだってこれから将棋を学ぶことはあるかもしれないが、如何せん今日は入学

初日。

わけわかんない状態で対局したのだろう。

「アイツつぼさを出しといてその様か……はは、粗末な物真似だな」

確かにそうだ。

モノマネをするならシリウスが求めているように、緻密なところまで求めなければいけないと思う。

惨敗したシンバシに対して、失笑を漏らすシリウス、その姿にボクはチャンスを見出した。

——シンバシはシンバシである、シンボリドルフではない。

カイチヨーに憧れて真似をするウマ娘から、そっくりだけど自分というものを持つているウマ娘へと意味を逆転させるチャンス。

誰でも簡単にカイチヨーみたいにはなれない、シリウスが伝えようとしていることを逆手に取った発想。

カイチヨーのような完璧なウマ娘ではなく、完璧じゃないただ一人のウマ娘としてシリウスに認めさせる。

それがボクたちに与えられた勝利への道だ。

「まだだ、いけるよね！ シンバシ！」

「……勿論！」

ゴルシに目配せすると、待つてましたと言わんばかりに今度は床にマットが広げられる。

白地にカラフルな水玉模様が均等に並べられたマット、なぜか備品に有ったツイスターゲーム用のマットだ。

「本気か……？」

「ええ……？」

珍しく顔色を変えたシリウス。

ホンキも本気、マジと読んでもいい。

勝つまで続けるんだらうな、とは思っていてもまさかツイスターゲームをすることに
なるとは思っていなかったらしく、驚きをあらわにしている。シンバシも。

「やるって言ったらやるよ！ さあ動きやすい服装になったなっただけ！」
「つち、狂気の沙汰も一興か……、待ってろ！ すぐ戻る」

。。。

「それで……？ この衆目の中でやれと？」

「アハハ……。ゴメン、ゴルシが勝手に」

す。
ジャージに着替えたシリウスから零れる小言を甘んじて受け入れながら、辺りを見回す。

少人数で行うつもりだったツイスターゲームをスピカメンバーとシリウスの大所帯で行うことになり、スピカの部屋内で行うつもりが、外に出ることになった。

チームの集合時間が近づいてきたことも相まってスピカのメンバーが勢揃いしたところに、ゴルシの一言で新入部員歓迎オリエンテーションという名目でツイスターゲームが行われることになったのだ。

シリウスがいることにマックイーンが突っ込みを入れたけど、ゴルシ提案の事もあつて放置されてる。

他の部室にも人が集まり始める関係上、多くの生徒がチラチラと見物していく。
……ちよーつとボクは遠慮したいなあ。

「……まあいい、やるぞ」

「ハイ……お手柔らかにお願いします」

読み手はボク。

シリウスにとって負けられない勝負が始まった。

「今日は色々と遊んでくれてありがとうございました……」

「遊びか、そうだな……勝負だなんて言えたもんじゃない出来だった」

シリウスさんとのツイスターゲームを終え、次の二人としてウオツカさんとスカーレットさんの勝負が始まったところを眺めながら私はシリウスさんに声を掛けた。

今回の勝負も私が負け、負けではあるが将棋よりは白熱した戦いになった。

「……念の為聞いておくが、それが素か？」

「口調を除けば、ですが……」

シンバシルドルフになってから容姿の変化だったりはしていない気がする。

口調は馴染んでいけば崩れていくこともあるだろうが、他は今のままでいいと思つて
いる。本来のシンバシルドルフの為にも。

素である事を告げれば、シリウスさんは納得をした様子。

「なるほどな……。つまりその容姿で皇帝サマの事を全く意識してない訳だ、面白いな
お前。……アイツとお前を重ねるつもりは無いと先に言つておくが、普段見ない姿を見
たみたいで楽しめた」

「それは、良かったです」

「お前は弱い、だが私やアイツみたいに終わつたわけじゃない。これからだ、お前がお前
として強くなることを期待してるぞ？」

「……はい！」

「——お前のこれから、見てやるよ」

シリウスさんはそう告げてこの場から去ってゆく。

……どうやら自分はシリウスさんに認められたらしい。

果たして今日の交流が彼女にとってどう映ったかは分からない。

でも、私がギンシヤリボーイに強い想いを抱くように、シリウスさんが会長に抱く感情。大事なその感情を損ねるモノから外されたのなら嬉しいと思う。

ツイスターゲームの方に視線を向けると、読み手をしているテイオーさんがこちらをチラチラ見ていた。

シリウスさんが去って一体どうなったのか知りたい様子。

今日の新たな出会いを充実したものにしてくれたのは間違いなくテイオーさんだ。

テイオーさんが勝負を挑んでくれたおかげでシリウスさんとの溝は埋まった。

感謝を込めて精一杯の笑顔とサムズアップを送る。

グツジョブ、そう受け取ったテイオーさんも良かったと言わんばかりの笑顔とサムズアップを返してきた。

トレセン学園生活、波乱に包まれた一日目は何とか無事に終わりを迎えようとしていた。

波乱の二学期

異例の入学、それによって私を取り巻く環境は非日常へと姿を変えた。

「あつシンバシさん待つてました！ 早速食堂の方へ……つてアレ？ よく見たらその髪飾り、会長さん!？」

「ああ、よく気付いたな。アグネスデジタル……実は相談があつて来たんだが……」
「会長自らがわざわざ……聞きましょう！ 不肖アグネスデジタル、相談に乗らせていただきます……!」

私が登校する前や席を外している隙に、会長が中等部の教室によく足を運ぶようになっていたり……。主な目的はアグネスデジタルとの密会の為。

オーブンキャンパスで私がデジちゃんを連れまわした時に意見を交わして以降、自身の持つ夢と近い考えを持った「同志」として話を交わすようになったらしい。

無論それだけの為で高等部の彼女が中等部に乗り込んでいるわけではなく、私のフリをすることで、余り接したことのないウマ娘達との交流の機会を設けるようにしていたとのこと。

……会長が私と入れ替わり中等部の視察に回ることに早数十回、会長が声を掛けた生徒が私に話しかけるようになるという好循環が生まれつつある。

編入生が孤立することなく馴染めている事。そして何処かのそっくりさんがオーラを放たずに自然体で同学年のウマ娘達と接しているからか、『シンボリドルフ』に対しても気楽に声を掛けられる生徒が増えていると、会長は大満足だった。

対して私も、良くも悪くも『シンボリドルフ』の影響を受けるようになっていた。異例の全校朝会での発表によって事前に勘違いの芽を摘んでいたものの、それでも会長に関連付けて考える者は居るもので……。

「その眼、いいねえ。自信に満ち溢れたアイツを完膚なきまでに打ち負かしたらアイツも私だけにそんな眼を向けてくれるのかね……」

「この目は元からなんですけど……シリウス先輩」

「……っく、その見た目でんなこと言うなんておもしろえ……！」

「……取り敢えずこの後は約束があるので、また後で……」

シリウス先輩には、初対面でいきなりクイツと顎を持ち上げられた事から妙な付き合いが生まれていた。

元々会長から『絶対に絡まれる』と忠告されていたので、存在を認知していた彼女ではあつたけれど、想像していた以上の速さで私の前に現れた。

同じ中等部Cクラスのデジちゃん、トレセン学園に入学して初めての昼食を食べる食堂に向かう最中での遭遇、あまりに突然起きた出来事にデジちゃんは語彙力を失った。

明らかに自身と会長を重ね合わせて見ていること必至な彼女を前にあまり慌てることもなく返事をしたことから、『面白いヤツ』認定されて事あるごとに絡まれるようになってしまっていた。パワハラに慣れてしまった弊害である。

クリスエスさんも時折無言で見つめてくるようになり、シンボリの名が付く彼女たちからは完全に見分けられるようになっていた。

編入は生徒だけではなく、トレーナーたちにも大きな波紋を広げた。

トレセン学園内に広まっていた『ドツペルゲンガー』の噂は、初夏に入る前のオーブ

ンキャンパス頃から爆発的に広まった。

それは食堂に現れた瓜二つの二人を見たウマ娘達や、オープンキャンパスの日だというのにチームリギルの走りを見学しに来ていたトレーナーを中心に発生したのだが、トレーナーの中にそれを信じる者は少なかった。

眉唾物だと、シンボリドルフの再来が来るのなら是非ともうちのチームに迎え入れたいなどといった感じに、酒のつまみの与太話としてしか一般トレーナーの中では語られず——そして実際に噂の的である会長の口から語られた時には耳を疑って目を疑った。

その日の学校終わりに藁にも縋る勢いで大勢のトレーナーが殺到したのは予定調和の必然だったが、その時にはもうスピカのメンバーに米俵の様に抱えられたその瞬間に夢は潰えたのだ。

練習風景の中に新しくシンバシが混ざり込むようになった事に、情報に乗り遅れた卜レーナーたちは膝から崩れ落ちた。

そしてチームスピカ。

ただでさえ所属しているスペシャルウィークとサイレンススズカの活躍が轟き渡っているというのに、次にはメジロマックインとトウカイテイオーが、その次にはウ

オツカとダイワスカーレットという確約された次代の強豪チームにまた新たな加入者が現れたと、スピカは一気に話題の中心に躍り出たのだ。

次のウマ娘とぶつけて勝てないのが決まっているのならその次にぶつけると、自分のチームに所属するウマ娘達と克ち合わせる相手を見極めるために偵察が相次いだのだ。

何せ後ろに控えるのはシンバシだけではない。中等部だろうが高等部だろうがデビュー戦を済ませるまでは一律でCクラス。

三冠を果たしたナリタブライアンの姉であるピワハヤヒデがまだデビューしていないように、ライバルと自分の全盛期を見極めたうえでのデビューをする者もいる。

逆にスペシャルウィークのように、入学早々何も知らない状態でデビューするウマ娘もいる故に、どの位仕上がっているかを見極めることは大事な仕事だった。

———そんな、全ての者に混乱を齎した朝会から始まったトレセン学園の二学期は、多分に波乱に見舞われながらも無事に終わりを迎えようとしていた。

「あつ、シンバシ！ 今日の練習メニューは自習だつて！ よかつたらボクと併走しない……………」

シリウスシンボリから逃げた先での知った顔との遭遇、相手はトウカイテイオー。

スピカの面々とは皆一様に仲良くさせてもらってはいるが、その中でも取り分け良く接していたのはテイオーだった。

会長に似ているから。それが一因、ドツペルゲンガー事件を起こしたこともあり当初は苦手意識をもって距離をとって観察されていたのだが、何時しか彼女の方から声を掛けてくるようになって今ではこんな感じに馴染んでしまった。

……多分練習であまり会えない会長の代わりとして妥協したんだろう。

「いいんですか？ だったら是非！」

「……うう~~~~ん、むず痒いよお!! もつと崩してつていったじゃん！ もう一回!!」

同じ中等部同士堅っ苦しく先輩後輩なんて言いっこなし！ と言われはしたものの。癖と呼ばれるものは直そうと思つてすぐに直せるものでも無いから癖なのだ。

何せ、この口調は社会に出てから染みついた処世術でもあるわけで、ウマ娘の本能で変わった部分を除いた自分の中の数少ないアイデンティティーを崩す事は、自分が自分ではなくなる気がして気が引けていたのだった。……崩した方が年相応だからいい事なのかもしれないけれども。

とはいえメジロマックイーンやシンボリルドルフの様に名家として礼儀作法を学んだわけでも無い。自分がどうなるかというのも、シンバシルドルフには関係のない事。

来るかどうかもわからない『シンバシルドルフ』の中身が帰還を果たした時の為、そして何よりも目の前でいたずらっぽく笑みを浮かべたトウカイテイオーの寂しげな姿を見たくは無かったから。

私は年甲斐もなく年相応な声を上げた。

「んん……、本当に!? 私嬉しいよ、ぜひ一緒にやろう!? 今日も頑張ろうね!????」

「うわあ……」

悍ましいものを見たと言わんばかりにジト目を浮かべるトウカイテイオーに、負けじとジト目を送り返す。

……正直なところ、自分もキツイと思っているのだ。

「つ……無理したのに……」

「ごめん、会長の顔と声でそんなしゃべり方するって、ダイブ難しいんだね……。崩すって言ってもカイチョーみたいな話し方でいいよ」

「すまない、やはり私は会長の口調よりも通常の口調の方が好調で、長時間この調子だと不調になる兆候があるんだが」

「いーややつぱりその口調だよ、練習終わりにはちみー奢ってあげるからさ！ 今日一日そのままにしてみよ！」

「ええーっ、でも「お願い！ 先輩命令!!」……わかりまし「ん〜？」……わかつたよ、テイオー」

「よろしい！ じゃまた後でね〜！」

良い落としどころ、だったのかもしれない。

お互いに傷跡も浅い結論を導き出し、すっかり機嫌をよくした様子のトウカイテイオーは去ってゆく。

「……あんなに懐かれるようなことしたか、私は？」

頭の上に疑問符が乗っかって耳が潰れる。

辻無理難題を浴びせかけてきたテイオーは、まるで盆休み頃に現れる手のかかる甥っ子姪っ子の様だ。

の。 スキージャンプペアに参加できる年齢ではなく、成長して活発になった頃位の年齢

そう思い始めるとなおさら強く刻み付けられていくもので、決して嫌なわけではないが何処かむず痒い気持ちになった。

(私も急がなきゃな……)

トウカイテイオーが去った方向を暫く眺めた後、約束を思い出し食堂へと向かった。色々巻き込まれたから昼食の時間は短いぞ。

。。。

「すまないデジちゃん、……待たせてしまったかな？」

「また会長さん!? ……つて今度こそはシンバシさんでしたか! いいえ滅相もない!

デジたんも今ちようど来たところですよ!」

「その様子だと……会長にあったのか?」

「それは……ハイ、ここだけの話なんですけれど、一般のウマ娘ちゃんたちの為のレース大会で解説を頼まれて……」

「へえ! 興味深い。ランチを食べながら話を聞いても?」 「どうぞどうぞ!」

そう言つて対岸の席を差し出すデジちゃん。

彼女が席を取つてくれていたお陰で、お昼時で混雑しているカフェテリアでも遅れてやつて来れた。

軽く礼を言いながら席に座り、箸を手に取つた。

——今日のランチはCセット。

彩の良い和食が味わえる、お気に入りなのセットだ。ちなみにウマ娘基準で小盛り。

「それでは早速、と言いたいところですケド……、お聞きしたいことが有るのですがよろしいでしょうか」

「構わないが、畏まってどうかしたか？」

「会長さんみたいに威厳のある口調、瓜二つな事もあつてとてもお似合いなんですけど……、いつも喋り方を崩さないシンバシさんに一体何が!？」

「まあ……、些細な事だよ」

語調を崩さない人物と思われても無理はない、何せ学生を卒業してから何年ものブランクがあるのだ。

寧ろいきなり砕けたら心が耐えられない、何時かは氷解していくことを信じ、慣らし運転で行くのがいつしか自分の方針になっていた。

トウカイテイオーに今日一日この口調でいると言われた事を伝えれば、デジちゃんの脳裏に何か物語が造り上げられる。

「チームリギルとチームスピカ、常に共には決していられないまさにロミオとジュリエット！ まさかテイオーさんはシンバシさんに会長さんを重ね合わせて……？ ほわああ……むり、尊い……」

「多分違うと思うが……。まああの子の為になるならそれでもいいさ」

語彙力を失っているアグネスデジタルを前にそう呟き、料理を口に摘み入れた。

トウカイテイオーがデビューしたのは今月の始め、そして今週末の日曜日には次のレースが控えている。

デビュー時には一番人気で快勝したものの、それでも勝負である限り何が起こるかわからない。次のシクラメンステークスを前に緊張していない訳が無いのだ、同じチームのメンバーとして出来ることはしてあげたかった。

「醜態を見せてしまつてごめんなさい……！　ちよつとデジたんには眩しすぎたようですよ……」

「……サングラスはあるぞ」

「お借りします……、あつ見えました。……でもやつぱりそつくりですよね！　このアタシの目をもつてしても雰囲気と眼鏡が無かつたらわかりませんでした……」

「伊達だけどね」

「ほえ〜」

そう言つて腰まで伸びた髪をまとめ上げて髪の下に隠された眼鏡の柄を頭から外す。机に置かれたシンブルなデザインの眼鏡を見てデジちゃんは興味深げに声を上げた。

「私と会長と見分けやすくするために買ったんだが、これがまた使いやすくてね。走るとき泥や風除けになつて目が乾かないんだ」

「レースでも使う、と……もしや眼鏡を活かした勝負服を考案していたり……？」

「……いや全く」

デジちゃんの言葉に私が気まずい声を漏らせば、とても残念そうな声が帰ってくる。

勝負服という文化に馴染みが無いというべきか、自分自身を着飾る事に抵抗があると
いうべきか……。

眼鏡に關しても泥除けに便利ではあるが、万能ではない。いざとなったら外すくらい
で行きたいというのが自分のスタンスだった。

「でも……確か会長さんって私服の時は眼鏡してませんでしたっけ」

「ああ、プライベートだと逆になるんだ。入学早々に会長自らが府中にあるお勧めの用
品店を紹介してくれてね……まあ、その時にはもう伊達眼鏡は用意していたから本人に
は了承を得てこんな形になったんだ。学外では眼鏡が逆転するよ」

会長の眼鏡について、情報通であるデジちゃん知らない訳もなく。見分けるための
眼鏡が効果を為さない事を目敏く指摘してきた。

眼鏡以外にもプライベートなら服装が判断材料に……ならないかもしれない。彼女
の服装は学生とは思えない落ち着きを纏っていたし。

「その時の話も、……ッ聞きたい！ 聞きたいけども時間が無い……！ ううくくつ
!!!! ……アタシの話に戻りましょうか」

「……また今度話すよ」

「ぜひ!!」

死ぬほど名残惜しそうにしながらデジちゃんは食い下がった。

デジちゃんがどういうウマ娘かは良くわかっていたが仕方ないのだ、後十分もしないうちに午後の授業が始まる。

「……大分話の腰を折っちゃいましたね。年明け早々に多摩川にあるコースで草レース大会があるんです」

「多摩川って、すぐそこなの?」

「ハイ、一般のウマ娘ちゃんたちの晴れ舞台としてアタシも前々から目を付けてたんですけど、今年はURAが運営に関わるようになったみたいで……」

「それで運営に携わる会長から声が掛かった、と……」

多摩川の河川敷。

そこはトレセン学園の生徒にとっても、それ以上に私にとっても関係が深い場所だ。朝練としてサイクリングロードを走ることもあれば気分転換に散歩することもある。

私がかむしやらに走っていたのもここであり、初めてトウカイテイオーと出会ったのもここだ。

それにトレセン学園には寮があるにもかかわらず、未だ自宅通学の私にとっては通学路のこの道。

草野球やサッカー、ラグビーなどのスポーツができるスペースのことは知っていたが、草レースができる場所など知りようも……。

——いや待てよ。

思い当たりは一つあった。東京競馬場や学園のコースと比べるとあまりにも小さいコース。

一周1200メートルに届くかどうかの馬場状態悪のほぼダートコース。

私が最初に走ったあの場所、走る喜びだけで何も考えずに駆け回ったあの場所。

クリスちゃんとひたすら走ってたあの名前も知らないグラウンドのコースだ。

「それって、ここから十キロくらい離れた所だったりはないか？」

「おお！ 良くお分かりで……。そうです！ そこで行われる大会はその名も多摩川グラウンド草競バ大会、通称……」

「コスプレステークスです！」

ストレッチと与太話

「レースに出たいだつて？」

驚いた顔で言葉を復唱してくる沖野トレーナー。

驚きが多分に混じるのも無理はない、今のチームスピカの方針はトウカイテイオーとメジロマックインンをレースに出させて勝利の栄冠をつかませること。

無論私もそのためには協力を惜しまないつもりではあるが、いつも走っていたあの場所で行われるレースと聞けば興味は膨れ上がるという物。

「レースと言っても、UR Aのトウインクルシリーズの公式つてわけじゃなくてですね……なんて言ったらいいんですかね？ アマチュアのレースが来年の初頭にあるらしいんです」

「アマチュア……ねえ。確かにシンバシはデビューしたウマ娘と遜色ない地力がある、ダンスは兎も角、練習も卒なくこなしているからस्पミたいにデビューを早めても良い

とは考えていた。だが……」

沖野トレーナーはそう言うと、沈黙で言葉を濁した。

今すぐデビューするともれなくチームスピカの仲間たちと克ちあうことになる。沖野トレーナーは、言外にそう言っているのだ。

すでにデビューして先月の菊花賞を制覇したメジロマックイン、そして今週末の日曜日にシクラメンステークスに出走するトウカイテイオー。

きっと彼女たちは夢の舞台に立つ、うれしいことにトレーナーは自分にも同様の期待を抱いてくれていた。ダンスは兎も角。

会長との模擬レースか、それとも入学後の練習風景からか、期待しているだけに今デビューさせるのは憚られる。

未だ編入して一年もたつておらず、ゴルシやウオツカとダイワスカーレットも後に控えている。

彼女らよりも先にデビューさせるのも手だとは考えてはいたが、技術面でまだ成長の余地のあるシンバシをレースに出す選択肢を選ぶには時期が早過ぎるというのがトレーナーの判断だった。

「しかしレースを体験していた方が自覚できることもある……か。シンバシはそのレースで本番同様の想定外な場面を学びたいってことでもいいのか？」

「そうですね、チームのみんなと走っているときみんなの癖が分かかってきて対策の仕様ががあるので、マークしていなかった相手と競い合うって状況を体験してみたいんです」

「……確か小さい頃にレース経験が無いんだっただか……。分かった、俺は二人のトレーニングに集中する関係上余力添えできない。本人には言っとくから代わりにマツちゃんに付き合ってもらえ」

「わかりました！」

「くれぐれも無理な走りはするなよ！」と締めくくられた言葉に感謝を告げてトレナー室から出た。

今頃練習用のコースでテイオーが首を長くして待っているはずだ。ウマなのかキリンなのかわからない存在になったテイオーを想像して可笑しくなりながら、私はスピカの部室へと足を運んだ。

。。。

部室でいつもの練習ジャージに着替え、芝生のコースに辿り着くと既にスピカのメンバーたちは揃っていた。

ダイワスカーレットとウオツカが勝負していたり、ゴールドシップがスペシャルウィークを巻き込んで珍妙な事をしている中でポツンと一人立っているトウカイテイオー。

捜しているものがあると言わんばかりにあたりを見渡していた彼女の青い瞳が自分を捉えると、へにやりとなっていた耳を立ち上がらせてこちらに走り寄ってきた。

「もお〜！ 遅いよ」

「ごめんなさい……。ちょっとトレーナーに用があつて」

「ふうくん……？ 僕を差し置いてトレーナーと何話してたの……つていうか口調戻ってるしー！」

「あ……、すまない」

話し言葉でも得意分野を伸ばして苦手なところは放置するのはトレーニング同様良くない、そうテイオーは教えてくれたというのに気が付いたら口調が戻ってしまったているのだから、癖とは厄介なものだと思う。

うっかり崩してしまっていた口調を戻し、詫びを入れれば「しょうがないなあ」とテイオーはわざとらしい態度で許してくれた。

「……まあトレーナーと話すときには崩せないタイプだもんね、シンバシ。ヨシ、今日の練習中は引き続きその口調でいたら見逃してあげよう！」

「うん。寛大な心、感謝するよテイオー」

「ふふーん。ボク、待ちきれなくてうずうずしてたんだから、早くはじめよう!!」

「やっぱりテイオーは体が柔らかいな」

ターフの端、走っているウマ娘達の障害にならない場所に陣取ると二人でストレッチを始めた。

向かい合つてのストレッチ。最初は屈伸などの一人で出来る運動から、次いでペアになつてする運動へと移行する。

そんないつもの手順を手を抜くことなく取り掛かり、伸ばす間、手持無沙汰になった

視界を前方に向けると可動域ぎりぎりまで体を伸ばした姿になったトウカイテイオーが居た。

「そりゃあもうボクの自慢だもんね！　そういうシンバシだつていいところまで行つてるじゃん、ボクには敵わないけど！」

若干照れた様子で茶化してくるティオー。

彼女の言う通り、シンバシもできる限りストレッチを欠かさずにいたお陰で結構体を伸ばせるようになっていた。

流星に才能の域に至っているトウカイテイオーの体までとはいかないが、シンバシがウマ娘じゃなかった頃を考えれば気持ち悪くなるくらいには柔軟な体だ。

「柔軟な体をバネにして、走る勢いを衰えさせない。私も参考にしたいと思つてはいるんだが、ティオー程の恩恵はなさそうだな」

「そうだね。ボクの場合はこの走りを極めれば無敗の三冠だつて目じゃないと思うけど、シンバシは走法がまず違うから」

ストライド走法とピッチ走法。

トウカイテイオーのジャンプする様な走りは足が接地する回数を減らして、勢いの減衰と体力消費を抑制させる走り。

対してシンバシやギンシャリボーイがしている走りは速度調節のしやすさや足自体への負荷が小さい代わりに、体力消費が激しい走り。

長距離向けのテイオーの走法と短距離向けのシンバシの走法はまさに真逆だと言える。

「ボクの奥義——名付けて”テイオーステップ”は誰にも負けない。シンバシがカイチョーと走った時に見せたあの走りにもね。……せつかくだからあの走りにも名前を付けたら？　なんならボクが着けたげよっか」

「……。厚意に甘えたい所だが、あの走りは借り物なんだ。仮に名付けるとしたら……『スシウオーク』だろうか……」

「え」

「ボクの走りがステップならシンバシのはウオークだ」

オープンキャンパスの日に初めて見たシンバシの走りを思い出してトウカイテイ

オーも納得する……わけにはいかなかった。

話の流れを鑑みて、テイオーステップから着想を得て考えたのなら、テイオーの部分に名前の『スシ』が入ることになる。

スムーズにシンボリドルフとそっくりでありながらよくわからん名前のウマ娘に憧れるウマ娘像、が目の前のウマ娘に対してテイオーの中で築かれようとしていた。

「……前々から気になってたんだけど、シンバシの憧れのウマ娘って誰なの？ ボクみたいにならなくて公言してないから気になっちゃった」

「多分知らないと思うが、ギンシャリボーイというウマ娘だ」

「銀シャリだから寿司……えっ？ 松岡サブトレーナーの所の子？」

トウカイテイオーはスシウオークに関しては一先ずの納得をした。

しかし今度は憧れのウマ娘に対しての疑問。聞き覚えが無いわけではない名前への在り処は思ったよりも身近なところにあつたが、逆にわからなくなっていた。

ギンシャリボーイことクリスは、シンバシドルフに憧れるまだ幼いウマ娘である。

嘗てトウカイテイオーが日本ダービーでシンボリドルフの走りに魅入られた時とほぼ同じくらいの子だ。

その事が気になって尋ねてみれば、シンバシは神妙な顔を浮かべる。

「……実は、今年のダービーに行った時に不思議なものを見たんだ」

「不思議な物……?」

ダービーの時の光景を思い出すかのように、目を伏せて呟くシンバシルドルフ。

見た目のせいで奇妙なくらい様になったシンバシの前に、トウカイテイオーも次の言葉
葉を固唾を吞んで待った。

「あの日、私は夢みたいいなレースを見た」

語んじた夢のレースの語り部と化したシンバシ。

日本ダービーを夢の舞台だというウマ娘は数多くいるけれど、シンバシの日本ダービーの日の語り草は、テイオーの見たそれとは別の事を言っているように感じた。

それは決して間違いではなく、続けられた言葉には全く知らないウマ娘達の事が語られてゆく。

黒いリーゼントをした紫と白の特攻服姿のウマ娘、妙に際どい赤色の勝負服をした白

いウマ娘、途中で転倒したから近くで見えなかったウマ娘、スペインっぽい意匠の緑色をしたメンコのウマ娘、ストライプ柄の葦毛っぽいような緑色の勝負服を着た褐色のウマ娘、(胴が)長いウマ娘、(首が)長いウマ娘。

そしてその中で勝利を飾ったウマ娘。

赤と黄、赤い着物に黄色い袴、襦袢や帯などの細部は白の和服に似た勝負服を着た彼女の名前こそギンシャリボーイ。

ダービーとは別の幻のようなレースを制した覇者。

「その子の走りなんだ……」

「多分、そうだ。それでどこかから聞こえてきた実況で言っていた名前を反復してたら……クリスちゃんが」

名前を知った後に考えると、勝負服はまるで寿司下駄に差し出されたマグロ寿司のようだった……。と感慨深そうにボケるシンバシを前にテイオーはあることに気付く。

「もしかして、未来のクリスちゃんだったたりしてね〜!」

「そんなこと……あるかな」

「あるかもよく？ だって僕が会長に出会ったときもシンバシに会ったときも、運命的なものを感じたもん。もしかしたら三女神様がした運命のイタズラかもね！」

多くのウマ娘達が運命的なものを感じた相手に安心感を抱いたり憧憬を抱いたり、相性が良かったりするものだというトウカイテイオーの言葉を前にシンバシは思考の淵に居た。

夢の彼方にある景色、その先で待つ彼女が私を慕ってくれている彼女と同一人物なら、運命は確かに彼女と自分に切っても切れない程に結びついている。

自己満足だった走りを広げてくれたクリスマスちゃん、走り続けた先に辿り着く景色を見せてくれたギンシャリボーイ。

それはシンバシの世界が広がった切欠の両方に『ギンシャリボーイ』が関わっているということ。

与太話と頭ごなしに言えない程、運命のイタズラはとっくに味わっている。ならばそういう与太話を信じて生きてみてもいいかもしれない。

「だったら、なおさらクリスマスちゃんの想いに応え続けなければ……」

憧れや期待が込められた応援に背中を押されたあの日の模擬レース。

視線に込められた想いはとても、心強かった。

だけどそれだけじゃないとしたら、自分の前を走ったあのウマ娘が想像通りの存在なら——私はギンシャリボーイに背中を押されて手を引かれた。

なんとも至れり尽くせりだ、足を向けて寝られないなとシンバシは苦笑いを浮かべる。

「でも、テイオーはどうしてこんな妄想じみたことを信じてくれたんだ？」

「あの日のキミの走りを見て、ウソだろメイシンだろなんて誰も言えないよ。それに、ボク含めウマ娘達にとつて想いはとても大事なものだからさ。——三女神の時代から想いは遙かな時を超えて僕たちに受け継がれている、そう考えたら未来から遡る想いだって有ってもおかしくないんじゃないかな」

それはトウカイテイオーの経験上の答えだった。

夢の原風景、シンボリルドルフがダービーで三冠にリーチを掛けたあの日、トウカイテイオーは奇跡的なものを感じた。

まるでシンボリルドルフが走る景色を目撃したこと自体がまるで奇跡だと言わんば

かりの感覚、本来なら絶対叶わない事が叶ったような、きつと実際に目撃していなくても憧れを抱いて無敗の三冠ウマ娘を志すようになっていた筈のトウカイテイオーを後押しした出来事。

三女神さまたちはどうやらお節介が好きらしいというのは、まだ幼いテイオーにでもよく理解できた。

——いつか志す道の先にある景色、其処に立つウマ娘の姿を目撃する。

それがシンバシとテイオーが見た“夢”の共通点。

ボクはいつもあの時のカイチヨウの姿に励まされている。

シンポリドルフがダービーを制覇したあの日、彼女と話した時から変わることなく夢を映し続ける青い眼。想いは自分の時が近づくほどに強く鮮明になってゆく。

無敗で三冠を制覇した時、彼女を讃えるように京都競バ場に轟いた歓声が今度はボクの為に響き渡る、その時の為に。

「僕がシンバシに何か感じたのに対して、いつたいキミはどう思ってるわけ？ カイチヨウにもさ〜」

「会長か……。この容姿に名前だ、無理もないと思うが運命というより、作弄的なものを感じたな。逆にテイオーに対しては……。従姉妹みたいな感じかな」

「なんだよそれ〜！」

甥っ子姪っ子という言葉を飲み込んで代わりの言葉を吐き出すシンバシに、不服を申し立てるテイオー。

話しながらではあったが恙なくストレッチを終わらせていたので、彼女は勢いのまま立ち上がる。

「ヨシっ！ だったらシンバシから憧れの熱視線を浴びるためにも、早速併走トレーニングを始めるよ〜！」

先輩風を吹かせるテイオーに、吹かれるシンバシ。

チームスピカでは見慣れた光景が、今日も行われようとしていた。

「……ところで、トレーナーといった何の話をしたのかな〜？」

「……忘れてなかったか」

「当然！ 僕を甘く見ないでよね！」

はちみーと帰り道

「っ——はあ……」

併走トレーニングを始めて数時間。

十二月下旬の年越し前ということもあり、陽が落ちかけて橙色の光がトレセン学園へと差し込んでいた。

「お疲れ様、テイオー。今日は随分飛ばしたな」

「うん、だって明日には京都に現地入り、金土でコンディションを整えなくちゃだから全力を尽くして走れるのは日曜のシクラメンステークスまでお預けなんだもん。……ボクも大分限界なのになんでついて来れてるの!？」

「まあ、本当に無理な時の感覚をつかんでるからな……」

そう告げて思い返すのは、只の人間だったころの新橋の姿。

会社と家の往復だけで極限まで運動を削ぎ落した生活。自分から進んで運動する気になれなかったのは、遅刻しかけた時に全力疾走して地獄を見たからだ。

50メートルも走っていないのに暴れ狂う心臓、酸素を渴望して過呼吸になる感覚。とても気持ち悪かった。

ウマ娘になつてからは一度もその状態に陥つたことは無くなった。

極度の疲労に包まれたことはあれど、体が拒否反応を起こすなんてことは無くなつてしまった。

そんなこんなで、本当に無理な時の顔面に嫌な汗が伝う感覚は記憶の中のみモノとして私の中に息づいていた。

「もしかしてステイヤーの適性もあつたり？　ますます隅に置けないなあ」

「ステイヤー……か」

いつか挑戦する三冠目、菊花賞に備えての併走相手として非常に頼もしい後輩に笑みをこぼすテイオー。

対して私は、歯切れ悪くテイオーの言葉を反芻した。

——思い返せば、幻想の方のギンシャリボーイはマイルでのレースに勝つたウマ娘

だ。

私が憧れを抱いた走りは、1600メートルの中で披露された走りである。テイオーが言う通り、仮に私にステイヤーの気質があったとして、走法自体が適性距離の違うかもしれない『スシウオーク』を上手く扱えるかと悩みを抱えるのも無理はない筈。

『スシウオーク』を習得せしめるのが、夢の先への第一条件だと私は定めた。

未だ完成する目途の立たないこの走法を活かすのも殺すのも自分次第、むしろ自分の色に染め上げてしまえばいい。

想いばかり先走って、その事を失念していたのかもしれない。

「——じゃあ、今日はここまでにしていつしよに帰ろっか」

「……ありがとう」

急に黙り込んでしまった私を慮ってか、テイオーが心なしか優しい声でそう伝えてくる。

彼女だって近々のレースのプレッシャーに苛まれているだろうにと、無理させてしまったことを恥じて感謝を告げれば「なんだよも〜！もしかして本当は疲れちゃってたんじゃないの〜？」とわざとらしく的外れな茶化しが襲い掛かってきた。

。。
。。
。。

部室で着替えた後、私たちはトレセン学園から駅方面へと向かった。

寮から離れたその場所に向かう目的は蜂蜜とレモンの風味が広がるティオーお気に入りドリンクを買うため。

「併走トレニングに誘ってくれてありがとう。私もとても有意義だっ「もう無理しなくていいよ」——そっか」

「大分暗くなっちゃったな……、今日は練習に付き合ってくれてありがとうね！　これ、お勧めのフレーザーのはちみー」

両手に大きなサイズのドリンクを持ったティオーは、その片方を私に向けて差し出してくる。

「でも、私も貰っていいのかい？　度々口調が崩れてたけど」

「途中から集中が途切れて『くくだが?』みたいな雑な感じになってたし、ダジャレじゃなくて韻を踏んでるだけになってたけど、ボクのお願いにわざわざ付き合ってくれたんだもん。——ありがとね」

「さっ、飲んで飲んで!」と差し出されたLサイズのドリンクとテイオーの顔を交互に見合わせながら恐る恐る受け取る。

遠慮交じりに受けとったのを確と確認してテイオーは満足げに笑顔を浮かべた。

そして私は、お店のメニュー看板を見て凍り付いていたので硬い表情のまま口に含んだ。

——あ、あまい。

蜂蜜のしつこいまでの甘さが口の中に留まり続けている。

口の中で中々溶けなくて喉を通らない、固めとオーダーしていたからか……。

それでも気分が悪くならないのはレモンが絶妙なバランスで混ぜられているお陰だ
と思う。

留まった蜂蜜の甘ったるさをレモンの清涼感が押し流し、この味覚の暴力を胃の中へと押し込んでいった。

美味しい……のかな。

これは何処かの朗らかなラーメンと同種の産物だ、食べた後は一生食べる気になれなくなつて、でもしばらくしたら食べたい欲求に駆られる、そんな食物。

テイオーみたいにファンになる子もいるだろうと納得はするけど、ちよつと草臥れて濃い物控えてた自分にはキツイかなあつて。

「どう……？ はちみーとレモンのハーモニーが素晴らしいでしょ！」

「あ……ウン。甘くておいしいね……でもサイズはもうちよつと小さくてよかつたかなあ……」

「だめだよ〜！ シンバシだつて成長期なんだから我慢はキンモツ！」

これはダメだ。

テイオーは完全に善意で言っている。そして善意をないがしろにするのは心が痛すぎた。

飲みつぷりをにこにここと見守られている中、私はカップの中身を一瞬で飲み干した。

無事目的を完了した私たちは多摩川河川敷が一望できるサイクリングコースを歩いていた。

夜の河川敷を二人して並んで歩くなんてことは、テイオーが寮暮らしな事もあつて滅多にある事ではなかった。

「後味が凄いな……なにか口直ししたい」

「あはは！ ニンジンとか食べるのも乙だよね。……ねえ、ボクとシンバシが初めて会ったのってここだったよね」

「そういえば、ここだね」

陽が落ちて、辺りを照らすのは街灯と遠くに見えるビルの窓の光、そして多摩川を挟んだ対岸の道路を走る車の明かり位のモノ。

それらを鏡のように映す多摩川の水面だけが視界に映る。

初夏に入る前の朝、時間帯も季節も全く違うこの場所で二人は初めて出会った。

その事を思い出したのか、テイオーが懐かしむように目を細める。

「ボクがカイチョーだと勘違いしてき、いつもカイチョーと話すみたいに声かけて、シン

バシはあの時どうだった？」

「焦った」

「あはは、だよなー」

無論焦る。焦らない訳が無い。

当時はシンボリドルフや彼女の知己と出会うことなど一切考えておらず、不審に思われないようにその場しのぎの言葉を必死に考えたのだ。

「ちゃんと人違いだと言ったのに追ってくるしなあ……」

「だってまさか本当にそっくりさんがいるとは思わないじゃん！」

信じてくれずに追ってくるテイオーを言いくるめるために会長ほどのカリスマなら言わなそうなことを言ったのに、それが見事にシンボリドルフというウマ娘像と合致しているとは。このシンバシの目をもつてしても分からなかった。

トウカイテイオーから見ても疑いようのないくらい当時のシンバシはシンボリドルフしていたと、後々出会ってから痛感することになって……。

テイオーとの出会いは、クリスちゃんと同じかそれ以上に今の私を形成しているかも

しれない。

「あのときは言い逃れもできないくらいカイチョーだったのに、今じゃ簡単に見分けられちゃうもんね」

「それはテイオーが会長と良く見比べてるからじゃ……」

「違うよ、違わないかもだけど。 気づいてる？ 話し方がいつもと違うのに」

「……あつ」

テイオーの指摘に、思わず手で口を抑えた。

思い返せばさつきから口調が崩れっぱなしだ。

そのことに気付いた恥ずかしさから咄嗟に両手で口元を抑えてしまう、多分耳も大きく跳ねてる。

その姿を見てテイオーはいたずらっぽく笑顔を浮かべた。

「そういうところもカイチョーとは大違い！」

「ごめん、なお「直さなくていいよ」……わかった」

「最初はマックイーンの所みたいにお家柄かなって思ったから気にしてなかったんだけ

ど、スピカと一緒に練習したりしてるうちに取り繕ってるものか？ がれて来たんだもん」

「……見抜かれちゃってたか……」

スピカで過ごした三か月間、凝り固まった喋り方や振る舞いは、どうやら温かいトレセン学園生活の中で自分でも気づかないうちに解きほぐされてしまっていたみたいだ。

「でもさ、そっちの方がボクは好きだな。カイチョーと同じ見た目してるのに、走り方も努力の仕方も、笑い方も違う。ドツペルゲンガーなんかじゃなくて、これがチームスピカのシンバシルドルフなんだなくってさ！」

「……そっか」

シンバシルドルフを只のそっくりさんから名前と見た目が似ているだけの別ウマ娘へと押し上げてくれる言葉。

会長の最も身近にいるかもしれないトウカイテイオーから告げられた言葉は、そっくりさんとして本物の品格を損なわないように繕う必要はない、自分らしさを前に出せという激励だった。

『シンバシルドルフ』のように深く気にしていた訳ではないが、それでもテイオーの言葉が心を軽くしてくれた気がした。

「そういえばさ、あの日のランニングもだけど、シンバシはいつもあつちの橋より先の家まで帰ってるんだよね？ 大変じゃない？」

「うん、疲れてるときは流石にキツイ。けど朝にはウォームアップになるし、帰りはクルダウンにもなる。新年度になって会長と同じ部屋になるまでの残り短い期間だけだね」

「門限を考えなくてもいいのかあ……ちよつと聞き捨てならない事言わなかった？」

今学期と来学期が終わるまでの間は自宅通学。

それは編入準備として夏休みの期間を挟んでいるトレセン学園側の問題ではなく、シンバシ家としての意向だった。

シンバシがシンバシになる前にふさぎ込んでいた事実を踏まえて、両親は少し過保護気味になっていた。いきなり寮生活になって上手くやっていけるのか、そう不安になるのも無理もない。

自宅通学で様子を見てから慣れた頃に寮に入る。

そう入学前に話し合って決めたのだ。無論お世話になる寮長のヒシアマさんや、会長やエアグルーヴさん、デジちゃんやクラスメイトの皆、そしてチームスピカのメンバーとはうまくやっているから不安要素はない。

なんて、これからの生活の事を脳内で考え続けて逃避しても現実は移り変わる事は無く……。

テイオーの心胆の底からの深い追及には屈してしまう。

「カイチョーと同じ部屋ってどういう事!? 羨ましい!!」

「……生徒会と同じだよ、ややこしくないから」

「むむむう〜! 沢山遊びに行くからね!」

テイオーは納得できない感情を、チームの後輩の面倒を見る序でにカイチョーに会いに行くことが出来ると変換させた。

……きつと毎日のようにやってくるな……。

私は中々眠れない未来を想像して苦笑いを浮かべた。

からかい交じりの言動の後、トウカイテイオー暫しの硬直。

練習やはちみーで優先順位が低かった疑問が、寮の話題に割り込みを受けながらもよ

うやくメインとしてシンバシの前に姿を現した。

「……で、ボクは待つてたのに、トレーナーとはいったい何の話をしてたのかな？」

「忘れてなかったか……」

「当然！ 僕を甘く見ないでよね！」

「……実はレースに出ようかなって思ってるんだ」

「レース!?!」

人差し指を遠くに見える橋のアーチを超えた先に見えるビルに向ける。

指先の透明な導線を追ってテイオーの視線も多摩川の下流へと向けられた。

「私の家のすぐ近くでアマチュアレースを開催するみたいなんだ。開催する場所が思い入れのあるコースでさ、走れるって思ったらいてもたってもいられなくて……」

「へえ〜！ そんなところなの？」

「朝か夜以外はいつも誰かしらウマ娘がいて、様々な要因で踏み荒らされて常にバ場状態が重以上のコースかな……流石にレース前には一度整えられると思う」

年越しして半月ほどに行われるらしいレース。

記憶の限りだと同時期にはお守りなどを纏めてお焚き上げする行事があり、コース周辺の伸び散らかした野草たちはきつと櫓づくりのために綺麗に刈り取られ、辺りはレース時には参加者の待機スペースや観客席に様変わりしているだろう。

「だったらさ、行こうよ下見！ 年明け早々にさ〜！」

「えっ、いいの？ テイオーは確か新年も直ぐにレースが控えてるんじゃない……」

「うん。残念だけどシンバシの雄姿を見には行けない、だから代わりにその時に付き合っつてよ、ひとつ走り」

自分に出来た初めての後輩の初戦、それを見ることは叶わない。けれどその結果を充実させるためには協力を惜しまない。

前走での勝利は次の勝負を勢いづかせてくれる、その積み重ねできつと無敗の三冠は出来ているんだ。

——あの時もデビュー戦でも勝った、だから今度も勝つ。

人生で初めてのレースでの勝利は自分に勇気を与えてくれている、テイオー自身トレセン学園に入ってくる前にアマチュアレースを経験して勝利していたからこそ抱いた

想いをシンバシにも味わわせてあげたかった。

「……断るような理由もない、か。うん、だったら年明けして三が日過ぎたくらいがいいんじゃないかな」

「異議なーし！ 序でにニコタマ行こうよニ・コ・タ・マ!! マックイーンと限定はちみー飲みに行つたお店もあるし、一緒に見に行きたいところもあるんだ〜！」

指差したビルからコースの場所に勘付いた様子のテイオー。

実際“ニコタマ”はコースからかなり近かった。春の天皇賞より短いくらい。

「よし！ 次会えるのはその時だね！ 良いお年を〜！ スマホで改めて連絡する〜 !!」

「良いお年を……？ つお疲れ様〜！」

「またねー！」と手を振りながら寮の方向に駆けだしていくテイオーに自分も姿が見えなくなるまで手を振り返す。

レースは23日、疲労をため込んですぐ帰ってくるとは思わないが……まあ、そこは

人によるか。

現地には行けないけれど、ライブ配信や中継を見て応援しよう。——そして、その流れで今年の有馬記念を見るのだ。

得も言われぬ違和感を感じつつ、頭を振って気持ち切り替えた。

そして私は道を駆ける。さつき飲んだ蜂蜜レモンが疲れた体に過剰なまでの栄養を与えてくれている気がして、今日はいつもより速く帰れた気がした。

週末の再会

その週の土曜日、太陽がまだ真上に上がっていない頃に自分はたった一人で渦中のコースへと顔を出していた。

今日は沖野さんもテイオーの付き添いで京都に行っている事もあって練習はお休み。

……とはいえ沖野さんが松岡さんに話を通してくれていたこともあってテイオーとは別に、今日の午後にコースを視察をする約束をしていた。

思い切り走れる環境に身を投じて暫く経ったが、自分の心身は今も走りたくて居ても立っても居られないみたいだ、休日なのに。

意気揚々とそんな気持ちを膨れ上がらせてやってきたグラウンド。

トレセン学園の練習ジャージではなくお古の紫ジャージに着替えて河川敷まで赴くと、そこではいつもとは少し違う景色が視界に入った。

「……………今日は無理かな」

気持ちとは正反対の言葉が漏れる。

コースの状態を一言で表すなら“大盛況”だ。

週末はいつもの様にウマ娘達で埋め尽くされるグラウンドの中だが、それでもこれ以上ない程にぎわっている。

クリスちゃんほどの幼いウマ娘もいれば、自分よりも年上そうなウマ娘……？

ウマむすめ……もいる。

少し眺めてみただけでも老若問わず活発に駆け回っており、平時のグラウンドを知っている身からすると、少し異常だ。

多分みんな来年に行われるレースに向けたトレーニングをしに来ているのだろうが……。

自分がシンバシになったのは今年の3月頃な事もあって、この光景が恒例行事なのかわからない。

デジちゃんを知っているくらいだから開催はしていたのだろうけど、今年から関わることになったURR A運営の効果なのか元からなのかは自分だけでは判断できそうになかった。

トレセン学園に入ってからには殆ど学内のコースや学園周辺を走り回っていたこともあってここに来るのは久しぶりだったが、今日は走れそうにもない。

泣く泣く今日はライバルかもしれないウマ娘達を観察するだけに留めることにした。

。。。

そんなこんなで堤防の刈り取られた草の上に座り込み、辺りの景色を眺め続けて一時間を超えた頃、昼前になって多少は人が減るかと思つたらそんなことはなく、寧ろ逆にピクニック気分でコースの内側にブルーシートを引いて一家団欒をしている家族もたくさん視界に入るようになってきた。

多い。時間の経過とともに駅のある方角から続々とウマ娘達がやってくる。

「……………それにしても人が多くないか……………」

まさかここまで草レース大会が大事になっているとは想像もしていなかった…………。

前世の記憶の中の河川敷も週末となれば家族連れの人たちで賑わいを見せていたが、それ以上の熱気を感じてしまう。

「あら…………？　もしかしてシンボリドルドルフさんですか!？」

「えっ……?」

呆然と座り尽くしていると、突然真横から声が掛かって思わず尻尾が跳ねた。意識外からの声に、いつもの様に取り繕う余裕もないまま振り返る。

「わあ……! やっぱりそうですよね! よかったら握手してください!」

「ごめんなさい、人違いです……ってあの時の」

振り返った先にいたのは見知った顔の妙齢のウマ娘。

身に纏ったランニングウェアはスポーツブランドの中でも比較的手に取りやすい所のもので統一されており、カラーが統一されていた。

先ほどまで走っていたからか息を整える仕草をしている、大方彼女もこのコースに走りに来たのだろう。

前にも握手をせがまれたことを思い出して苦笑いを浮かべながら顔を覗き込むと、嬉しそうに浮かべている顔が記憶の片隅にあった顔と合致した。

「——えっ!? もしかして何処かで顔を覚えて貰えるようなことをしましたか……?!」

確かに会長なら一度顔を合わせた相手の事は忘れなさそうだけどそうじゃない。

彼女には一度お世話になったことが有ったのだ。

振り返った姿勢から立ち上がり、掛けていたサングラスを外す。

「もしかしたら忘れちゃってるかもしれないですけど……改めまして、新橋ではありがとうございました」

「えっ、……ああ！ シンバシちゃん!? ごめんなさい！ てつきりトレーニングしに来たシンボリドルフさんかと……」

何を隠そうこの人は新橋で倒れていた私を介抱した後、再び気絶して倒れた私を病院に連れて行ってくれた恩人。

偶然にも運んでくれた病院でナースをしていて、退勤していたのにもかかわらず両親が迎えに来てくれるまで良くしてくれた人だった。

「お久しぶりです、蓮都さん」

「びつくりしたあ……ジャージも着てるし本物かと……目撃情報もあつたから」

「会長さんも偶にこつちまで走ったりするらしいですけど、普段こころ辺で目撃されて

るのはほぼ自分ですね……」

「そっか……でも元氣そうでよかったわ〜！」

「ええ……おかげさまで」

まさかこの場所で再会するとは思っていない相手。

再会するたびに握手を強請られるんじゃないか、と思いつつも状況把握に必死になって有耶無耶にしていたお礼が出来た事を嬉しく思う。

ただ初対面の時の記憶を思い起こして、一抹の不安が脳裏を過つて苦笑を浮かべた。何時かシンバルドルフだと思われて声を掛けてほしいな……と。

「もしかして、シンバシちゃんもコスプレステークスに出るの？ ってゴメンゴメン、その格好の時点でそうだよね〜。いかにも不健康そうだったのに大分健康優良児になっちゃって……、本物のシンボルドルフさんと見分け付かないもんなあ」

「アハハ……、実はそうなんです、慣らしがてらちよつと走ってみようかなって来てみたら当日でもないのに凄い沢山人がいて……。もしかして蓮都さんって詳しくかつたりします?」

「うん、自慢だけど私このレースには結構参加してるから基本的になんでも答えられる

よ」

人の通行もあるサイクリングコースから逸れて、再び堤防の傾斜掛かった芝生の上に座り込む。

横に蓮都さんも座り、二人して喧騒の絶えないコースの方を見た。

「——で？ コスプレステークスの何が知りたいの？」

「名前の由来も気になりますけど、先ずはこの人の量ですかね……」

ウマ娘達が入れ代わり立ち代わりにターフを駆け抜けていく光景は壮観の一言だ。

疲れ果ててリタイアしたものが出た途端に、新たに走り出すウマ娘が一人。それこそトレセン学園にも勝るとも劣らない光景だと自分は思う。

「そうね……もともと素人が参加出来るレース大会って都心から近いとあまり無いのよね、世知辛い理由で。 神奈川とか千葉にもあることはあるけど、往來がきついのも

……」

「でしようね……」

目の前に広がるターフの広さだってトレセン学園のそれに比べると小さいのだが、ギリギリ川に接するかどうかでくらいにグラウンドを占領している。

確かに都心でここまでのスペースを確保するのは難しい筈だ、膨大な土地と財産を保有していたりしない限りは。

「大体はそう言った理由じゃないかしら、家族連れもね。あとは……此処に来れる子っで殆どが近くの競バ場にも行きやすいって事だから、そういう事よね」

東京競バ場に川崎競バ場、大井競バ場と日帰りできる距離にある競バ場、他にもネットの普及で各地のレースをどこからでも見れるのだ。

白熱したレースを見て闘志を燃やしたのは何もトレセン学園の生徒だけではない。ウマ娘が走ることを歓びとしている種族である以上、競走ウマ娘ではなくても走りたくて我慢できない事もあるかもしれない。

私はウマ娘の総人口を知らないけれど、東京には1000万人を超える人々が暮らしているわけで……。きっと私みたいな走る欲求に駆られた一握りのウマ娘達がこの場に集まってできたのがこの光景なのだ。

……今の私より上の世代の方は。

「じゃあ……蓮都さんもその中の一人で？」

「ご名答、と言いたいところだけど私はほぼ健康のためにやってるわね……。でも一応私のレースネームは通の中では有名なのよ!? 毎年いい記録を出してるんだから」

「名前は当日までの秘密だけどね!」とにこやかにウインクして見せる蓮都さんからは大げさに話を誇大しているようには見えなかった。

だとすれば、当日鎬を削って競い合う相手は彼女かもしれない。

……そういえば対戦相手とかはどう決めるのか知らなかった。

「あの、レースってどんな感じなんですか? 見たままだと年齢層が厚すぎて成り立たないと思うんですが……」

「……まさかポニーちゃんからおばあちゃんまで一緒に走ると思ってた? ——違うわよ、部門別にレースが分けられてるの」

そう言つて蓮都さんは懐からスマートフォンを取り出した。

暫く操作した後に差し出された画面、そこにはここで行われるレースの参加資格と距離が映し出されていた。

年齢種族問わず参加できる速歩レース、“ポニー”……一定年齢以下のウマ娘限定のレース、ヒトだけが走るレース、高齢ウマ娘限定レース、そして現役世代から高齢に届かないまでのウマ娘たちのレース。

それぞれ年齢や種族に合わせて距離が400メートルから800メートルと短めに設定されている中で、私と蓮都さんが恐らく参加するであろう部門だけは1200メートルと、少しだけ距離が伸びていた。

コスプレステークス——多摩川グラウンド草競馬大会は、協賛した団体や個人が命名した小規模のレース群の総称、なのだろう。

今年URRが関わっているので、多分命名権は一団体の総取りになるだろうが……。

「なるほど……。胸のつかえが取れました、私たちはライバルになるってことですね」

「そういう事になるわね……。容赦しないわよ?」

「はは、それはこっちのセリフです!」

先ほどまでのミーハーな雰囲気消散させて、火花を散らしてくる瞳。

自分にとつての二人目のライバルは、一人目にも決して劣らない気迫をその眼に宿っていた。

「……あつ、すみませんメールが……」

「つふふ、じゃあ私は練習に行かせてもらおうわね……混んでも休日しか追い込めないから……」

「ああつ……ありがとうございます、次はレースで……い！」

ジャージのポケットに入れていたスマホが震え、私の知らないレースの話は幕を閉じた。

耳と尻尾をへにやりと重力に任せ、哀愁を背中に纏って蓮都さんはコースの方へと下っていく。

社会人の哀しみを久々に思い出した私には、彼女を送り出すことしかできない。

暫くした後、自分に届いたLANEに目を通す。

——松岡さんだ。

『駅に着いたので、近くで昼食をとってから向かいます。それとクリスもついてきちゃいました』

松岡さんからそんな文面と共に、一枚の写真が下に続いていた。

駅の近くのデパートの中にあるアイス屋さんで撮ったと思われる写真。クリスちゃんがりプルプルサイズのアイスを片手に笑顔で映っていた。

『クリスちゃんのご機嫌そうでしたよ。満足いくまでごゆっくりどうぞ』——つと

簡潔に返信を送信して一息つけば、視界の先で走り込んでいる蓮都さんが見えた。

横では鼻に赤い絆創膏みたいなモノを付けた葦毛の小さなウマ娘が走っている。

……クリスちゃん位の子に見えるのに凄く走りだ。

小さい体躯でスピードを出すために、足をすさまじい速度で回転させている。

蓮都さんとその子は練習のはずなのに全力で走っているみたいで、ターフの上にいる他のウマ娘達を何度もぶち抜いていた。

二人の走り——特に、葦毛の子の走りは自分の走りに応用できる気がして、私は松岡

さんたちが来るまでずっと眺め続けていた。

。。。

それからしばらくして、良い風が通りすぎてゆく堤防に変わらず座り込んでいると視界の先に見知った二人の姿が目に入った。

此方から見えるという事は彼方からも見えているという事であり……すわ目があったかと思えば、片割れ——クリスちゃんが目に見えて猛ダツシュで自分に向かって走り寄ってきていた。

急いで立ち上がり、衝撃を受け止める為の心構えを脳裏に展開する。

「シンバシさんっ！　こんにちは!!」

飛び込んで来た衝撃に寄り添って私は右回りに回転する。

間もなくやって来たクリスちゃんを、勢いをいなしながら軽く受け止めた。

「やあ、クリスちゃん。ここで会うのは久しぶりだね」

「はいっ!!」

懐に潜り込んでかむクリスマスちゃんの頭を撫でれば、嬉しそうな様子が全身から感じ取れる。

この数か月、私がトレセン学園に入ったこともあり、走る欲求をトレセン学園の内部だけで満たせるようになった。

それこそ、家が近く通いやすいこのグラウンドにも余り足を運ばなくなった位には。クリスマスちゃんとは松岡さんに好意で土日も練習に付き合ってもらっている関係上、割と高頻度で顔を合わせていたが……嬉しそうな何よりだった。

「松岡さんは……あつ、来た」

「はあ、はあ……ふーっ……お疲れさま……」

「お、お疲れ様です」

クリスマスちゃんに置いてけぼりを喰らった松岡さんも無事に合流。

息を整えている姿を様子見しながら挨拶を済ませれば、自然と話題はいつものコースについてシフトする。

「あわよくば満足するまで走らせたかったんだけど、この有様じゃ無理かなあ……」
「……私もそう考えてたんですけどね……」

若干残念そうに松岡さんが声を漏らす。

「彼もここまで混むのは想定外だったようで、先ほどの自分と同じ結論を導きだす。その答えを押し通すのは最早不可能だと先んじて理解していた私は、あいまいな返事を零した。」

「お父さん！ 走ってきていい!?!」
「えっ」

クリスちゃんはその事お構いなしに行きたがっている。
行きたがっているのだ。

「……行きますか?」

松岡さんにそう問いながらオールバックに髪を掻き上げ、サングラスを着用する。めちやくちや雑な変装だけど、前髪が隠されるだけで案外バレないのでなかなか気に入っていた。

……クリスちゃんを止めるのは私には無理だ。

「……そうだね。——くれぐれも気を付けて走るんだぞ?」

「うん!」

松岡さんの許可も得て、やったーと全身で喜びを表現しながらターフに走り寄っていくクリスちゃん。

未来のクリスちゃん——“ギンシヤリボーイ”は揺るがない芯の強さを持っている。それは個々が強い領域を持っている中で一歩抜け出すことが出来た姿からも窺い知れるが……。

どうやらそれは今のクリスちゃんも変わらないようで……。

一度決めたら転んでもただでは起きないのだ、この子は。

その最たる例として——ゴルシちゃんの新鮮料理を食べて以降、回る寿司屋では満足いかなかった彼女は、ある日松岡さんとゴルシちゃんを伴って大海原に漕ぎ出したの

である。

その日の夕方、息も絶え絶えといった様子の松岡さんを傍らに、ゴルシちゃんとクリスちゃんは満足げな様子で練習終わりのチームスピカに現れ、再び海鮮パーティーが開かれたのだ……。

もしギンシャリボーイ違いであつてもこの行動力には目を見張るところがあるので見習いたい。

……ちなみに魚はとても美味しかった。

「シンバシさ——ん！ こつちこつち〜！」

「あはは……呼んでる……じゃあ私も走ってきますね」

「シンバシさんも気を付けてね、接触事故は多いから」

心配は余所に、クリスちゃんは群れを掻い潜ってコース上を走り始める。

集団に自ずから潜り込む姿勢は、気圧されて走る欲求を抑え込んだ私とは違い、むしろ普段よりもいきいきとしているように感じた。

——全く、この子には頭が上がらない。

走り方から心持ちまで、何もかもを教えてもらっているような気がして、私も後を

追ってコースの中に入り込んだ。